

中田遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告49

I 中田遺跡（第5次調査）

II 中田遺跡（第6次調査）

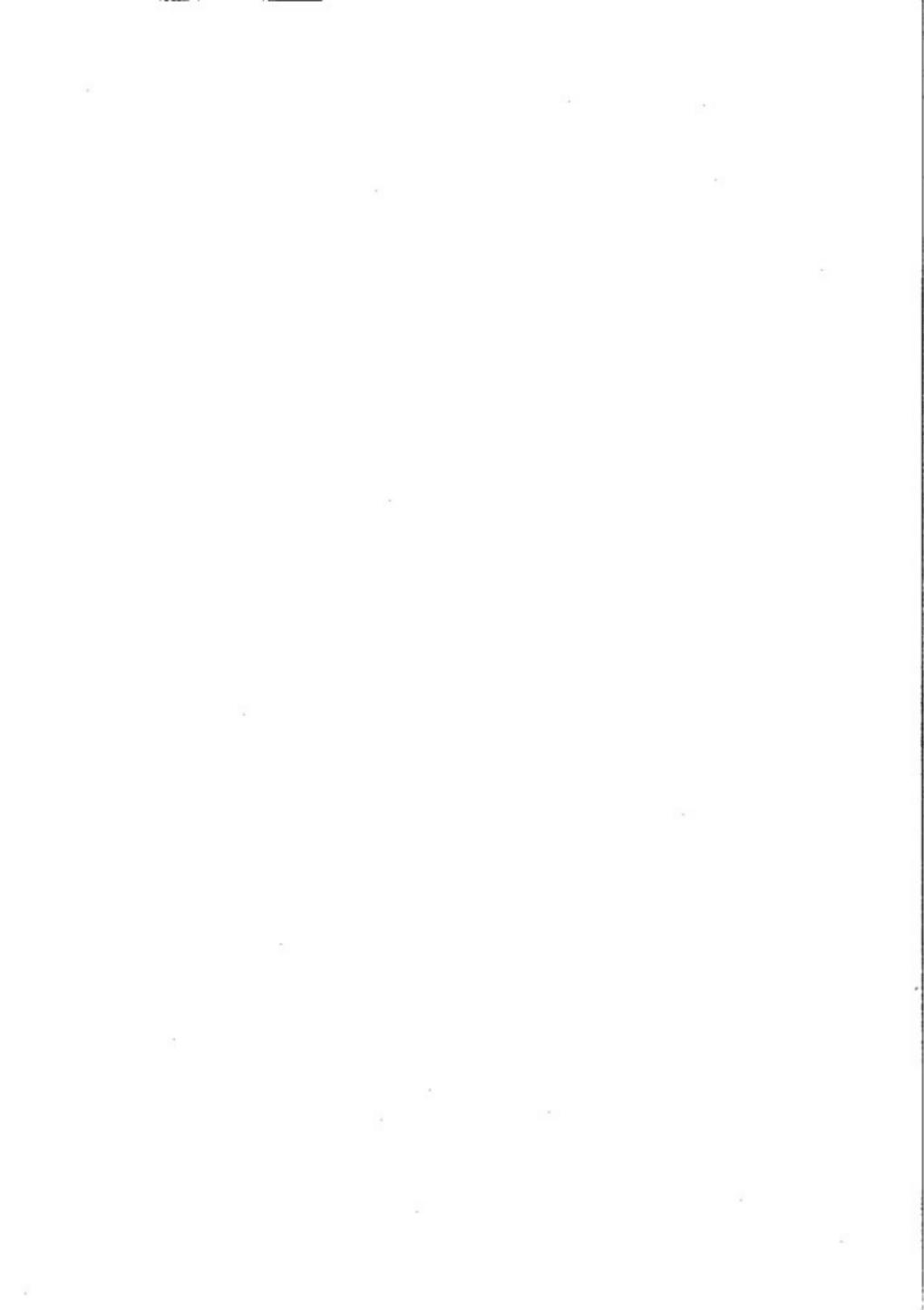
III 中田遺跡（第8次調査）

IV 中田遺跡（第24次調査）

V 中田遺跡（第28次調査）

1995年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



中田遺跡

財團法人八尾市文化財調査研究会報告49

- I 中田遺跡（第5次調査）
- II 中田遺跡（第6次調査）
- III 中田遺跡（第8次調査）
- IV 中田遺跡（第24次調査）
- V 中田遺跡（第28次調査）

1995年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の中央東部に位置し、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれ、中央部の南東から北西にかけては、旧人和川が形成した三角洲状の冲積平野が広がっています。生駒山地の西側斜面や羽曳野丘陵の先端部には、古く旧石器時代にまで遡ることのできる恩智遺跡や八尾南遺跡があります。一方、平野部には弥生時代前期まで遡ることのできる遺跡が、点々と位置しています。

今回報告の運びとなりました中田遺跡は、八尾市中央部の中田・八尾木北・刑部一帯に所在しており、すでに昭和40年代後半に大規模な発掘調査が行われた所です。中田遺跡では、これまでに、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会などによって、60件以上にのぼる数多くの調査が行われています。それらの調査の結果、中田遺跡は弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが明らかにされています。

今回ここに集録したものは、中田遺跡第5次調査・第6次調査・第8次調査・第24次調査・第28次調査の5件で、第5次調査では古墳時代前期、第6次調査では弥生時代中期から近世～近代、第8次調査では平安時代後期から室町時代、第24次調査では平安時代末期、第28次調査では平安時代末期～鎌倉時代の遺構や遺物が検出され、中田遺跡の豊富な内容が明らかにされました。

最後になりましたが、これらの発掘調査費用は、すべて事業者負担で行われたもので、事業者皆様方のご理解・ご協力のもとに調査業務が遂行できたことを感謝いたします。

平成7年11月30日

財團法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

- 1、本書は、財團法人八尾市文化財調査研究会が、平成2年度から6年度にかけて、中田遺跡内で実施した発掘調査の一部の報告書を集録したものである。
- 1、本書に集録した発掘調査報告書は、下記の日次のとおりである。
 - 1、本書に集録した発掘調査報告書は各調査員が作成し、文責等の詳細はそれぞれの例言に著したが、本書をまとめるにあたっては、成海佳子が編集作業を行った。
 - 1、本書に掲載した地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（昭和61年8月編集）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月）を元に作成した。
 - 1、本書で用いた高さの基準「T.P.」は、東京湾標準潮位である。
 - 1、本書では磁北・真北を併用している。
 - 1、遺構は、以下の略号で表した。
掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、柱穴・小穴：SP
 - 1、掲載図面の縮尺は、1/6000、1/5000、1/300、1/200、1/150、1/60、1/50、1/40、1/10、1/8、1/6、1/5、1/4、2/3を使用した。
 - 1、遺物実測図については、断面の表示によって、以下のように分類した。
赤生土器・土師器・瓦器・瓦・木製品：白、石製品：斜線、須恵器・陶器・鐵器：黒
 - 1、各調査については、実測図・写真などのほか、カラースライドも作成している。広く利用されることを希望する。

目 次

はしがき

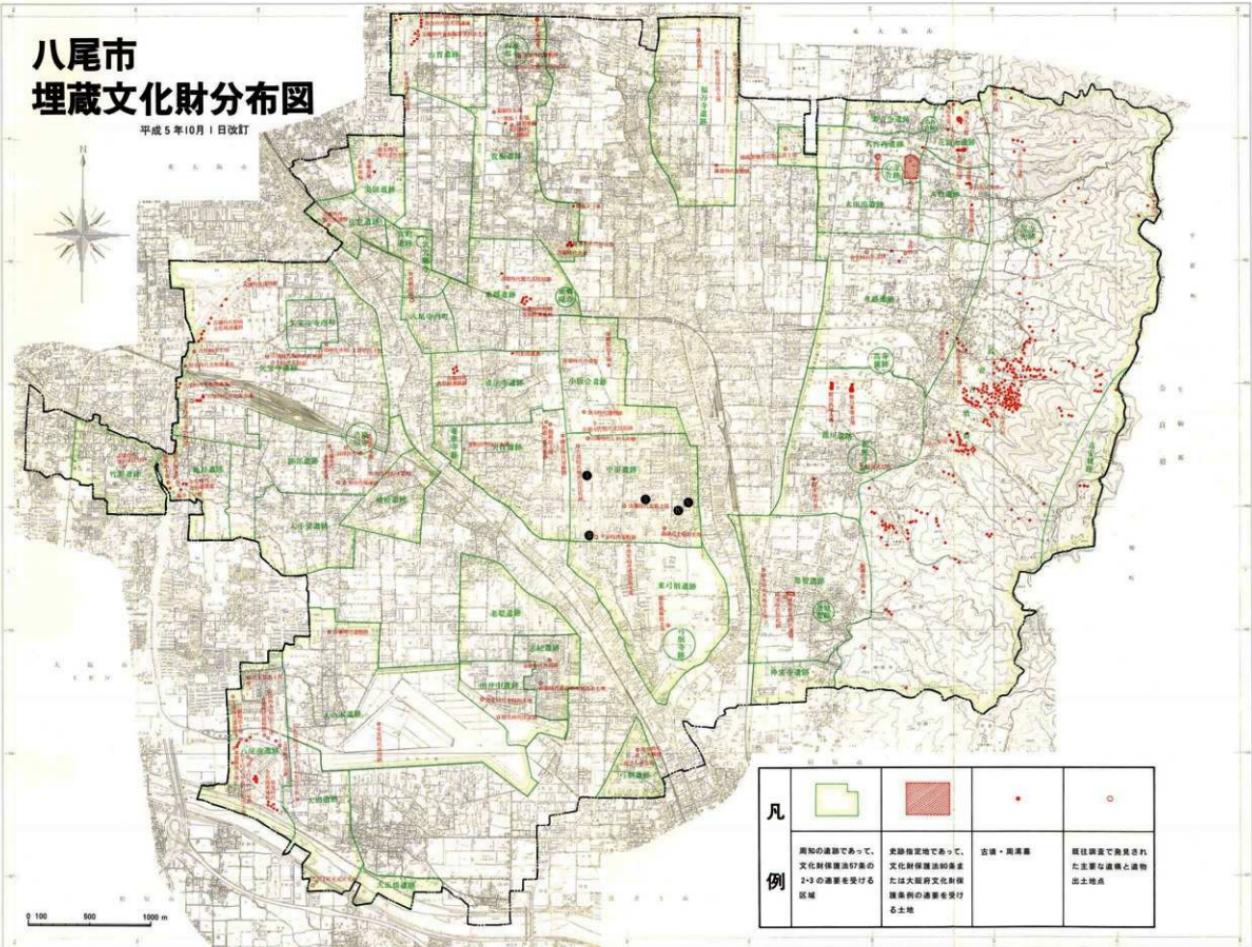
埋蔵文化財分布図

I 中田遺跡（第5次調査）	1
II 中田遺跡（第6次調査）	21
III 中田遺跡（第8次調査）	37
IV 中田遺跡（第24次調査）	85
V 中田遺跡（第28次調査）	95

報告書抄録

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日改訂



I 中田遺跡第5次調査(NT90-5)

次　　目

例　　言

- 1、本書は、八尾市八尾木北1丁目37番地2で実施した関西電力鉄塔建て替えに伴う発掘調査の報告である。
- 1、本書で報告する中田遺跡第5次調査(NT90-5)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第68号 平成2年8月6日付)に基づき、関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は、平成2年11月26日から12月4日(実働8日間)にかけて成海佳子を担当者として実施した。
- 1、調査面積は約80m²を測る。
- 現地調査には、岡田聖一・坂下 学・松下哲也・宮崎寛子が参加した。
- 1、内業整理には、上記に加えて、磯上サカエ・高柳恵美・村井俊子・山内千恵子が参加した。
- 1、土器の胎土および石材の鑑定については、奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託 奥田 尚氏にお願いし、土器の胎土について、御玉稿を賜った。

目　　次

1 はじめ	1
2 調査の方法と経過	1
3 調査概要	4
1) 繙序	4
2) 検出遺構	4
3) 出土遺物	7
4 まとめ	12
5 出土遺物観察表	14
6 土器の表面に見られる砂礫	(奥田 尚) 17

I 中田遺跡第5次調査(NT90-5)

1 はじめに

中田遺跡は、八尾市中央部の中田・八尾木北一帯に所在しており、南は東弓削遺跡・西は矢作遺跡・北西は成法寺遺跡・北は小阪合遺跡と接している。当遺跡は昭和45年、区画整理事業に伴って発見されたもので、弥生時代後期から中世に至る複合遺跡であることが明らかにされている。それ以後も断続的に調査が実施されており、その結果、弥生時代前期に遡る遺構・遺物も検出され、古墳時代前期が当遺跡の中心となる時期であることが明らかにされている。

今回の調査地である八尾木北1丁目は、中田遺跡の北西側にあたり、これまでに近隣では3件の調査が行われている。調査地の北東40m地点(⑧)では、八尾市教委が平成元年度に発掘調査を行っており、古墳時代後期の遺物を含む土坑を検出している。また、南東50mで市教委が平成2年度に行った調査(⑩)でも、6世紀中葉を主とする良好な遺物包含層を確認している。また、当地の西40m地点で当研究会が行った第16次調査(⑪)では、古墳時代前期布留式期の古相と同新相の二時期の遺構面が確認されている。(第2図・調査地一覧表参照)

今回の調査は関西電力鉄塔建て替え工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で実施した発掘調査の第5次調査にあたる。

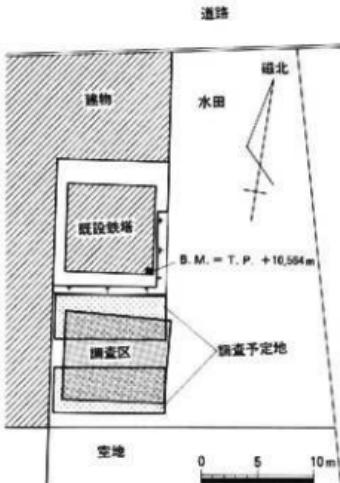
水田

2 調査の方法と経過

調査面積は80m²であるが、西側との敷地境界・北側の既存の鉄塔との位置関係から、調査区は、当初市教育委員会から指示された位置とは、若干異なっている。現地調査の期間は平成2年11月26日から12月4日までの8日間である。

掘削に際しては、現地表下0.7~0.8mの旧耕土・床上等を機械掘削した後、以下0.3~0.5mの遺物包含層などを手掘りとした。調査の結果、平安時代以降の農耕に伴う上層遺構と、古墳時代前期(布留式古相)の下層遺構を検出した。

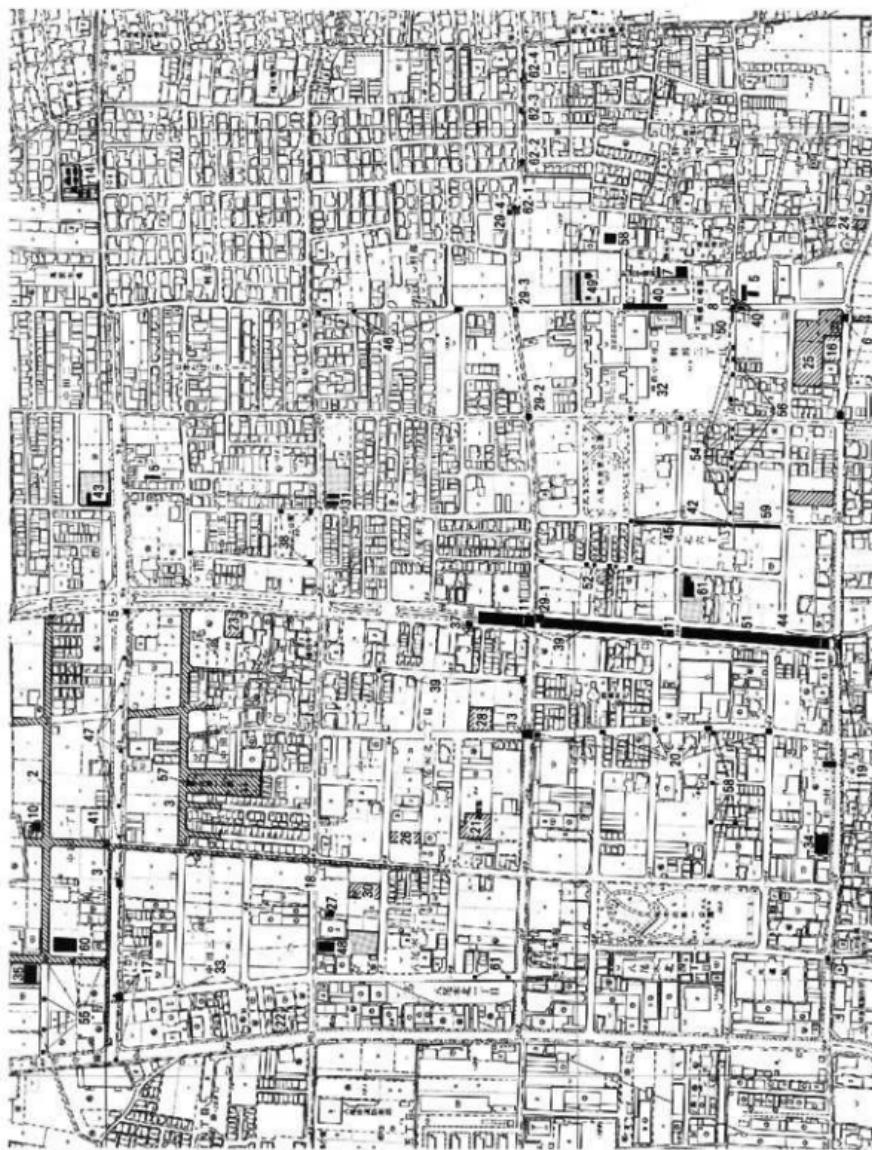
なお、地区割については、中心杭によって4分割し、小区画の地区を設定した。各小区画の名称は南西部から時計回りに1区~4区と呼んだ。



第1図 調査区設定図 (S=1:500)

中田遺跡調査地一覧表（平成7年3月31日現在）

番号	調査主体	所在地	面積(af)	調査範囲	調査期間	文献	発行元	発行年	備考
1	大阪府教育委員会	中田1～5		道路敷設	710818～710922	1 中田遺跡発掘調査報告書	大阪府教育委員会		
2	中田遺跡調査会	中田1		区域整理	Y10816～Y1093	2 中田遺跡（北区）発掘調査報告書	中田遺跡調査会		
3	中田遺跡調査会	中田1	5,013	区域整理	Y10801～Y1093	3 中田遺跡（北区）発掘調査報告書	中田遺跡調査会		
4	中田遺跡調査会	中田1・3・4		地質調査	Y11013～Y10229	4 中田遺跡（北区）発掘調査報告書 I	中田遺跡調査会センター	1994. 5	
5	八尾市教育委員会	中田1・3・4		地質調査	Y10708～Y10903	5 中田遺跡（北区）発掘調査報告書 II	八尾市教育委員会	1975. 3	
6	八尾市教育委員会	八尾東北5・6地		走査探査	Y11208～Y10531	6 八尾市文化財調査報告3	八尾市教育委員会	1996. 4	中田遺跡
7	八尾市教育委員会	解説3		史跡整備	Y109～Y110	7 八尾市文化財調査報告4	八尾市教育委員会	1979	
8	八尾市教育委員会	解説3		電気音響施設	Y100	8 八尾市文化財調査報告5	八尾市教育委員会	1981. 3	
9	八尾市教育委員会			電気音響施設	Y91	9	八尾市教育委員会		
10	八尾市教育委員会	中田1～30		事務所・事務室	Y10221～Y10306	10 八尾市文化財調査報告6	八尾市教育委員会	1996. 12	
11	八尾市教育委員会	中田1・八尾東北5		公共下水道	83年度	11 中田遺跡発掘調査監査委員会	大阪府教育委員会	1996. 3	
12	市教委 (36-332)	八尾東北6～166	66	共同住宅建設	Y10709～Y10909	12 八尾市文化財調査監査報告1	八尾市教育委員会	1995. 3	
13	市教委	八尾東北5地		公共下水道	Y11214～Y10601	13 八尾市文化財調査監査報告2	八尾市教育委員会	1993. 3	
14	研究会 (NTW-02)	中田1・29・39	100	共同住宅建設	Y10622～Y10623	14 第八尾市文化財調査研究会報告1	第八尾市文化財調査研究会	1996. 12	
15	市教委 (53-393)	中田4	21.38	公共下水道	Y10522～Y10523	15 八尾市文化財調査監査報告3	八尾市教育委員会	1995. 3	
16	市教委 (80-331)	解説3～6～2施		事務所・事務室	Y10003	16 八尾市文化財調査監査報告4	八尾市教育委員会	1996. 3	
17	研究会 (NTW-02)	中田2～4	70	公共下水道	Y10103～Y10127	17 第八尾市文化財調査監査報告5	第八尾市文化財調査研究会報告25	1996. 12	
18	市教委 (E-221)	中田3・八尾東北	4	公共下水道	Y10103	18	八尾市教育委員会		
19	市教委 (NTW-02)	八尾東北4～5	122	公共下水道	Y10202～Y10351	19 第八尾市文化財調査監査報告6	第八尾市文化財調査研究会	1997. 10	
20	研究会 (NTW-02)	八尾東北6	95	公共下水道	Y10212～Y10218	20 第八尾市文化財調査監査報告7	第八尾市文化財調査研究会	1997. 10	
21	市教委 (39-181)	八尾東北2～41	2	金庫・事務室	Y10113	21	八尾市教育委員会		
22	市教委 (39-69)	中田3～11～2		監視・事務室	Y10031	22 八尾市文化財調査監査報告22	八尾市教育委員会	1999. 3	
23	市教委 (39-540)	中田4～142～一部	6	共同住宅建設	Y10201	23	八尾市教育委員会		
24	市教委 (39-200)	解説5～7～2～4～5	12	施設・設備	Y10001	24	八尾市教育委員会		
25	市教委 (39-330)	解説3・53・1	11.35	金庫建設	Y10103	25	八尾市教育委員会		
26	市教委 (39-421)	八尾東北2～3～13	4	上層付作井	Y10110	26	八尾市教育委員会		
27	研究会 (NTW-02)	八尾東北1～27～2	60	送電電線埋設	Y10128～Y10204	27 第八尾市文化財調査監査報告27	第八尾市文化財調査研究会報告27	1999. 3	今回報告
28	市教委 (36-412)	八尾東北1～36～2	8	共同作井施設	Y10111	28	八尾市教育委員会		
29	研究会 (NTW-02)	八尾東北3～解説2	180	公共下水道	Y10104～Y10215	29 第八尾市文化財調査監査報告29	第八尾市文化財調査研究会報告29	1999. 3	今回報告
30	市教委 (39-20)	八尾東北1～40施	8	上層施設	Y10103	30	八尾市教育委員会		
31	市教委 (NTW-02)	八尾東北3～34施	90	共同住宅建設	Y10317～Y10527	31 第八尾市文化財調査監査報告31	第八尾市文化財調査研究会報告31	1997. 9	
32	市教委 (39-141)	八尾東北6		公共下水道	Y10009～Y11116	32 第八尾市文化財調査監査報告32	八尾市教育委員会	1997. 3	
33	市教委 (39-393)	中田5		公共下水道	Y10104～Y10209	33	八尾市教育委員会		
34	研究会 (NTW-02)	八尾東北5～8地	600	道路施設整備	Y10105～Y10200	34 第八尾市文化財調査監査報告34	第八尾市文化財調査研究会報告34	1999. 3	今回報告
35	研究会 (NTW-02)	中田1～3	284	共同住宅建設	Y10205～Y11218	35	八尾市教育委員会		
36	市教委 (39-303)	八尾東北2	8	公共下水道	Y11210	36 八尾市文化財調査監査報告36	八尾市教育委員会	1993. 3	
37	市教委 (39-364)	八尾東北2		公共下水道	Y11213	37	八尾市教育委員会		
38	市教委 (39-403)	中田3～75～77	16	公共下水道	Y10019～Y10219	38	八尾市教育委員会		
39	研究会 (NTW-02)	八尾東北2～10	460	河川改修工事	Y10216～Y10322	39 第八尾市文化財調査監査報告39	第八尾市文化財調査研究会報告39	1993. 3	
40	研究会 (NTW-02)	解説3	81	公共下水道	Y10116～Y10227	40 第八尾市文化財調査監査報告40	第八尾市文化財調査研究会報告40	1993. 3	
41	市教委 (39-314)	中田1～2	8	公共下水道	Y11214～Y11216	41	八尾市教育委員会		
42	市教委 (39-314)	八尾東北2	8	公共下水道	Y11215～Y11216	42	八尾市教育委員会		
43	研究会 (NTW-02)	中田2～65	170	共同住宅建設	Y10019～Y10350	43	八尾市教育委員会		
44	研究会 (NTW-02)	八尾東北3	123	電気管路設置	Y10019～Y10303	44	八尾市教育委員会		
45	研究会 (NTW-02)	八尾東北4	170	公共下水道	Y10230～Y10304	45	八尾市教育委員会		
46	研究会 (NTW-02)	解説2	26	公共下水道	Y10308～Y10304	46	八尾市教育委員会		
47	市教委 (39-393)	中田1～4	15.75	公共下水道	Y10011～Y10303	47 八尾市文化財調査監査報告47	八尾市教育委員会	1994. 3	
48	研究会 (NTW-02)	中田1～31～33地	170	共同住宅建設	Y100117～Y10327	48 第八尾市文化財調査監査報告48	第八尾市文化財調査研究会報告48	1999. 3	今回報告
49	研究会 (NTW-02)	解説4～357	150	共同住宅建設	Y10218～Y10301	49	八尾市教育委員会		
50	研究会 (NTW-02)	解説5	10	電気管路設置	Y10104～Y10309	50	八尾市教育委員会		
51	研究会 (NTW-02)	八尾東北6	390	河川改工工事	Y10102～Y10330	51 第八尾市文化財調査監査報告51	第八尾市文化財調査研究会報告51	1994. 3	
52	研究会 (NTW-02)	八尾東北6	28	公共下水道	Y10103～Y10303	52 第八尾市文化財調査監査報告52	第八尾市文化財調査研究会報告52	1995. 3	
53	市教委 (39-369)	八尾東北5		公共下水道	Y10103～Y10312	53	八尾市教育委員会		
54	研究会 (NTW-02)	解説3	28	公共下水道	Y10109～Y10302	54	八尾市教育委員会		
55	市教委 (39-355)	中田1～3		公共下水道	Y10112～Y10326	55	八尾市教育委員会		
56	研究会 (NTW-02)	解説3～八尾東北6	22.5	電気管路設置	Y10118～Y10301	56	八尾市教育委員会		
57	研究会 (NTW-02)	中田1～18	64	公共下水道	Y10101～Y10304	57	八尾市教育委員会		
58	研究会 (NTW-02)	解説4～216～1	184	共同住宅建設	Y10413～Y10426	58 第八尾市文化財調査監査報告58	第八尾市文化財調査研究会報告58	1995. 3	今回報告
59	研究会 (NTW-02)	八尾東北6	60	公共下水道	Y10413～Y10402	59 第八尾市文化財調査監査報告59	第八尾市文化財調査研究会報告59	1995. 3	
60	研究会 (NTW-02)	中田1～20地	200	共同住宅建設	Y10404～Y10410	60 第八尾市文化財調査監査報告60	第八尾市文化財調査研究会報告60	1995. 3	
61	研究会 (NTW-02)	八尾東北6～19	160	共同住宅建設	Y11107～Y11121	61 第八尾市文化財調査監査報告61	第八尾市文化財調査研究会報告61	1995. 3	
62	研究会 (NTW-02)	解説2	20.00	公共下水道	Y11118～Y11125	62 第八尾市文化財調査監査報告62	第八尾市文化財調査研究会報告62	1995. 3	今回報告



第2図 中田遺跡調査位置図 (S=1:6000)

3 調査概要

1) 層序

調査地の現地表面の標高はT.P.+9.4~9.5m程度で、Ⅱ状は水田である。基本層序は、上層から第1層灰黒色疊混じり粘土(旧耕土)、第2層茶褐色疊混じり粘土(床上)、第3層黄褐色疊混じり粘土、第4層黄色シルト、第5層黄灰色粘土、第6層暗灰黄色粘土、第7層赤褐色疊混じり砂質土、第8層黄灰色~青灰色シルト、第9層青灰色~灰色粗砂の9層を確認した。

第1層灰黒色疊混じり粘土は、調査直前まで耕作されていた土で、層厚は0.15~0.2mを測る。第2層茶褐色疊混じり粘土は第1層に伴う床上で、層厚は0.15~0.3m、西側の上部には0.05~0.1mの厚さでグライ化した上層が見られる。

第3層黄褐色疊混じり粘土には、疊とともに中世~近世の陶磁器片や土師器片・瓦片などが若干含まれており、層厚は0.1~0.2mを測る。

第4層黄色シルトは洪水層の可能性があり、層厚は0.05~0.2mを測る。第5層黄灰色粘土の上面には波状痕跡がみられ、第4層によって埋没した水田耕作土の可能性がある。第5層の層厚は0.2~0.3m、上面のレベル高はT.P.+8.9m前後である。

第6層暗灰黄色粘土は層厚0.05~0.15m、粘性が強く上器類の小破片が若干含まれている。

第7層赤褐色疊混じり砂質シルトは古墳時代前期の遺物包含層で、層厚は0.1~0.3mを測り、遺物の包含量は多い。調査区北西部では、グライ化し、暗緑灰色を呈する部分がある。上層構造は、この層上面から構築されている。

第8層黄灰色~青灰色シルトが古墳時代前期の遺構面で、層厚は0.2~0.4mを測る。上面のレベルはT.P.+8.4~8.6mを指し、北側が下がっている。

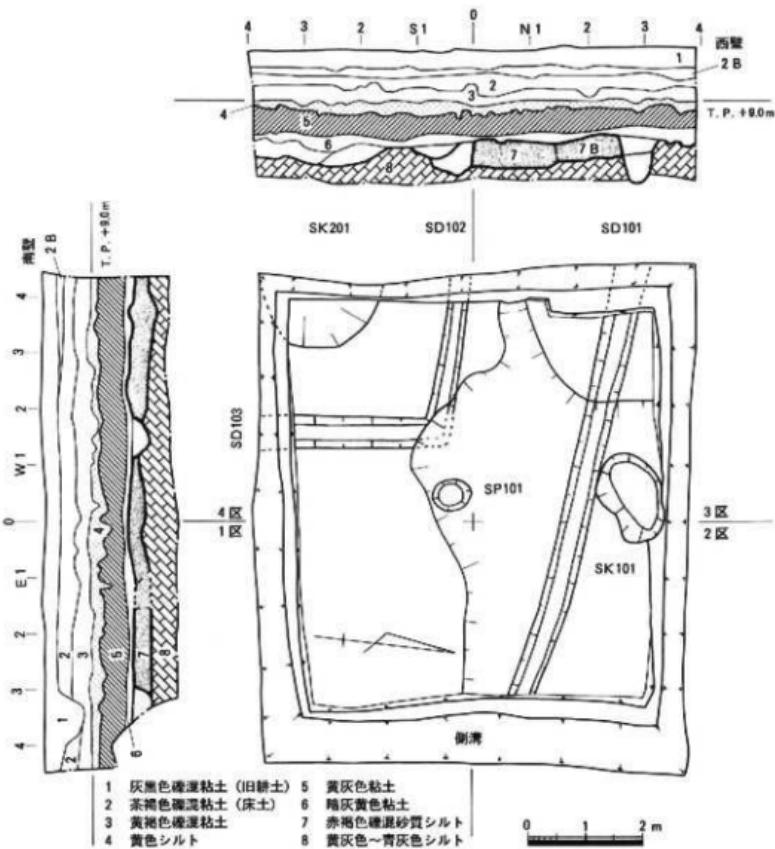
第9層青灰色~灰色粗砂は部分的に確認した上層で、河川内堆積土の可能性があり、含水量が多く、層厚は0.5m以上を測る。

2) 検出遺構

上層遺構

SK101: 調査区北端中央部(2区~3区)で検出した。上面の形状は北西~南東に反軸を持つ隅丸長方形で、長径1.9m・短径0.9mを測る。断面の形状は逆台形で直線的に掘られ、深さは0.6m、底は平坦である。内部には、上層から①灰色粘土・②青色粘土上のブロック・③青色粘土と灰色シルトのブロック・④赤黒シルト~微砂の4層が堆積している。

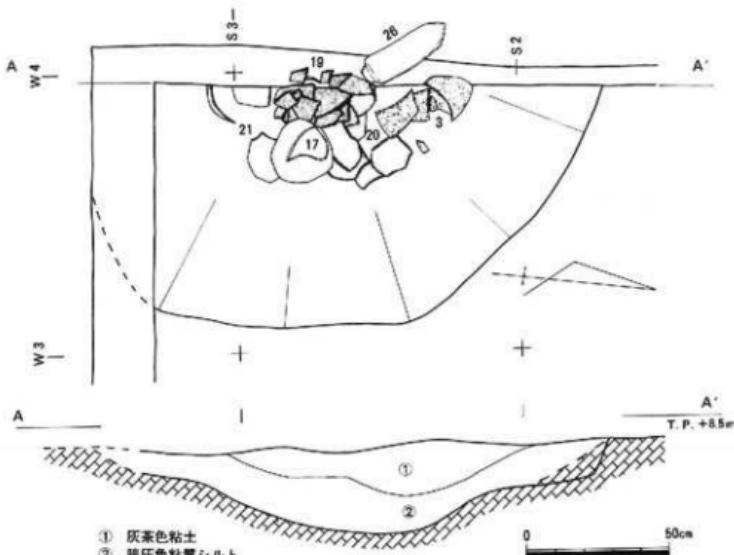
SD101: 調査区北部(2区~3区)で検出した。ほぼ東西に伸びるもので、中央北端はSK101に切られている。断面の形状は逆台形~V字形で、検出長7.0m・幅0.5~0.6m・深さ0.4~0.5mを測る。内部堆積土は暗緑灰色粘土である。



第3図 平面図・壁面図 (水平S=1:100、垂直S=1:50)

SD102：調査区南西部（1区）、SD101から南2.0～2.2mで検出した。SD101に並行して伸びるもので、東端はSD103とほぼ直角に交わる。断面の形状は半円形で、検出長2.5m・幅0.3～0.5m・深さ0.2mを測る。内部堆積土は暗灰色粘土である。

SD103：調査区南西部（1区）、SD102の東端から南北に伸びている。断面の形状は半円形で、検出長2.5m・幅0.3～0.5m・深さ0.2mを測る。内部堆積土は暗灰色粘土である。



第4図 SK201平面面図 (S=1:20)

SP101：調査区中央部南西より（1区）で検出した。長径0.68m・短径0.55m・深さ0.35m程度で南北にやや長い円形のピットで、断面はU字形を呈し、柱痕は認められなかった。内部堆積土は灰色シルト混じり粘土で、炭化物が少量出土している。

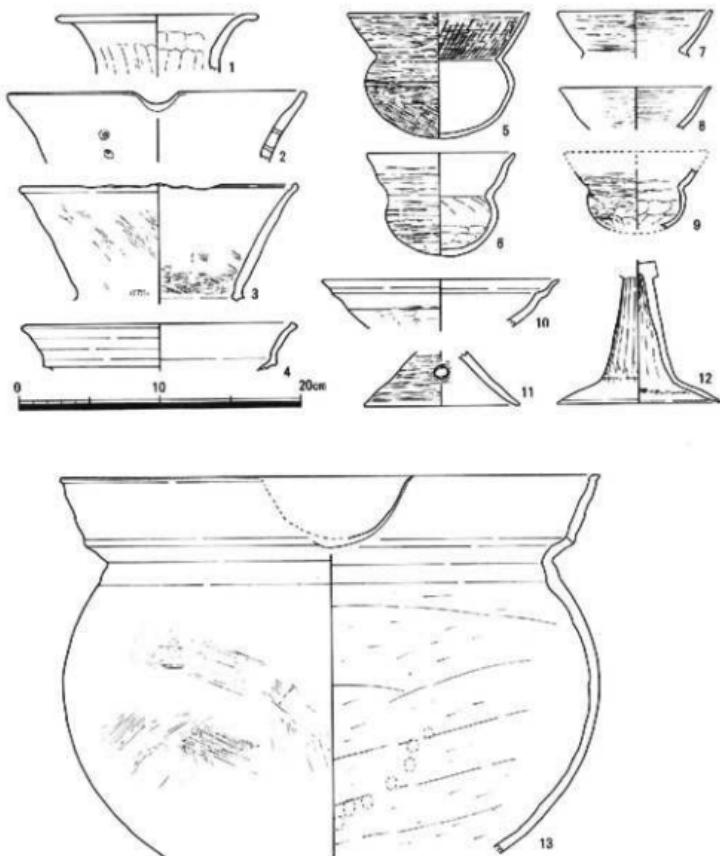
下層遺構

SK201：調査区南西隅（1区）で検出した。南側・西側は側溝に一致したため全体の形状は不明であるが、東西1.8m・南北0.6m程度の楕円形を呈するものと考えられる。断面の形状はゆるやかな二段の掘り形をもち、底部中央は浅く窪み、深さは0.3m前後を測る。内部堆積土は、上層の①灰茶色粘土と下層の②暗灰色粘質シルトに分かれる。遺物は①層から遺存状態の良い土器がきわめて多量に出土している。器種は庄内系の甕・布留傾向甕が十数個体とほとんどを占め、直口壺・小型壺・小型鉢・大型鉢・高杯などが少量ずつ含まれており、紀伊・阿波・吉備など他地方の土器も若干認められる。その他の遺物としては、砥石（26）の他、径2～3cm程度の白色の円礫（いわゆる白石）をはじめとして、礫が少量混在している。

3) 出土遺物

SK201出土遺物

広口壺（1）は、直立する頸部をもつもので、口縁部は水平近くに大きく開く。頸部には内外ともにヘラによる面取りが残され、やや粗いつくりである。胎土はI類型—石川に分類される。直口壺（2・3）はともに口縁端部が欠損後研磨されているようで、（2）は口縁端部に径3cm前後の打ち欠きおよび頸部に0.4cmの小孔2個が穿たれている。ともに茶褐色を呈する

第5図 出土遺物実測図-1 ($S = 1:4$)

河内（牛駒西麓）の土器で、分析結果からもⅡ類型—河内の砂礫を使用していることが明らかとなった。複合口縁壺（4）は淡灰褐色の色調や形態は、他地方の特徴をもつが、使用された砂礫のタイプはⅡ類型—河内に分類される。

小型壺（5～9）のうち（5）は、口径13cm・器高8.9cmとやや大型で、極めて精緻なつくりである。体部的最大径は上位1/3にあり、そこに鋭い稜線が一周する。その他の小型壺はおおむね口径9cm・器高7cm前後におさまるものと考えられ、（6・9）にみられるようにヘラケズリの痕跡が顕著に見られる。含まれる砂粒のタイプは（5）がIV類型—播磨、（7）がⅠ類型—在地とされたが、他は砂粒が細かく分類不可能であった。

小型有段鉢（10）、小型器台（11）はこの時期に通有の器形であるが、ともに火をうけたためか煤が付着し、器表面の剥離する部分がある。（10）はⅠ類型—古備？、（11）はⅠ類型—在地に類別される。高杯（12）は丈高的柱状部に比し、小さく開く裾部がつくもので、裾端部は先細となって狭い面を有する。柱状部の内外面には、ヘラによる面取りや絞り口の痕跡が残る。砂礫からはⅡa吉備に類別される。

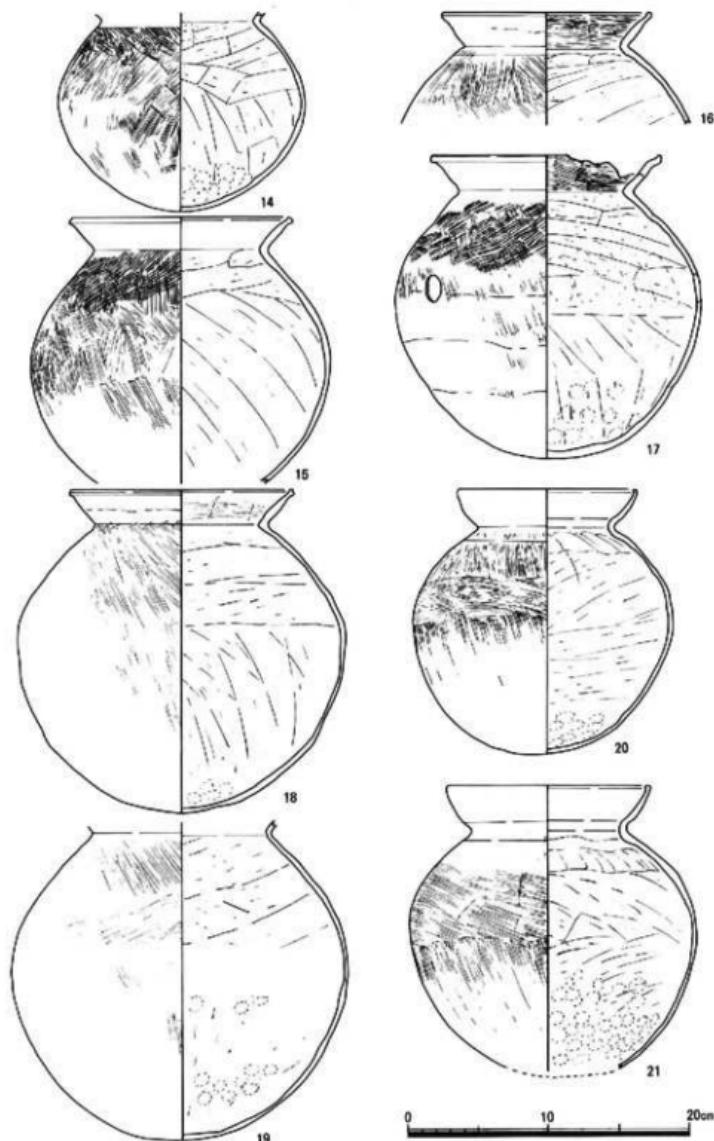
大型の鉢（13）は器表面の剥離・風化が著しく、口縁部に径10cm程度の打ち欠きがあり、ⅡI縁端部も壺（2・3）のように研磨されている可能性がある。形態・色調などから山陰系のものとされており、砂礫からもⅣe山陰に類別される。

壺（14～25）にはさまざまなものが見られる。まず、いわゆる庄内壺の系譜を引くもの（14・15・17）、次いで同様の形態を有するがタタキ日の見られないもの、またはあっても細かいハケ調整でタタキ目が消えているもの（16・18・19）、いわゆる布留式壺の傾向をもつもの（20・21）、複合口縁を持つもの（22・23）、長胴で粗いハケ調整、内面に指頭圧痕を残すもの（24・25）の4種がある。

庄内壺の系譜を引く壺（14・15）は、ともに茶褐色～黒褐色の色調を呈するもので、Ⅱ類型河内の砂礫を使用する。

（14）はきわめて扁平な体部のみ遺存するもので、外面の調整は左上がりタタキの後右上りのハケ、内面底部には指押えの圧痕があり、ヘラケズリは下半を左下から右上、上半を右から左へと行っている。内面底部には炭化物が付着し、外面の腹部以下には煤が厚くこびりついている。

（15）は球形に近い体部に「く」の字形に屈曲して口縁部にいたるもので、屈曲部内面の稜線・口縁部の外反はともにぶい。口縁端部はわずかにつまみ上げられ、外傾する面を作る。外面の調整は、上位が右上がりタタキ、下位が左上りタタキの後連続しない左傾～緩ハケ、内面のヘラケズリは下半が左下から右上へ、上半肩の部分が右から左方向である。外面の腹部以下およびⅡI縁部に煤が厚く付着する。



(17) は淡褐色を呈し、接合部の段が顕著に認められるもので、体部の形態は、肩が張り、底は平たい。口縁部の屈曲は鈍く、端部近くで外反し、わずかにつまみ上げられ、直立気味の側面を作る。外面は右上がりタタキの後左傾のハケ調整を施すが、下半の接合部はなでられている。内面は底部および胴部中位の接合部を指揮の後へラケズリを行うが、ヘラケズリの方向は、底部が下から上・体部下半が左下から右上・中位が左から右・体部上半左下から右上、肩部を右から左と5方向に行われている。口縁部内面には横方向のハケが施される。口縁部には打ち欠き、体部中位には長径2.0cm・短径1.7cmの穿孔がある。煤や炭化物の付着はなく、未使用のようである。胎土はIV類型で、播磨に比定される。

(18) は肩から丸みを持って崩出し、口縁部に至るもので、口縁端部は丸みを持って立ち上がる。外面には右上がりタタキがあるが、その後ていねいな左傾のハケが施されるため、わずかしか残らない。内面のヘラケズリは左下から右上方向で、口縁部内面には横ハケが施されている。胎土は(17)と同様、IV類型播磨である。

(18・19) はともにほぼ球形の体部を呈するもので、胎土はIIa類型河内である。(18)の口縁部の形態は(15)に似ており、外傾する狭い面を作る。外面は右上がりタタキの後左傾のハケ調整であるが、タタキ目はごくわずかしか見られない。内面底部に指揮の圧痕、ヘラケズリは下半が左下から右上、上半が右から左方向、口縁内面には横方向のハケが施される。

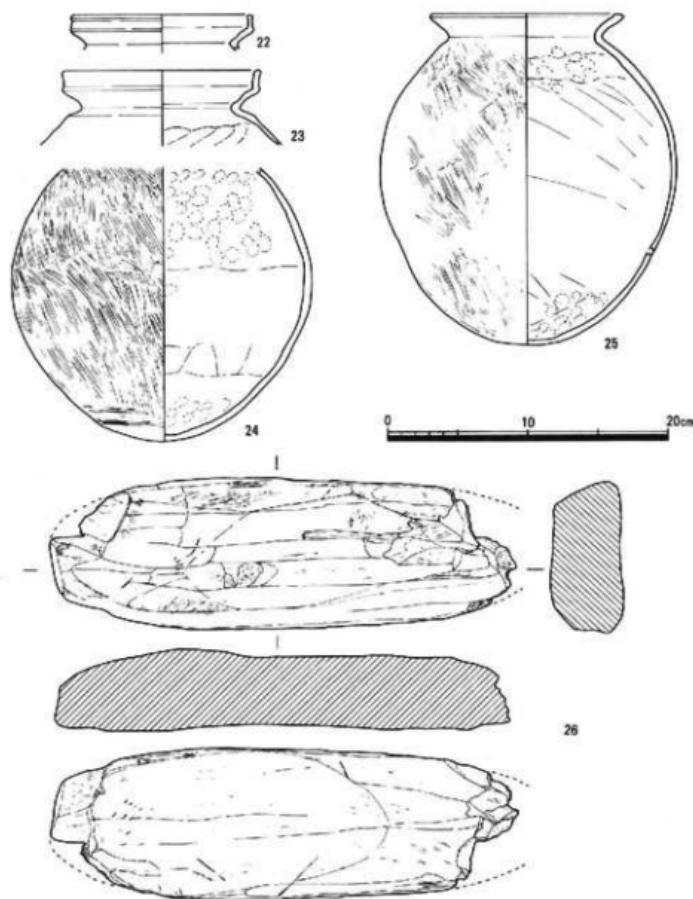
(19) は表皮の剥離が甚だしく、調整は不明瞭である。外面はハケ、内面には底部の指揮とヘラケズリが見られる。

布留式壺の傾向をもつ壺(20・21)はともに淡褐色を呈し、胎土はIV類型加賀である。形態はほぼ相似形で、やや上方で張る扁平な倒卵形の体部から内湾する口縁部、口縁端部は内に巻き込み、上方に水平な狭い面ができる。外面の調整はともに縦ハケの後中位上半に連続しない横ハケ、内面は底部指揮の後へラケズリ、肩部のみなでられる。指揮の圧痕は、(20)では底部のみに残るだけであるが、(21)では体部中位にまで及ぶ。

複合口縁を持つ壺(22)は、いわゆる古備系の壺の形態を有するが、(23)は肩に脱い稜線があり、周し、特異な形態を呈している。砂礫の観察では(22・23)ともにIV類型播磨の特徴を示している。

(24・25)は外面の粗い縦ハケ、体部上位にまで及ぶ内面の指揮の圧痕、短く折れる口縁部などから阿波の壺の特徴を有するもので、砂礫の観察からも片岩を含むV類型阿波のものである。

砥石(26)は長方形の石材を使用しており、両端は折損、上面・下面の平坦面が主な使用面で、側面にも細かい使用痕が無数にある。現存長33.3cm・最大幅11.7cm・厚さ4.9~5.6cm、石材は泥岩である。



第7図 出土遺物実測図-3 (S=1:4)

SK201内部からは、土器類以外に礫が10数個出土している。中には偶然混入したものも含まれているであろうが、調査地付近にない石については、運ばれ、土器とともにSK201におさめられたものと考えられる。なかでもめだつものは、石英質片岩である。石英質片岩は、いわゆる「白石」と呼ばれるもので、古墳などのある特定の場所に敷きつめられることの多いものである。産地は紀ノ川・吉野川下流域に限定される。

SK201から出土した白石は10個で、大きさは最小のものが短径1.5cm・長径2.0cm・厚さ0.6cm、最大のものは短径2.5cm・長径4.0cm・厚さ1.2cmを測る。その他同様の大きさの石英および石英質砂岩が各1個ずつ出土している。このほかに、他の地方から持ち運ばれたと考えられるものには、紀ノ川流域を産地とする絹雲母片岩（1個）、石川流域を産地とする疊岩（1個）、玢岩（2個）等がある。在地のものと考えられるものには、安山岩・閃綠岩・チャート（各1個）、アブライト（3個）がある。

第7層出土遺物

壺には、造構山上のものと同様、庄内甕の系譜を引くもの（27～32）、布留式甕（33・34）、阿波の甕（35・36）などが見られる。庄内甕の系譜を引く甕は、いずれも口縁端部のつまみあげは鈍く、球形に近い体部を持つものである。阿波の甕は、外面の調整が粗い継ハケ、内面には指頭圧痕が体部上位にまで及んでいる。

壺には、大型広口壺（37）をはじめとして、直口壺（38～41）、小型壺（42・46・47）、複合口縁壺（43）がある。直口壺には大型（38・39）・小型（40・41）の2種があり、小型壺には、精製された器種（46）や、やや粗雑で器肉の厚い（47）、特異な形態の（42）などがある。

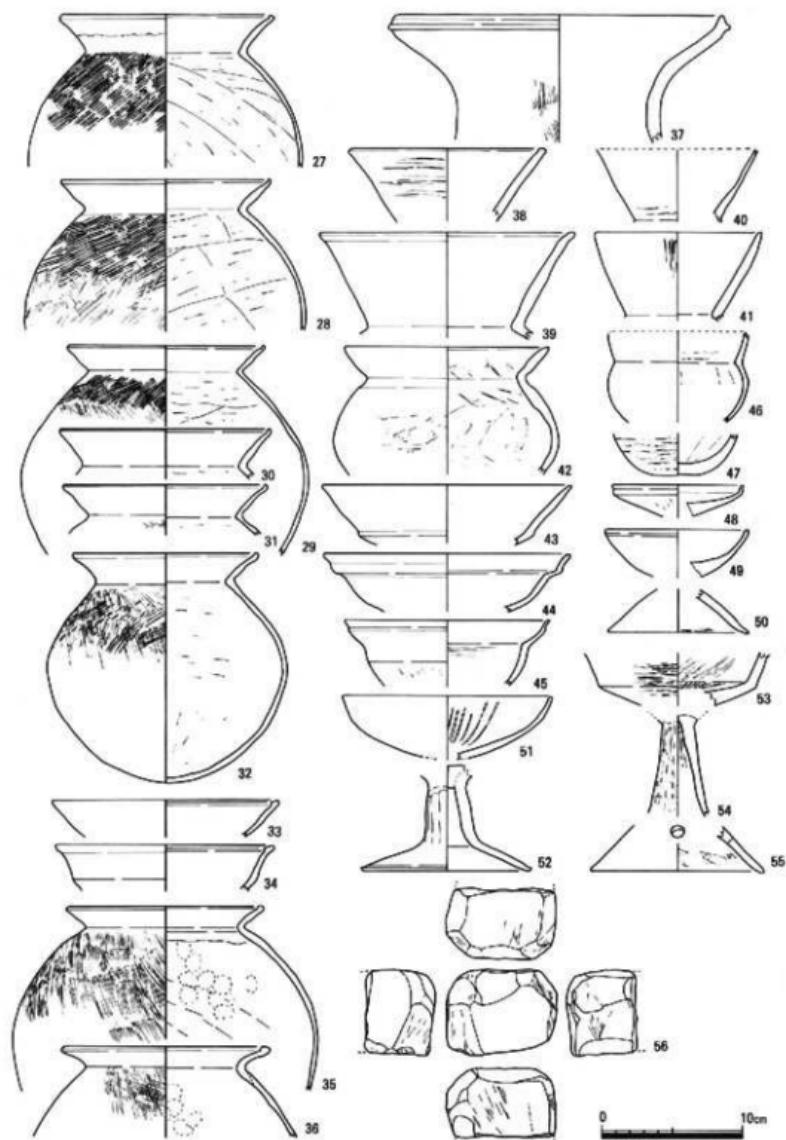
二段に屈曲する鉢には浅いもの（44）と深いもの（45）があり、小型器台には受け部が浅い皿形を呈する（48）と椀形の（49）が、高杯には杯部が椀形の（51）と段を持つ（53）がある。

砥石（56）は折損面以外の5面に使用痕を持つもので、縦6.0cm×横7.8cm×高さ5.0cmの直方体を呈する。石材は流紋岩である。

4まとめ

今回の調査では、SK201から古墳時代前期（布留式古相）の甕を主とする良好な一括資料が得られた。土器に含まれる砂粒の分析から、阿波、古備、播磨、山陰、加賀、河内、石川下流域、在地の各地域が抽出され、広範囲に及ぶ地域間の交流が明らかになった。今回の分析結果からは、庄内甕の系譜を引くものは河内・播磨に、布留甕の傾向を持つものは加賀に、その产地がおおむね限定されたようである。

一方、SK201から出土したものには、口縁部を打ち欠いたもの（壺 第5図-2・3、鉢-13、甕 第6図-17）や穿孔を持つもの（壺 第5図-2、甕 第6図-17）も見られることや、白石（図版五）が含まれていることなどから、SK201が墓に関連する施設、あるいは祭祀の場であったことが考えられ、ここが、この時期の中出遺跡の重要なポイントであったといえる。



第8図 出土遺物実測図-4 (S = 1 : 4)

5 出土遺物観察表

番号	種類・部位	出土 地点	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態・特徴の特徴	備考
1	広口金 口縁部	SK201	口 径 13.9	暗茶褐色	泥～ やや粗	良好	内立する脚部から水平近くに折曲する口縁部、端 部は丸く終わる。 指揮等、へうによる圓取り後ヨコナギ。	生前西魏
2	直口金 口縁部	SK201	口 径 20.5	茶褐色	粗	良好	口縁端部は外傾する面を持つ。ヨコナギ。 口縁端部、底部下面は打たれき・研磨の可塑性あり。 底部に2孔(径3cm)を穿つ。	生前西魏 表面削除する
3	直口金 口縁部	SK201	口 径 19.3	茶褐色	粗	良好	内立的形に口縁部、端部はわずかに巻き込む。 外面部ハケで内面部ハケ後ヨコナギ。 口縁端部打たれき。研磨の可塑性あり。	生前西魏
4	複合口縁部 口縁部	SK201	口 径 18.9	淡灰褐色	泥～ やや粗	良好	下段口縁部から一段内立し、外傾する上段口縁部 に至る。端部は外傾する面を持つ。 ヨコナギ。	口縁部外側面 に保付書
5	小平壠 火形	SK201	口 径 13.0 高 8.9	淡赤褐色	粗	良好	体部中央位には低い腰窓が一回する。口縁部は内汚 氣味に附り、端部は反り、尖る。 口縁内面に舟状紋の放射状穴あきとガキを施す。 ヘラケズリ腰窓かいらぎガキ、内面体部ナギ。	体部中央位に保 付書
6	小型壠 火形	SK201	口 径 10.7 高 7.3	淡赤褐色	粗良～ 中	良好	極く低く折りたたむ形態から内側斜傾斜に伸び、端部 近くで外反張輪に開くU縫合、端部は尖る。 ヘラケズリ腰窓かいらぎガキ、内面体部ナギ。	
7	小型壠 口縁部	SK201	口 径 10.9	淡赤褐色～ にぼい褐色	粗	良好	内汚氣味に伸びる口縁部、端部は尖り気味に終る。 ヘラケズリ、ナデ、ヨコナギ。	
8	小型壠 口縁部	SK201	口 径 10.7	にぼい褐色	泥～ やや粗	良好	内汚氣味に伸びた後、端部は反り、尖る。 ヘラケズリ、ナデ、ヨコナギ。	
9	小型壠 口縁～体部	SK201	最大径 7.1	赤褐色	泥	良好	内立て盛りの少ない体部から、口縁部は内向して 開く。 ヘラケズリ、細かいヘラミガキ、内面体部ナギ。 ヘラケズリは内外の体部に及んで及ぶ。	
10	小形有段鉢 口縁～体部	SK201	口 径 16.9	暗赤褐色～ にぼい褐色	粗	良好	深い体部、口縁部の屈曲は無い。口縁端部は尖る。 ヘラケズリ腰窓かいらぎガキ、ナデ、ヨコナギ。	口縁端部に保 付書
11	小器台 腰窓	SK201	横 径 11.0	暗茶褐色	泥	良好	円錐形の蓋台、腰窓は尖る。1孔残存。 ナデ、ヘラミガキ、ヨコナギ。	腰窓部に保付 書
12	高腰 腰窓	SK201	横 径 11.5	淡褐色～ にぼい褐色	粗	良好	士高の柱状跡からゆるやかに開き、内汚氣味の痕 跡に伴う。端部は下へ巻き込む。 外面部へようする圓取り後ヨコナギ、内面收り、指 揮等、へう後ヨコナギ。	腰窓部に里頭 部
13	大型有段鉢 口縁～体部	SK201	口 径 37.9	淡褐色 中模古黒色	粗	良好	口縫線上下兩端は外へわずかにつまみ出される。口 縫部打ち落さず。 外面部ヨコナギ、内面指揮等、ヘラケズリ、 ハケ、シタケ。	山慈系 裏反削割する
14	壺 体部	SK201	最大径 17.5 体部高 13.8	茶褐色～ 淡褐色	粗	良好	さわめて堅厚な倒卵形の体部、底は尖り気味。 外面部左側にタリタキ後壁の縦ハケ、内面指 揮等ヘラミガキ(ト下左→右上、下右左→ラ ケズリ)。	庄内系 体部中央以下 に厚く保付書
15	壺 口縁～体部	SK201	口 径 15.4 最大径 21.2	茶褐色～ 淡褐色	粗	良好	球形に近い体部、口縁部は外反し、端部のつまみ 上げは密。 外面部上方に横筋タリタキ後壁ハケ、内面ヘラケズリ (左下→右上) 口縫部横ハケ。	庄内系 外側 口縫部、体部 下に保付書
16	壺 口縁～腰窓	SK201	口 径 14.3	淡赤褐色	やや粗	良好	口縫部は先端となり、端部は丸くつまる。 外面部上方に横筋タリタキ後壁ハケ、内面ヘラケズリ (左下→右上) 口縫部横ハケ。	
17	壺 火形	SK201	口 径 16.1 最大径 21.6	淡赤褐色～ 火形	やや粗	良好	体部は扁平な倒卵形、底はやや尖り気味。 外面部上方に横筋タリタキ後壁のハケ、内面底部指 揮等、ヘラケズリ(下手左→右上、上手右→左、 口縫部横ハケ)。	U縫部、体部 に打たれき
18	壺 火形	SK201	口 径 15.7 最大径 23.2	淡赤褐色～ 火形	やや粗	良好	球形に近い体部。 外面部ハケ、ヨコナギ、内面指揮等、ヘラケズリ。	腹部以下に保 付書
19	壺 体部	SK201	最大径 23.8	茶褐色～ 茶褐色	粗	良好	球形に近い体部。 外面部ヨコナギ、ヨコナギ、内面指揮等、ヘラケズリ。	表皮剥離
20	壺 火形	SK201	口 径 12.6 最大径 18.4	淡赤褐色～ 火形	泥～ やや粗	良好	最大径はやや上位にある。口縫部は内側し、端部 には内側込み、上端は内側の平底をなす。外面部 ハケ後壁横ハケ、内面底部に指揮等後ハケ (下手右→左、中位右下→左上)、口縫部横ハケ。	布留系 腹部 右に偏、内 底面に炭化物

番号	器種・部位	出土 地點	法線 (m)	色調	胎土	焼成	形態・調査の特徴	備考
21	壺 口縁～体部	SK201	口 径 14.5 最大径 20.5 厚さ 20.3	淡褐色～ 灰褐色	粗～ やや粗	良好	最大径はやや上位にある。口縁部は内側し、端部は外側に張り出る状態を持つ。腹部は外反曲形となる。外面は中古形で、内面は指揮押え後へラケズリ(下位右一左一、上位左下～右上)、内面ナデ。	高密着、腹部 以下に煙、内 底面に炭化物
22	壺 口縁部	SK201	口 径 12.6	淡褐色	やや粗 ～粗	良好	上方へ膨らむ口縁部、底面部は内傾屈曲で、外 側面には墨文が施される。 ナデ、ヨコナデ。	古褐色、口縁 部外側部に煤 表皮剥離する
23	壺 口縁部	SK201	口 径 13.8	灰褐色	やや粗 ～灰	良好	外側の間に継ぐ縦を持ち、「く」の字形に扭曲し、 左右に張り出る状態となる。底面部は外反曲形となる。 「口縁外側部に張り出る」状のナデ、内面へラケズリの痕跡、 口縁部内面に墨文(ヨコナデ)。	
24	壺 体部	SK201	最大径 底面高 21.1 19.6	灰褐色	粗～ やや粗	良好	最大径はほぼ中位にある長円形。 外向した筋のハケ後底面部に張りハケ。ナデ。内面指揮 押え部の下のみヘラケズリ。	阿波系 外縁下手に煤 付着
25	壺 底面上で元形	SK201	口 径 12.8 最大径 21.0 厚さ 23.8	灰褐色	粗～ やや粗	良好	口縁部は無く直筒的で、端部は先太で内に巻き込 る。外面は中古形で、内面へラケズリ(左下～右上)、 口縁部に墨文(ヨコナデ)。	阿波系 外縁下手、内面 底面に炭化物付着
27	壺 口縁～肩部	1区～ 3区	口 径 14.8 最大径 19.4	淡褐色	やや粗 ～粗	良好	体幅から「し」の字形に扭曲して外反する「口縁部」 外側に張り出る状態を持つ。「く」の字形に扭曲する。 外面は中古形で、内面へラケズリ(左下～右上)。	庄内系 肩部以下に煤 付着
28	壺 口縁～肩部	3区	口 径 14.6 最大径 20.0	茶褐色	やや粗 ～粗	良好	体幅から「し」の字形に扭曲して外反する口縁部。 外側に張り出る状態となり、「く」の字形に扭曲される。 外側向てドロタキ後左筋、左筋のハケ、内面へラ ケズリ(右下～左上)。	庄内系
29	壺 口縁～体部	2区	口 径 13.7 最大径 20.3	茶褐色	粗	良好	側面へ張り出る体幅から「く」の字形に扭曲し、「口縁部」 外側に張り出る状態となる。「く」の字形に扭曲する。 外面は中古形で、内面へラケズリ(左下～右上)、 「口縁部」ハケ後左筋のハケ、内面へラケズリ(左下～右上)。	庄内系 外縁、内面下 底面に炭化物付着
30	壺 口縁部	1区	口 径 14.7	淡褐色	やや粗 ～粗	良好	体幅から「く」の字形に扭曲する口縁部、端部は 内面につまみ上げられ、外縮する狭い面を持つ。 内面へラケズリ(右～左)。	庄内系
31	壺 口縁部	1区	口 径 14.4	茶褐色	やや粗 ～粗	良好	体幅から「く」の字形に扭曲外反する口縁部。端 部は内側へつまみ上げられる。 外面は中古形で、内面へラケズリ、 内面へラケズリ(右～左)。	庄内系 外縁に煤付着
32	壺 充形	2区	口 径 12.8 最大径 16.9 厚さ 15.4	茶褐色	やや粗 ～粗	良好	肩半周横割跡～蝶形の外反し、「口縁部」は開く外反し、 外側に張り出る状態となる。「く」の字形に扭曲する。 外面は中古形で、内面へラケズリ(左下～右上)。	庄内系 外縁、内面下半 底面に炭化物付着
33	壺 口縁部	3区	口 径 15.8	赤褐色	やや粗	良好	内側で開く口縁部、端部は内に肥厚してやや内 縮する面を持つ。 ヨコナデ。	古褐色 表皮剥離する
34	壺 口縁部	2区	口 径 15.3	淡褐色	やや粗	良好	内側で開く口縁部、端部は内外に肥厚し、内面 すこし広い面となる。 ヨコナデ。	古褐色
35	壺 口縁～体部	3区	口 径 13.7 最大径 21.4	にぼい褐色	粗～ やや粗	良好	端部の少し細い部分から丸底を持った扭曲した、直筒的 な構造。口縁部に墨文。端部は内へつまみされ、外側 すこし広い面を持つ。内面へラケズリ。ナデ。	阿波系 外縁に煤付着 表皮剥離する
36	壺 口縁～肩部	1区	口 径 14.1	にぼい褐色	粗～ やや粗	良好	体幅から「し」の字形に扭曲し、内面氣味に開く口縁部に半 周横割跡がある。端部は肥厚気味につまみ上げられ、外縮する 面を持つ。 外側は「口縁部」ハケ後左筋のハケ、内面ナデ、ヨコナデ。	阿波系 内面に煤付着 表皮剥離する
37	大型立口壺 口縁部	1区	口 径 23.0	素褐色～ 茶褐色	粗～ やや粗	良好	直立する底部から内側時に開く口縁部。端部は 内側へつまみ上げられ、外縮する回転を持つ。 外側は「口縁部」ハケ後左筋のハケ、内面ナデ、ヨコナデ。	
38	直口壺 口縁部	1区	口 径 13.5	灰褐色 中筋は灰褐色	やや粗	良好	直立的に伸びる口品底、端部は外へわざかにつま み上げられる。外側は「口縁部」ハケ後左筋のハケ、内面ナデ、ヨコナデ。	庄内系
39	直口壺 口縁部	1区	口 径 18.0	素褐色	粗	良好	体幅から「く」の字形に扭曲する口縁部、端部は外へ 開き、丸く続る。ナデ、ヨコナデ。	内面に褐色顔 料付着
40	直口壺 口縁部	1区～ 2区	口 径 6.1	灰褐色	やや粗 ～粗	良好	内面は張り出る状態で、外側へ開く口縁部、端部は欠損、 「口縁部」ハケ後左筋のハケ、内面ナデ。	庄内系 表皮剥離する
41	直口壺 口縁部	2区	口 径 11.8	素褐色～ 茶褐色	粗～ やや粗	良好	内面は張り出る状態で、外側へ開く口縁部、端部は欠損、 「口縁部」ハケ後左筋のハケ、内面ナデ。	

番号	器種・部位	出土地点	生長 (cm)	色調	胎土	施成	形態・調整の特徴	参考
42	壺 口縁～両部	2区	口 径 14.6 最大径 16.0	淡褐色 やや粗	やや粗	良好	扁平な体部から「く」の半形に屈曲する口縁部。底部は尖り矢張りに絞る。外側横ハケ、内面へラケズリ彫ナデ、口縁部横ハケ。	内面体部・外 面腹部に異端
43	深口口縁部 口縁部	4区	口 径 17.4	明褐色	やや粗	良好	下段の口縁部から鈍く立ち上がり、外反気味に聞く。口縁部横ハケに引る。底部は丸く終わる。	表皮剥離する
44	小型円筒 口縁～体部	1区～ 4区	口 径 17.4	青褐色～ 明褐色	やや粗	良好	浅い体部から水平近くに開いた後、強く外反してさらに開く。底部は丸く終わる。	表皮剥離する
45	小型有柄杯 口縁～体部	2区	口 径 14.5	明褐色～ 淡褐色	素	良好	濃い体部から内側して開いた後、強く外反してさらに開く。底部は尖る。底部は丸く。縫合ないハラミガキ、ヨコナデ。	外面に媒材着 付
46	小平壺 口縁～体部	3区	口 径 9.7 最大径 10.0	におい褐色	素	良好	上位に最大径のある体部から粗筋し、内面気味に立ち上がる口縁部に引る。底部は丸く。外側縫合かいハラミガキ、内面ナデ。口縁部へラミガキ。	
47	小型壺 底部	2区	底 径 3.1	暗赤褐色	素	良好	半球形の体部下半のみ遺存。わずかに半たい瓶を構つ。	黒斑あり
48	小型器台 受部	2区～ 3区	口 径 9.1	暗褐色 中核～灰色	素	良好	浅い口縁部の受け部。口縁部のうち上がりは聞く。口縁底部はわずかに外へつまら出される。脚部との接合部で欠損。縫合かいハラミガキ、ナデ。	
49	小平壺台 受部	2区	口 径 16.0	灰褐色	素～ やや粗	良好	半球形の受部。底部はわずかに立ち上がり、外に凹状の跡がめぐる。脚部との接合部から欠損。縫合不規則。	表皮剥離
50	小型器台 脚部	2区	脚 径 9.9	におい褐色 ～淡褐色	素	良好	内面気味に聞く脚部。底部は尖る。外側脚部不明、内面ナデ、底部近くにハケ。	
51	高杯 杯体部	2区～ 3区	口 径 4.8	淡褐色	素～ やや粗	良好	半球形の脚部。底部は丸く終わる。脚部との接合部から欠損。内面ナデ。内面ナデ後端文状の放射状ハラミガキ。	表皮剥離
52	高杯 脚部	4区	脚 径 1.8	淡褐色	やや粗	良好	柱状底から鈍く屈曲して聞く脚部に至る。底部は先端となってわずかにつまら。内側する筋を持つナデ、ヨコナデ。内面筋筋にハケ。	
53	高杯 杯体部	3区	杯底径 11.3	赤褐色～ 明褐色	素～ やや粗	良好	水平近くに聞く脚部からわずかに屈曲し、外反気味に立ち上がる。底部に至る。底部は欠損。ハラミガキ、内面筋筋部は放射状に見られる。	
54	高杯 脚部	3区	脚底径 2.3	暗赤褐色	素～ やや粗	良好	ゆるやかに聞く脚部状態のみ遺存。脚部・底部との接合部からの欠損。外側へラによる削取り後ハケ、内面絞り後ナデ。	表皮剥離する
55	高杯 脚部	1区	脚 径 12.2	淡褐色～ におい褐色	素～ やや粗	良好	直線的に聞く脚部。底部は尖る。「孔痕」。内面ハケ。	

6 土器の表面に見られる砂礫

奥出 尚

中田遺跡から出土した庄内式期の土器の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。中田遺跡では非常に多くの搬入土器が報告されている。今回の観察結果も従来の結果と同じように古備、播磨、阿波、加賀と各地からの土器が集まっている。観察方法は、最初に裸眼で全体を観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察は砂礫の種類、粒径、粒形、量等に注意して行った。石英と長石が噛み合っているから花崗岩とした砂礫であっても大きなものであれば、花崗閃緑岩あるいは片麻状花崗岩のようになる場合もある。また、見えている部分だけでの判断であるため粒径については長径を示していると言い難い。粒径は目測によりmm単位で行った。また、量についても目測により行った。

構成砂礫種は岩石片として花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。これら砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大9mmである。石英・長石・石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大6mmである。長石・角閃石・角閃石・黒雲母が噛み合っている。

流紋岩：色は灰色、灰白色、暗灰色、茶褐色、淡茶褐色、赤茶色である。粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大6mmである。石基はガラス質である。

砂岩：色は灰色、茶褐色で、粒形が亜角、粒径が最大1mmである。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色で、粒形が亜角、粒径が最大1mmである。

チャート：色は灰白色、灰色、褐色で、粒形は角、亜円、粒径が最大0.7mmである。

片岩：色は褐色、灰色、灰褐色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、亜円、粒径が最大10mmである。泥質片岩、石英質片岩、紅塵石片岩等である。

火山ガラス：無色透明、黑色透明で、粒径が最大0.7mmである。貝殻状、フジッポ状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大1mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が最大8mmである。

黒雲母：金色、黒色で、板状である。粒径が最大6mmである。

角閃石：黒色、茶褐色で、粒形が角、粒状、柱状をなし、粒径が最大8mmである。結晶面が認められるものがある。また、くさっているものもある。

輝石：褐色透明、黒色透明で、粒形が角、柱状をなし、粒径が最大0.3mmである。自形をなすものが多い。

以上のような砂礫種から源岩を予測した砂礫種構成を求めれば、流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなるIV類型、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫からなるII類型が多く、花崗岩質岩起源と推定される砂礫からなるI類型、片岩起源と推定される砂礫からなるV類型がごく僅かである。僅かに含まれる砂礫種から並類型に区分すれば、Ib類型、Ibd類型、Ibdg類型、IIa類型、IVe類型、IVegh類型、Vlh類型、Vln類型の8並類型に区分される。

各類型について述べる。

I類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる Ib類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる Ibd類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートを僅かに含む砂礫からなる Ibdg類型

II類型：閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる IIa類型

IV類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる IVe類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩、片岩を僅かに含む砂礫からなる IVegh類型

V類型：片岩起源と推定される砂礫を主とする。

片岩起源と推定される砂礫からなる Vlh類型

片岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石を僅かに含む砂礫からなる Vln類型

土器に含まれる砂礫の採取地を土器が出土した大阪府八尾市中田を中心にして求める。中田遺跡は大和川の冲積地に形成された遺跡で、東に牛駒山地、西に上町台地が南北にのびていてほぼ中央部に位置する。大和川は柏原市船橋付近で石川と合流して北流する。このような地形と岩石分布から流出する河川の砂礫は場所により若干異なる。山地から流出する谷川等の河川の砂礫には比較的長石が多く、砂礫の供給地が遠くなる大和川では長石が比較的少ない。また、上町台地近くの西部になればチャートが比較的多くなる。河内一帯の山地には花崗岩類が広く

分布するため花崗岩類を主とする砂礫となる。流紋岩質岩起源と推定される砂礫や片岩起源と推定される砂礫を主とする砂礫は明らかに他地の砂礫である。

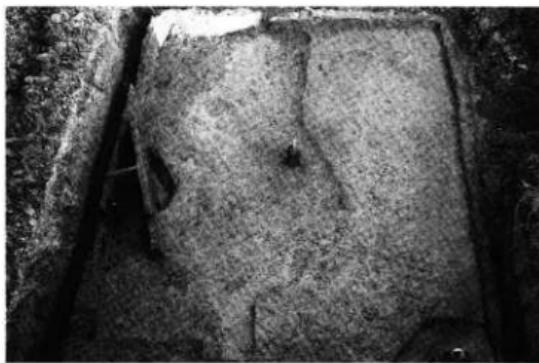
砂礫構成の特徴（砂礫相）を基に砂礫の採取地を推定すれば次のようになる。

I b類型で比較的長石が少ない砂礫構成は船橋以北の人和川の砂礫と推定され、中田遺跡付近の砂礫とも同じである。I b類型で比較的長石が多い砂礫は牛駒山地から流れる谷川の砂礫に似ているものがある。場所は限定出来ない。I bd類型に属する砂礫は自形の石英を含み、角閃石に結晶面が見られ、閃緑岩に柱状で自形をなす角閃石が見られることから吉備足守川流域の加茂遺跡付近の砂礫に酷似する。チャートや片岩も含め旭川流域の古間川遺跡付近の砂礫に酷似する。I bdg類型に属する砂礫はチャートや砂岩を含み、比較的長石が多く、自形の石英が僅かに含まれることから石川下流域の古市から玉手山付近にかけての石川の砂礫に酷似する。II a類型に属する砂礫で角閃石が柱状で結晶面がみられるものが多く、閃緑岩に柱状自形の角閃石がみられ、自形の石英もみられる砂礫は、吉備足守川加茂遺跡付近の砂礫と推定される。裸眼で白色の長石や黒色粒状の角閃石が目立ち、花崗岩質岩起源の砂礫が少なく、角閃石に風化しているものが多い砂礫相を示すものは河内とした砂礫構成である。このような砂礫構成は砂礫が角張っており、閃緑岩の媒乱砂に中田付近の粘土を混ぜて胎土としたものであると推定される。このような砂礫構成の土器は中田遺跡出土の弥生時代後期の大型器台に始まるといえる。恩智神社東方で砂礫が得られる。このような砂礫構成を河内タイプとした。IVe類型の砂礫は播磨、山陰、加賀では砂礫相が若干ことなることから区分される。IVe類型の砂礫は片岩やチャート等がふくまれることから播磨付近の砂礫と推定される。VIII類型の砂礫には砂岩や泥岩、花崗岩等が認められないことから古野川下流の阿波付近の砂礫と推定される。

以上のように在地で採取される砂礫もあるが、吉備の足守川中流付近、播磨南部付近、古野川下流の阿波付近、加賀南部、近くでは石川下流域の砂礫で製作されたと推定される上器が中田遺跡から出土しているといえる。

種類による解説
参考書例：第一刷参考書
種類による解説
参考書例：第一刷参考書

図 版



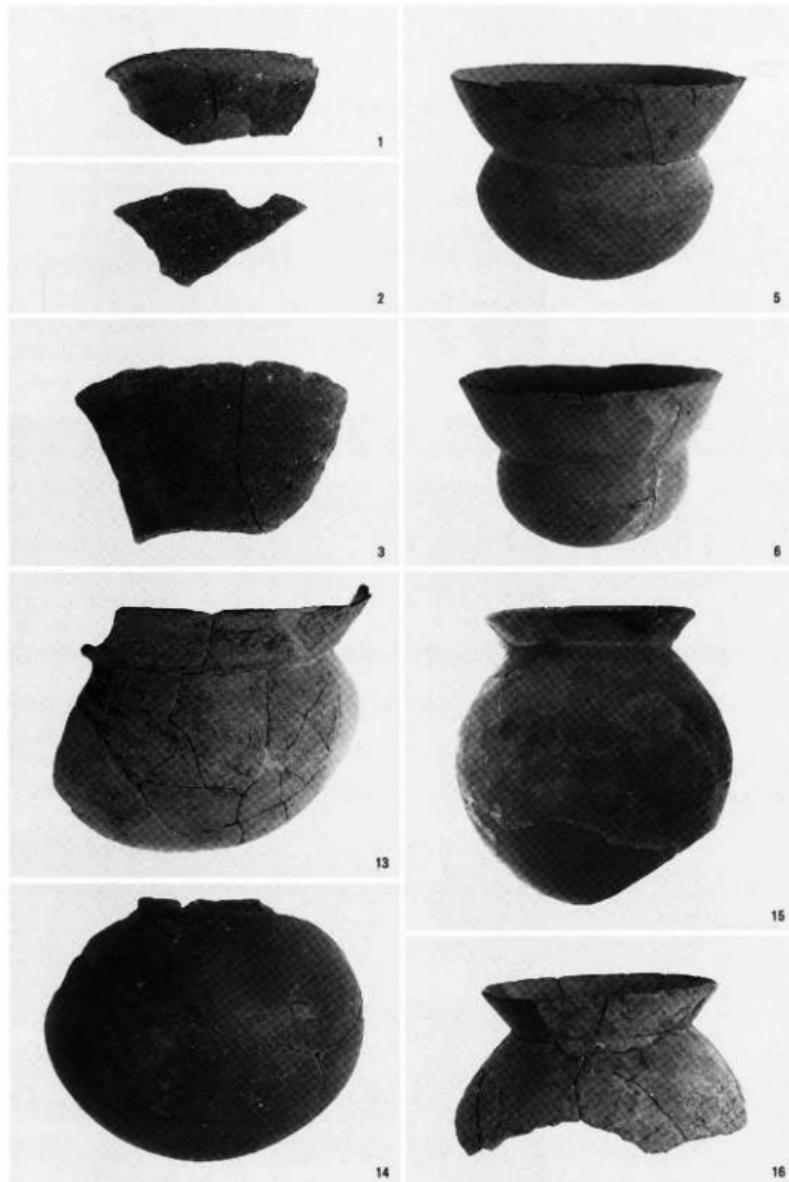
全景（西から）



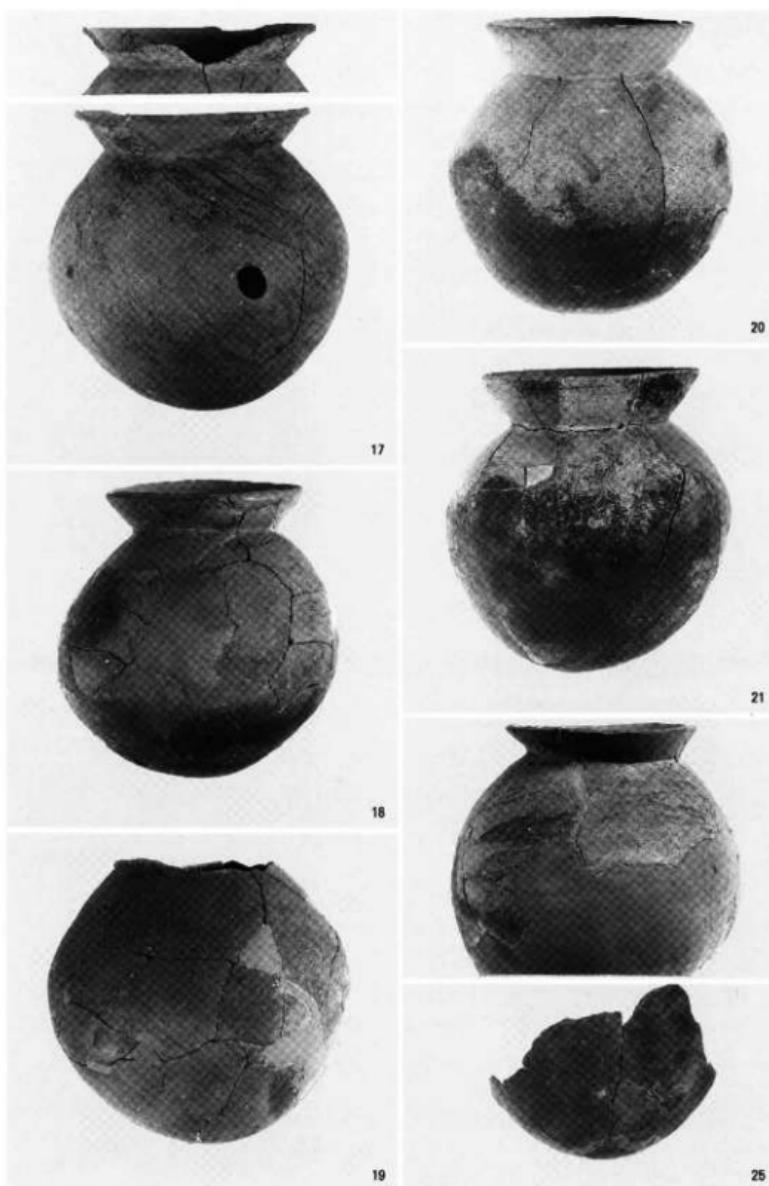
S K 201遺物出土状況（西から）



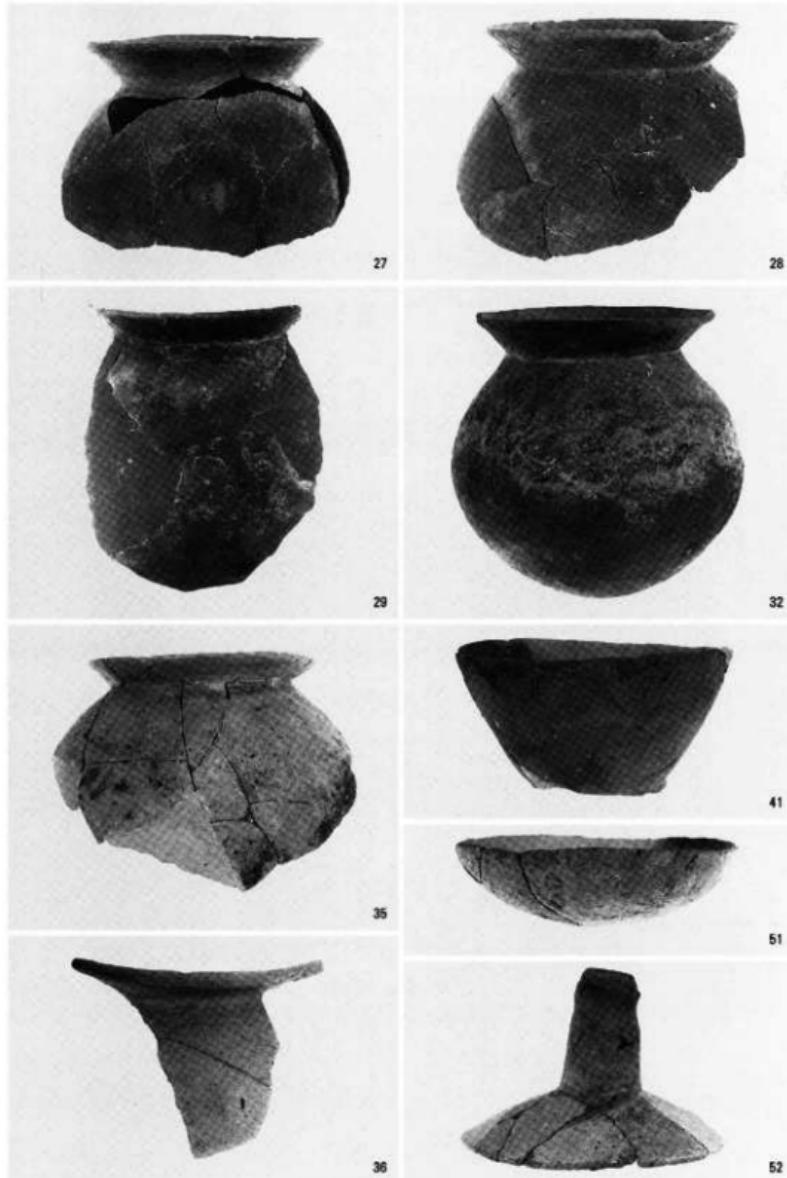
S K 201発掘（西から）



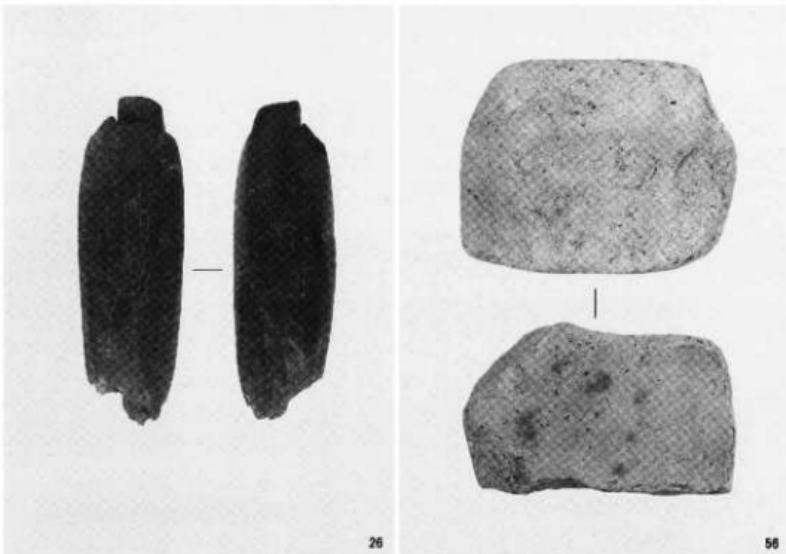
SK 201出土遺物



SK 201出土遺物



第7層出土遺物



26

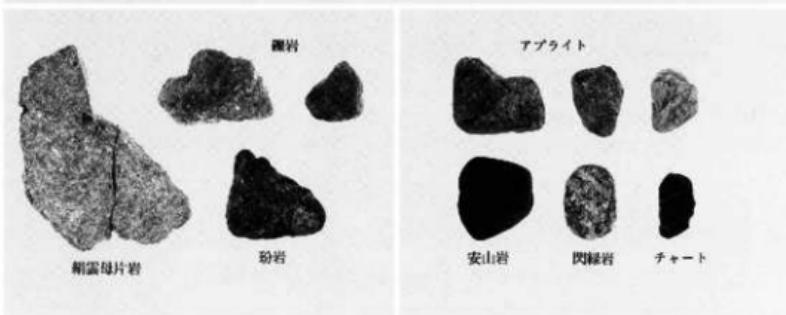
56



石英質砂岩

石英質片岩

石英



花崗母片岩

アブライト

粉岩

安山岩

閃綠岩

チャート

II 中田遺跡第6次調査(NT90-6)

例 言

- 1、本書は、八尾市八尾木北3丁目～刑部2丁目地内で実施した公共下水道工事（平成2年度第22工区）に伴う発掘調査の報告である。
- 1、本書で報告する中田遺跡第6次調査（NT90-6）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第72号 平成2年8月22日付）に基づき、八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は、平成3年1月8日から2月15日（実働9日間）にかけて成海佳子を担当者として実施したが、1区～4区の調査区のうち、2区・3区は坪田真一、4区は高萩千秋が補佐した。
- 1、調査面積は約180m²を測る。
- 1、現地調査には、岡田聖一・濱田千年が参加した。
- 1、内業整理には、磯上サカエ・高柳恵美・宮崎寛子・村井俊子・山内千恵子が参加した。

目 次

1 はじめに.....	21
2 調査の方法と経過.....	21
3 調査概要.....	22
1) 1区.....	22
2) 2区.....	24
3) 3区.....	26
4) 4区.....	30
4 まとめ.....	31
5 出土遺物観察表.....	32

II 中田遺跡第6次調査(NT90-6)

1 はじめに

今回の調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡内で実施した発掘調査の第6次調査にある。調査地である八尾木北3丁目～刑部2丁目は中田遺跡の南東部に位置しており、遺跡内の北西部に位置する第5次調査地(NT90-5=本書I)とは400～800m隔たっている。

当地周辺では、大阪府教育委員会85年度調査地No40トレンチ(本書I第2図-⑪)が1区の北隣に接しており、そこからさらに西100mに市教委87年度調査地(⑬)が位置している。さらに1区の南側の楠根川では、92年度・93年度に河川改修工事に伴う発掘調査が当調査研会によって行われている(⑫・⑭)。また、3区の南側に位置する刑部小学校を中心とした地区では、1974年度以降多くの調査がなされており、多大な成果が上がっている(本書I 第2図・一覧表参照)。

2 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成2年度第22工区)に伴うもので、八尾木北3丁目から刑部2丁目に至る東西約450mの道路下の工事の範囲のうち、4か所の立坑構築部分を調査対象としたものである。総調査面積は約180m²、調査期間は平成3年1月8日から2月15日までの9日間である。

4か所の調査区は、西から1区～4区と呼び、まず西端の1区から調査を実施した。1区の調査終了後3区の調査を行い、工事の進捗状況に合わせて、2区、4区の順に調査を行った。各調査区では、現地表下1.3～1.5mまでの盛土や搅乱・旧耕土などを機械掘削した後、以下の0.3～0.5m程度の厚さの遺物包含層を手掘りとして、遺物・遺構の検出に努め、写真撮影・図面作成などの記録保存を随時行った。調査終了後は、各調査区で工事による掘削が終了する時点まで立ち会い、下層の状況を確認した。

1区は楠根川左岸に位置する調査区である。平成3年1月8日から機械掘削を開始し、1月12日に現地表下4.2mまでの掘削を終了した。調査面積は67m²である。



第1図 調査区設定図
(S=1:2500)

2区は1区から東約200mに位置する調査区で、平成3年2月4日に機械掘削を開始し、同時に現地表下3.8mまでの掘削を終了した。調査面積は20m²である。

3区は2区からさらに東約100mに位置する調査区で、平成3年1月16日から機械掘削を開始し、1月18日に現地表下4.1mまでの掘削を終了した。調査面積は74m²である。

4区は3区からさらに東約100mに位置する調査区で、平成3年2月15日に機械掘削を開始し、同日に現地表下4.0mまでの掘削を終了した。調査面積は17m²である。

3 調査概要

1) 1区

調査期間：平成3年1月8日～12日

調査面積：67m²

楠根川左岸の調査区で、北西側は大阪府教育委員会昭和60年度調査地No.40トレンチに接している。現地表面の標高はT.P.+10.4mで、盛土は1.5～2.0mの厚さでなされている。西半分は盛土以下が現在の楠根川の流路と一致しており、調査区の中央部では盛土の直下（T.P.+8.5m前後）で楠根川右岸が認められた。

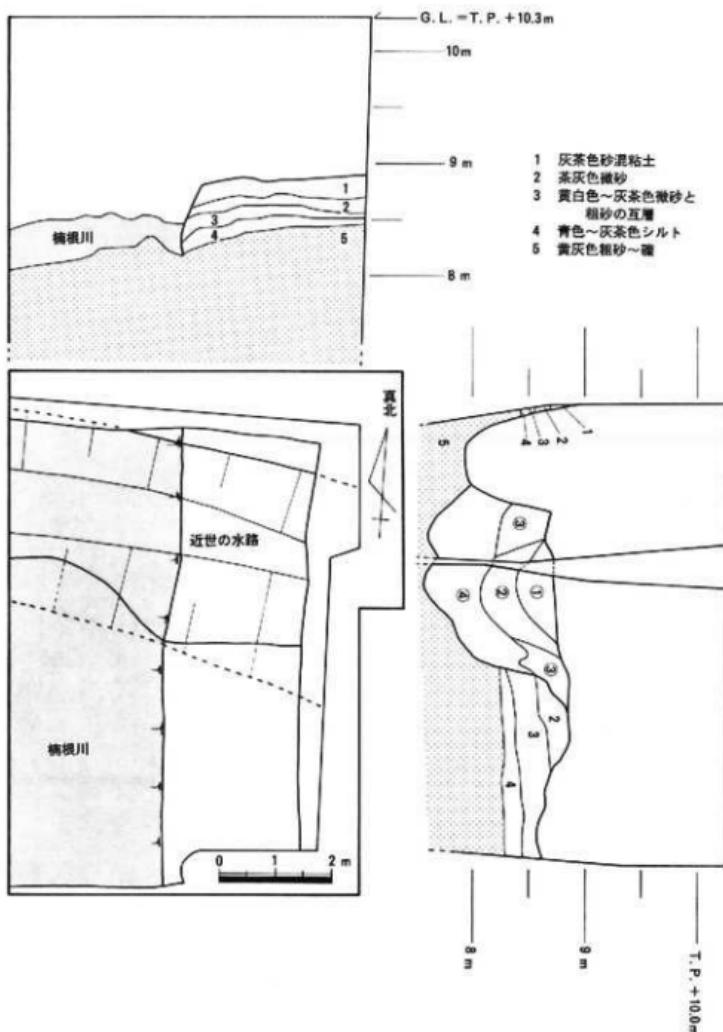
東半分の基本層序は、盛土以下第1層灰茶色砂混じり粘土（層厚0.15～0.2m）、第2層茶灰色微砂（層厚0.1～0.3m）、第3層黄白色～灰茶色微砂と粗砂の互層（層厚0.05～0.3m）、第4層青色～灰茶色シルト（層厚0.05～0.3m）、第5層黄灰色粗砂～疊（層厚2.5m以上）である。第1層～第4層は流路に切られる形で東半分にのみ堆積する土層である。第5層は調査区全体に堆積しており、改修以前の楠根川旧流路と考えられる。

このうち第1層上面で近世～近代の甕などを検出したが、いずれも楠根川改修直前までのものである。また、第5層からは、コンテナ1箱分の土器が出土している（第3図1～22）。

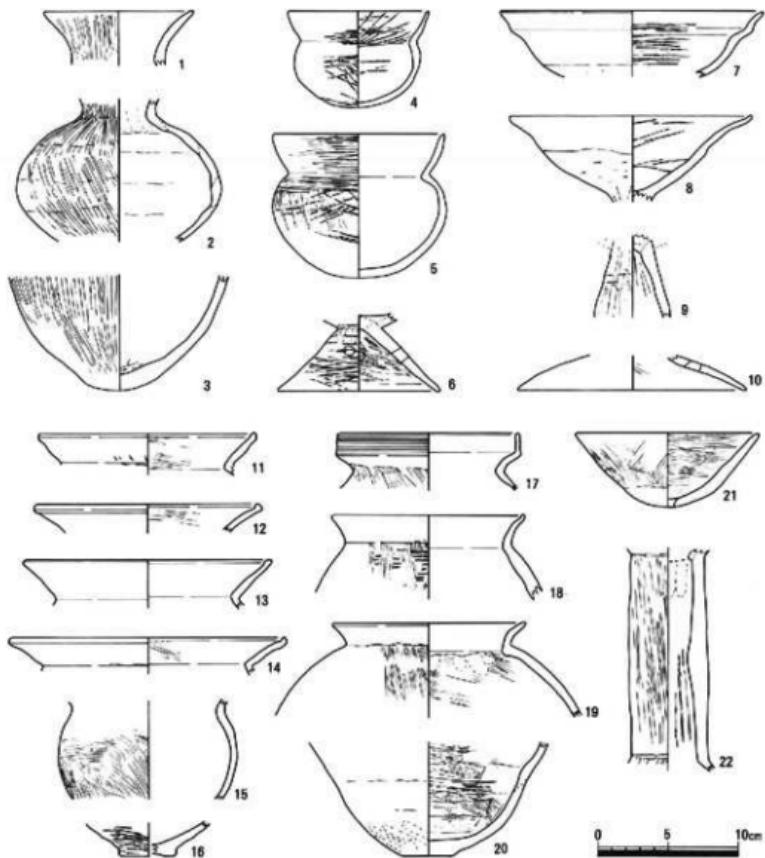
近世～近代の甕：調査区北側で検出した。東から西への流路をもつが、西側半分は楠根川の流路によって上面が削平されている。検出レベルはT.P.+8.65～8.85mの第2層上面であるが、構築面はそれよりも上方の可能性がある。北側の肩は現代（楠根川改修以前）の水路によって切られているが、上面の幅は、約1.9m程度、深さは1.05mを測る。内部堆積土は、上から①灰褐色微砂、②灰褐色シルトと微砂の互層、③灰褐色粗砂混じりシルト、④灰褐色シルト～微砂と粗砂～疊の互層である。

第5層出土遺物：第5層出土遺物の時期は、おもに古墳時代前期初頭（庄内式期）であるが、弥生時代中期（Ⅲ様式期）の高杯（22）なども含まれている。

古墳時代前期初頭の土器には小型直口壺（1）・細頸壺（2）・小型壺（4・5）・小型器台（6）・二段屈曲の小型鉢（7）・高杯（8～10）・甕（11～19）・底部有孔鉢（21）などの多く



第2図 1区平断面図 (S = 水平1:100、垂直1:50)



第3図 1区出土遺物実測図 ($S = 1 : 4$)

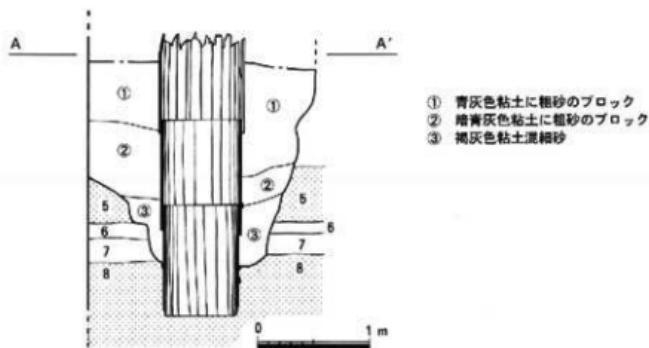
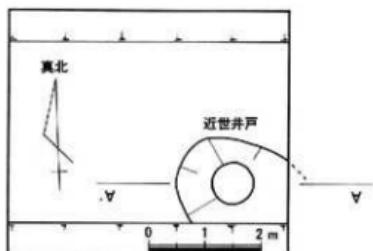
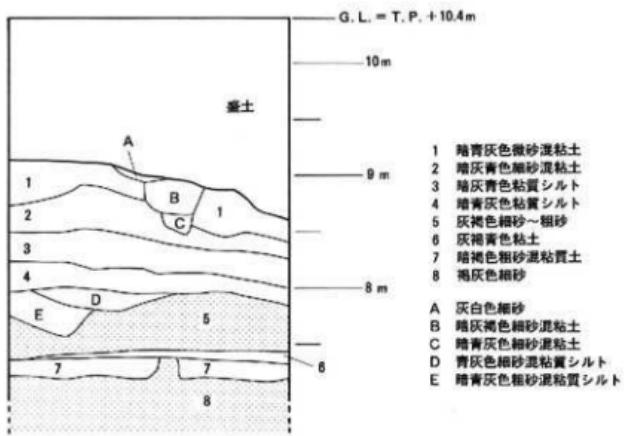
の器種があり、吉備（12・21）・阿波（19）など他地方の土器がかなり含まれている。遺存状態は比較的良好で、ごく近隣から河川内に流入したものと考えられる。

2) 2区

調査期間：平成3年2月4日

調査面積：20m²

1区から東方約200m地点に位置する調査区で、現地表面の標高はT.P.+10.4m前後を測る。調査区南部のほとんどは攪乱をうけていた。北側で認められた基本層序は、盛土（層厚1.3～



第4図 2区平面面図 (S=水平1:100、垂直1:50)、近世井戸断面図 (S=1:50)

1.6m) 以下第1層暗青灰色微砂混じり粘土(層厚0.15~0.4m)、第2層暗灰青色細砂混じり粘土(層厚0.2~0.4m)、第3層暗灰青色粘質シルト(層厚0.3~0.35m)、第4層暗青灰色粘質シルト(層厚0.15~0.25m)、第5層灰褐色細砂~粗砂(層厚0.2~0.5m)、第6層灰褐色粘土(層厚0~0.1m)、第7層暗褐色粗砂混じり粘質土(層厚0~0.2m)、第8層褐灰色細砂(層厚0.6m以上)で、このうち第5層以下が埋没河川の土層である。

ここでは、調査区南東隅で近世井戸を検出したが、上面はほとんどが削平されているため、構築面は不明である。

近世井戸：井戸掘形上面の径は2m前後、深さ2.2m程度あり、井戸底は、湧水層である第8層にまで達している。井戸側は、桶を積み上げたもので、3段分が遺存していた。井戸側は径0.65~0.75m、高さ1m前後、板の厚さ1.5cm前後である。井戸掘り形の堆積土は、上から①青灰色粘土に粗砂のブロック、②暗青灰色粘土に粗砂のブロック、③褐灰色粘土に混じり細砂である。井戸掘形内部から磁器碗1点が出土している。

3) 3区

調査期間：平成3年1月16日～18日

調査面積：74m²

1区から東350m、2区から150m地点に位置する調査区で、現地表面の標高はT.P.+10.3m前後を測る。調査区のほとんどでは、現地表から1~1.5m程度の深さまで擾乱が及んでおり、IH状をとどめていたのは南東部のみであった。南東部では、盛土が0.65m程度なされており、盛土以下第1層旧耕土(層厚0.2m)、第2層床土(層厚0.05~0.1m)、第3層褐色疊混じり粘質土(層厚0.15~0.2m)、第4層淡褐色疊混じり粘質シルト(層厚0.15~0.2m)、第5層淡褐色粘質シルト(層厚0.1~0.15m)、第6層淡青灰色シルト(層厚0.15~0.2m)、第7層淡青灰色~青灰色微砂(層厚0.3~0.4m)、第8層黄白色粗砂(層厚3.5m以上)である。

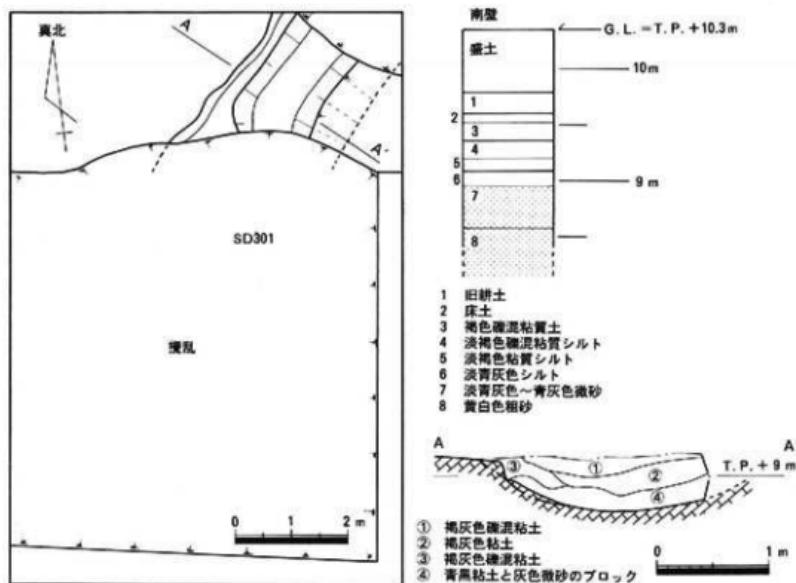
このうち第6層上面で、奈良時代の溝SD301を検出した。第6層中からは、弥生時代中期(直様式期)～古墳時代前期(布留式期)の土器類が少量出土しているが、いずれも摩耗をうけた小片である。

SD301：調査区東北部で検出した。東部・南部は削平されている。北東-南西に流路をもつもので、検出長3.2m、検出幅2.0mを測る。2段の掘り形を持つもので、深さは0.5mを測る。内部堆積土は上から①褐灰色疊混じり粘土、②褐灰色粘土、③褐灰色疊混じり粘土、④青黒色粘土と灰色微砂のブロック層である。このうち①層には炭が多量に含まれている。

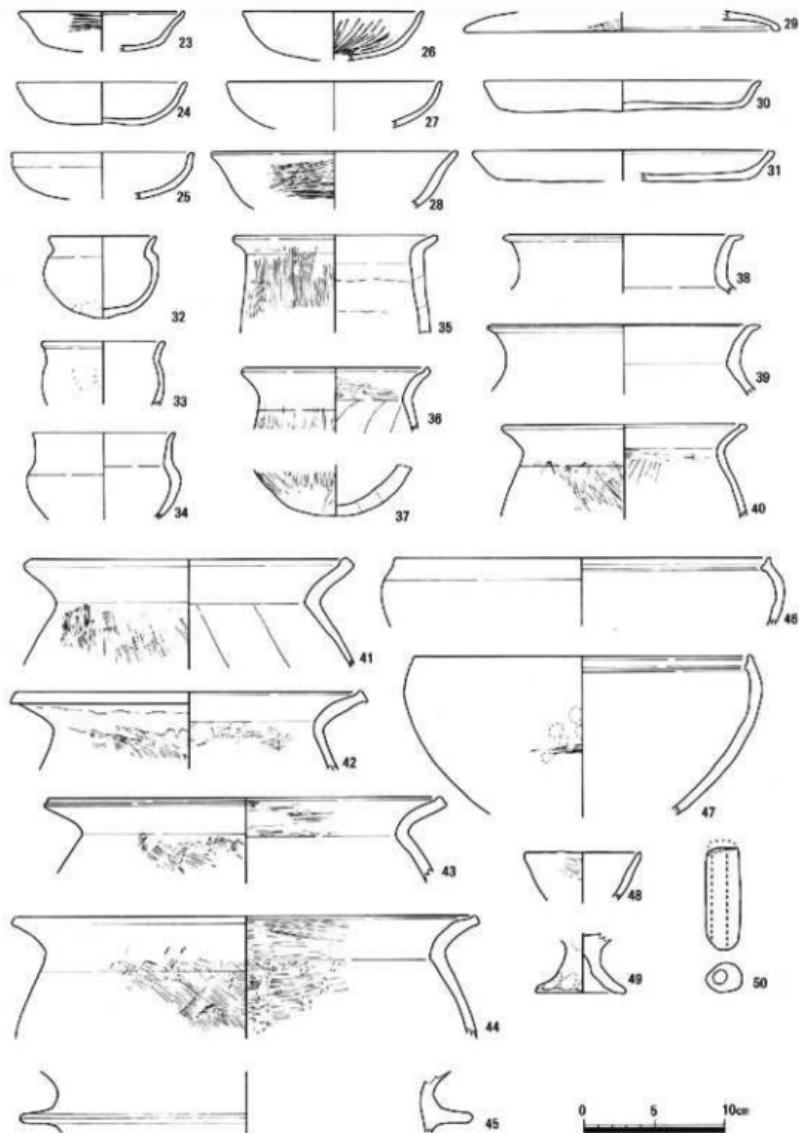
①・②層からは、土師器杯(23~31)・小型壺(32~34)・短頸壺(38~39)・甕または鍋(35~37・40~44)・羽釜(45)・鉢(46~47)・小型椀(48)・小型高杯(49)、須恵器長頸壺(53~54)・壺(55~59)・杯(60~63)・甕などの多量の土器のほか、土鍾(50)・砥石(S1・

S2) がコンテナに2箱分出土している(第6図・第7図)。土錐(50)はややいびつな管状土錐で、上端および下端の一部が折損している。表皮の剥離が甚だしく、紐ずれ等の使用痕は未確認である。短径2.1cm・長径2.3cm・現存長7.2cm、孔の径は1cm前後で、中心からはずれた位置に穿たれている。砥石(S1)は平面が台形を呈し、上端は折損する。横断面は台形、縦断面は長方形を呈する石材で、平坦な4面に使用痕が認められる。現存長8.4cm・最大幅6.3cm・厚さ4.8cmを測る。砥石(S2)は平面の形状が三角形、断面長方形を呈する石材で、上下の2面に使用痕が認められる。長さ7.5cm・最大幅8.6cm・厚さ2.7cmを測る。

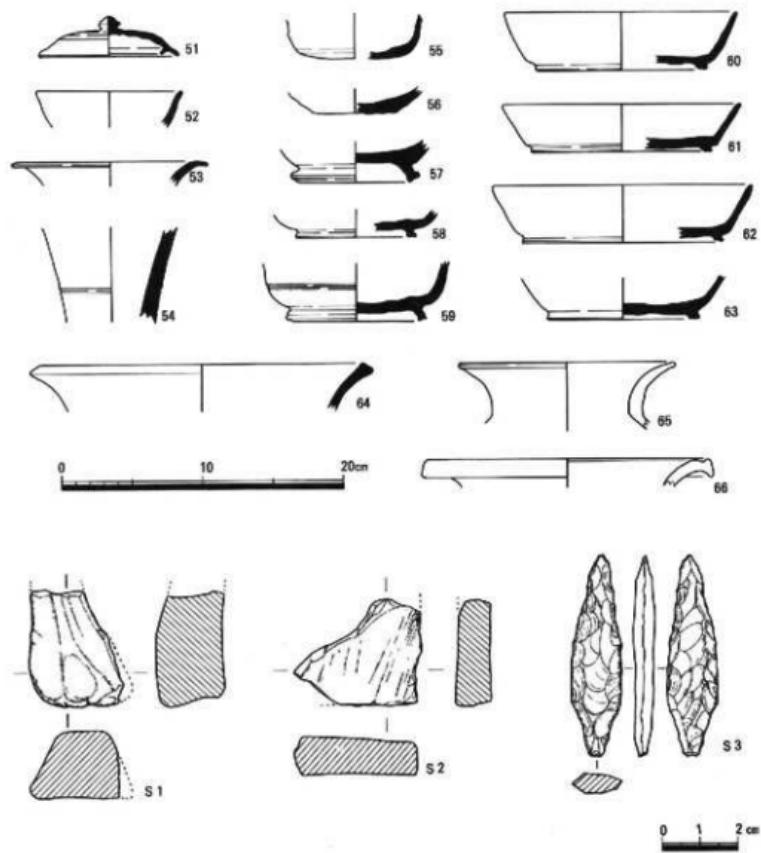
第6層出土物: 第6層中からは、弥生時代後期の壺(65)、同中期の壺(66)、石錐(S3)が出土している。石錐は有茎式で細身、断面の形状は薄い菱形を呈している。長さ5.3cm・最大幅1.3cm・厚さ0.5cm前後を測る。



第5図 3区平面図 ($S = 1 : 100$)、柱状図 ($S = 1 : 50$)、SD301断面図 ($S = 1 : 50$)



第6図 3区出土遺物実測図-1 (S=1:4)



第7図 3区出土遺物実測図-2 (S=1:4、石器のみ2:3)

4) 4区

調査期間：平成3年2月15日

調査面積：17m²

東端の調査区で、3区から東約100mの地点にあたり、現地表面の標高はT.P.+10.6m前後を測る。調査区内のほとんどが水道管布設の際に現地表から0.9m程度の深さまで削平されている。

基本層序は、盛土以下第1層灰褐色砂礫混じり粘土（層厚0.2m）、第2層暗灰褐色砂礫混じり粘質土（層厚0.3~0.4m）、第3層灰褐色粘土混じり細砂（層厚0.15~0.2m）、第4層灰褐色細砂（層厚0.15~0.3m）、第5層淡褐色細砂（3m以上）が確認できた。

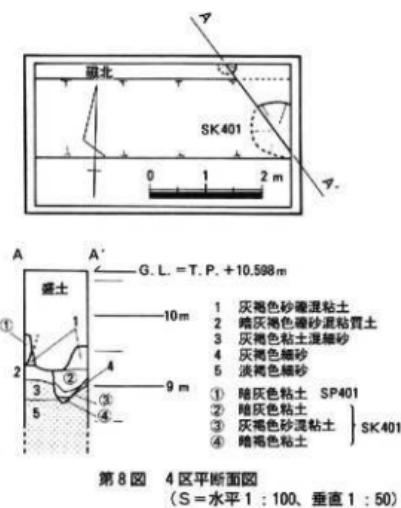
そのうち第1層は鎌倉時代以降の瓦器

片を含む土層、第2層は古墳時代前期（布留式期）の遺物を含む土層で、上面に奈良時代的小穴SP401が切り込まれている。第3層は弥生時代後期（V様式期）の遺物を含む土層で、上面に古墳時代前期（布留式期）の土壤SK401が切り込まれている。また、第5層は1区～3区までの下層部分同様、埋没河川の堆積状況を示しており、弥生時代中期～後期の遺物（第9図69・70）が含まれている。

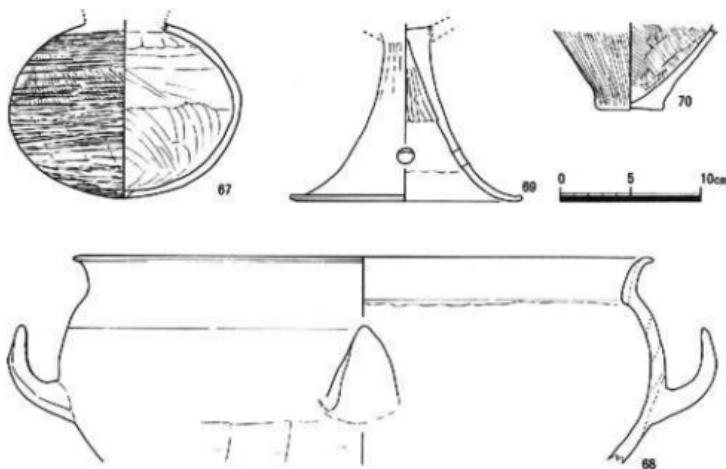
SP401：調査区北東部で検出した。北部は調査区外に至り、南部は削平されているため、平面の形状は明確ではないが、検出部での東西幅30cm、深さ30cmを測る。断面の形状はU字形を呈しており、内部には①暗灰色粘土が堆積している。内部から、土師器鍋（68）が口縁部を下に向けた状態で出土している。

SK401：調査区東部で検出した。SP401同様、南部は削平され、東部は調査区外に至るため、平面の形状は不明であるが、検出部での南北の径約1m、深さ50cmを測る。断面の形状は半球形を呈し、上から②暗灰色粘土、③灰褐色砂混じり粘土、④暗褐色粘土の3層がレンズ状に堆積している。底部付近から壺（67）が口縁部を下に向けた状態で出土している。壺は口縁部が打ち欠かれており、底部には焼成前に小孔が穿たれている。

第5層出土遺物：第5層からは、弥生時代後期の高杯（69）、同中期の壺（70）が出土している。ともに遺存状態は良く、1区の遺物同様、近隣の集落からの流出遺物と考えられる。



第8図 4区平面図
(S=水平1:100、垂直1:50)



第9図 4区出土遺物実測図 (S = 1 : 4)

4まとめ

古墳時代前期初頭の遺構には、1区の楠根川の旧流路、4区の土壙SK401がある。前者は大阪府教育委員会昭和60年度調査地№40トレンチで検出されているように、弥生時代から古墳時代前期までの流路である。また、土器の出土状況もこの調査と同様の状況を示しており、近隣の集落から流入したことが窺える。土壙SK401は、口縁部を打ち欠き、底部に穿孔をもつ壺(第9図-67)が埋められていたが、この出土状況から、なんらかの祭祀にかかる土器埋納遺構と考えられる。また、1区で検出された土器の一群には、他地方の特徴を持つものが多く含まれており、この時期に他地方との交易や交流が広範囲に及んでいることを示唆している。

奈良時代の遺構には、3区の溝SD301、第4区の小穴SP401がある。SD301からは、奈良時代前期(8世紀前半)の土器が多量に出土している。調査地付近一帯は「弓削行宮、由義宮=西ノ京」の推定地として一般に広く知られている地域であるが、土器の所属時期はこれらの時期よりもやや古く、両者の関係を追う必要があろう。また、小穴SP401からは、土師器鍋(第9図-68)が伏せられた状態で出土しており、下層遺構の土坑SK401と同様の土器埋納遺構とも考えられる。

各調査区の下層部には砂・礫が0.6~3.5m以上堆積しており、層中から弥生時代中期中頃(Ⅲ様式期)~古墳時代前期(庄内期)の遺物が出土していることから、当地一帯が古墳時代前期(庄内期)までは河川の氾濫の影響を受けやすい不安定な土地であったことが推定される。

5 出土遺物観察表

番号	名稱・部位	出土 場所	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
1	小型口沿部	1区 5番	口径 10.4	黄褐色	やや粗	良好	外反して聞く口縁部、端部は尖る。 外面縫へラミガキ、内面テグ。	
2	臺 体部	1区 5番	最大径 14.6	灰黑色	やや粗	良好	扁平な錐形の体部、頸部は細く縮まる。 外面縫へラミガキ、内面テグ。	
3	臺 底部	1区 5番	-	にぼい褐色	やや粗	良好	尖り気味の丸底。 外面縫へラミガキ、内面テグ。	
4	小型壺	1区 5番	口径 高さ 10.1 6.9	明橙色	密	良好	浅い半球形の体部、直線的に伸びる口縁部、端部 は尖る。 辺は腹側を浅ぐ。 ナデ、ヘラミガキ、ヨコナダ。	外面に焼付着
5	小型壺	1区 5番	口径 高さ 12.0 10.3	にぼい褐色	密	良好	扁平な錐形の体部、内側する口縁部、端部は尖る。 口縁部へ垂れ ナデ、ヘラミガキ、ヨコナダ。	外面に焼付着
6	小型器台 脚部	1区 5番	脚 径 11.5	明橙色	密	良好	円錐形の脚部、端部は尖る。4孔有する。 外面へラミガキ、ナデ、内面ハケ、ヨコナダ。	
7	鉢	1区 5番	口径 18.5	淡褐色	やや粗	良好	円錐形の体部から一旦強く屈曲して開いた後、外 反気味にさらに聞く口縁部、端部は尖る。 外面へラミガキの痕跡、内面へラミガキ、ナデ。	外面表皮剥離
8	高杯 杯部	1区 5番	口径 17.1	暗茶褐色	やや粗 ~粗	良好	円錐形の杯底部分から続く縦を持って外反気味に開 く口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げ跡。 外面へラミガキ後ナデ、内面ナデ、ヘラミガキ。	粗製
9	高杯 脚柱状部	1区 5番	-	明橙色	密	良好	ゆるやかに聞く円錐形の脚柱状部のみ遺存。 外面へラミガキ後ハケ、内面脱り目、下手ナデ。	
10	高杯 脚部	1区 5番	脚 径 16.2	黄褐色	密	良好	内側気味に大きく聞く脚柱部のみ遺存、端部は尖 り気味に丸く終る。1孔残存。 外面へラミガキの痕跡、内面ハケ、ナデ。	
11	壺 口縁部	1区 5番	口径 15.2	暗茶褐色	やや粗	良好	直線的に聞く口縁部、端部はつまみ上げられ、丸 みのある形状を持つ。 ヨコナダ、内面横ハケ。	布留指向
12	壺 口縁部	1区 5番	口径 15.4	墨褐色	密	良好	外反気味に聞く口縁部、端部はつまみ上げられ、 外傾する形態を持つ。 ヨコナダ、内面横ハケ。	内面
13	壺 口縁部	1区 5番	口径 17.2	暗褐色	やや粗	良好	体部からくる字形に現出し、わずかに内側気味に開 く口縁部、端部は内に巻き込む。 ヨコナダ。	布留指向 隠石
14	壺 口縁部	1区 5番	口径 19.6	黄褐色	密	良好	外反気味に聞く口縁部、端部はつまみ上げられ、 外傾する形態を持つ。 ヨコナダ、内面横ハケ。	内面
15	壺 体部	1区 5番	最大径 12.7	にぼい褐色	やや粗	良好	蝶形に近い体部上半のみ遺存、強く屈曲して口縁 部に至る。 外面ハケ、ヨコナダ、内面ナデ。	V様式系
16	壺 底部	1区 5番	底 径 3.6	暗茶褐色	やや粗	良好	体部から突出する平底、底面中央はわずかに隆む。 外面左上ヒタキ、内面・外底面ナデ。	V様式系
17	壺 口縁～肩部	1区 5番	口径 12.7	にぼい褐色	やや粗	良好	体部から外反して高い基上へ斜張する口縁部、 外側底外縫には10条の田字縫。 外面横ハケ、内面・口縁部ヨコナダ。	古備の壺
18	壺 口縁～肩部	1区 5番	口径 13.5	茶褐色	やや粗	良好	体部から丸く屈曲し、外反気味に聞く口縁部、端 部は丸くつまみ上げられる。 外面水平ヒタキ後横ハケ、内面ナデ、口縁部ヨコ ナダ。	他地方の壺
19	壺 口縁～門部	1区 5番	口径 13.5	外面明滑化 内面絞灰化	やや粗	良好	強く張る体部から一旦立ち上がり、強く外反する 口縁部に至る。端部は尖り気味に丸く終る。 外面横ナデ、内面横ナデ、ハケ、口縁部ヨコ ナダ。	阿波の壺
20	鉢 底部	1区 5番	底 径 3.4	黄褐色	やや粗	良好	底盤はわずかに突出する平底、口縁部は内側気味 に聞く、体部と口縁部、底盤の境は不明瞭。 外底面ナデナデ、内面横ハケ。	

番号	基準・部位	出土地点	法量(cm)	色調	動上	機械	形態・特徴	備考
21	舟孔跡	I 区 5層	口 径 13.0 高さ 8.3	黄褐色	やや粗	良好	直口の小舟跡。口縁部は尖り気味に丸く終る。 底部中央に丸く削られた孔。 下づくね既成後ハケ、ナデ。	古墳?の裏
22	弦生土器 高杯 脚付部	I 区 5層	径 5.2~5.6	黄褐色	やや粗	良好	太底の柱状部のみ遺存。底部との接合は円弧式。 外縁部へラミガキ、内面剥り目、擦押す。	直筒式
23	土師器 杯	3区 SI2301 ②層	口 径 13.6 高さ 3.8	にぼい褐色	やや粗	良好	底部から外反気味に開き口縁部に至る。底部は内へ丸くおさめる。 ナデ、ヘラミガキ。	
24	土師器 杯	3区 SD301 ②層	口 径 11.7 高さ 3.0	淡褐色	やや粗	良好	浅い平疊形。底部中央はわずかに窪む。口縁部は丸く終る。 擦押すナデ、ヨコナデ。	
25	土師器 杯	3区 SD301 ①層	口 径 12.9 高さ 3.3	にぼい褐色	やや粗	良好	やや深い半疊形。口縁部は直立し、端部は外へわずかにつまみ出される。 擦押すナデ、ヨコナデ。	
26	土師器 杯	3区 SD301 ②層	口 径 12.7 高さ 3.5	にぼい褐色	滑	良好	半疊形の体盤。口縁部は外反気味で、底部は外へわずかにつまみ出される。 擦押す、ナデ、ヨコナデ、内面反射状ラミガキ。	
27	土師器 杯	3区 SI2301 ②層	口 径 13.1	にぼい褐色	やや粗	良好	26に似る。 ナデ、ヨコナデ。	
28	土師器 杯	3区 SI2301 ①層	口 径 17.3	にぼい褐色	やや粗	良好	23に似る人型の基盤。 ナデ、ヘラミガキ。	
29	土師器 杯蓋	3区 SD301 ②層	口 径 21.8	にぼい褐色	やや粗	良好	内側して開く低い返形。口縁部は下へ丸くおさめる。 ナデ、ヘラミガキ。	
30	土師器 杯	3区 SD301 ②層	口 径 19.6 高さ 2.2	明褐色	やや粗	良好	平坦な底盤から弧曲し、直線的に開く口縁部へ至る。底盤は外へわずかにつまみ出される。 ナデ、ヨコナデ。	
31	土師器 杯	3区 SD301 ③層	口 径 20.1 高さ 2.2	にぼい褐色	やや粗	良好	平坦な底盤から内側して開く口縁部へ至る。底盤は内へ巻き込む。 ナデ、ヨコナデ。	
32	土師器 小鉢	3区 SD301 ②層	口 径 7.5 最大径 8.1 高さ 5.8	にぼい褐色	やや粗	良好	やや尖り気味の丸底を持つ体部から、続いた狭い脚を持つ。 内側して伸びる口縁部に至る。端部は尖る。 手づくね成形、ナデ、ヨコナデ。	黒墨あり
33	土師器 小鉢	3区 SD301 ②層	口 径 8.4 最大径 8.6	にぼい褐色	やや粗	良好	尖りの少ない体部から丸く屈曲して口縁部に至る。 底盤は外へつまみ出される。 擦押す、ナデ、ヨコナデ。	黒墨あり
34	土師器 小鉢	3区 SD301 ②層	口 径 10.0 最大径 10.8	にぼい褐色	やや粗	良好	体部からゆるやかに屈曲して直立気味の口縁部に至る。底盤は丸く尖る。 擦押す、ナデ、ヨコナデ。	
35	土師器 小鉢	3区 SI2301 ①層	口 径 13.0	にぼい褐色	やや粗	良好	尖りの少ない体部から上方へ折れる短い口縁部に至る。 底盤は丸く削る。 擦押す、ナデ。	長胴型
36	土師器 小型盤	3区 SI2301 ②層	口 径 13.0	明褐色	やや粗	良好	体部から丸く屈曲して口縁部に至る。底盤はつまみ出される。 外縁する面を削つ。 外縁ハケ、ヨコナデ、内面ヘラケヅリ、口縁部ハケ。	長胴型
37	土師器 小鉢盤	3区 SI2301 ②層	-	にぼい褐色	やや粗	良好	器内の刃いた底、底の底盤か。 底盤は内へ巻き込む。 底盤ハケ、ナデ、内面ナデ。	長胴型
38	土師器 裏	3区 SD301 ②層	II 径 16.4	淡褐色	やや粗	良好	体部から屈曲した後底立気味の口縁部に至る。底盤は外へつまみ出され、上方に水平な脚を持つ。 ナデ、ヨコナデ。	
39	土師器 裏	3区 SD301 ②層	II 径 18.4	淡褐色	やや粗	良好	38に似るが、口縁部は外傾する。 ナデ、ヨコナデ。	
40	土師器 裏	3区 SD301 ②層	口 径 16.9	淡褐色	やや粗	良好	尖りの少ない体部から丸みのあるくの字形に折角の口縁部に至る。 底盤は内へ巻き込む。 外縁ハケ、内面ヘラケヅリ、底盤ハケ、II 縫部ヨコナデ。	長胴型

番号	器種・部位	出土地点	法量 (cm)	色調	動土	焼成	思想・調整の特徴	備考
41	土師器 甕	3区 SD301 ②層	口 径 22.5	淡黄褐色	やや粗	良好	体部からくの字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は丸くつまらげられ、外傾する面を持つ。 外曲線ハイ、内曲線ヘラクス1、口縁部ヨコナガ。	長脚型
42	土師器 甕	3区 SD301 ②層	口 径 24.8	明褐色	やや粗	良好	体部から丸くの字形に屈曲し、口縁部に至る。端部は下につまみ出され、外傾する面を持つ。 外曲線ハイ、内曲線ヨコナガ。	長脚型
43	土師器 壺・瓶	3区 SD301 ②層	口 径 28.0	にぶい褐色	やや粗	良好	体部からくの字形に屈曲し、外反気味のU型部。端部は内にわざかにつまみ上げられ、外傾する回面となる。 外曲ハイ、ヨコナガ、内曲部ナダ、口縁部ハイカ。	
44	土師器 甕・瓶	3区 SD301 ②層	口 径 32.8	にぶい褐色	やや粗	良好	体部から丸くの字形に屈曲し、外反するU型部。端部は内にわざかにつまみ上げられ、外傾する回面となる。 外曲ハイ、ヨコナガ、内曲部ナダ、口縁部ハイカ。	
45	土師器 甕	3区 SD301 ②層	口 径 32.2	暗褐色	やや粗	良好	水平に伸びる内曲線のみ遺存。 ナダ、ヨコナガ。	器の下面に焼付有
46	土師器 甕	3区 SD301 ②層	口 径 26.8	外面赤褐色 内面黒褐色	やや粗	良好	内側する口縁部、端部は内外につまみ出され、内傾する回面となる。 ヨコナガ。	
47	土師器 甕	3区 SD301 ①層	口 径 24.1	淡褐色	やや粗	良好	内側する口縁部、端部は内外につまみ出され、内に段を持つ。 横押え、ヨコナガ。	
48	土師器 小容器	3区 SD301 ②層	口 径 8.0	淡黄褐色	やや粗	良好	手すくねの小型壺。 押さえナダ、ハイ。	
49	土師器 小容器 蓋	3区 SD301 ②層	底 径 6.2	にぶい褐色	やや粗	良好	手すくねの小型高杯。 押さえナダ、ナダ。	
50	土師器 土瓶	3区 SD301 ②層	長径 2.0~2.5	灰褐色	やや粗	良好	やや扁平な管状土瓶。瓶孔は径1cm前後で中心からずれる。	
51	泥质器 蓋	3区 SD301 ②層	口 径 7.3	灰色	密	良好	長い半球形、腹宝珠状のつまみを有する。 回転ケズ後回転ナダ。	灰かぶり
52	泥质器 (身)	3区 SD301 ①層	口 径 10.3	白灰色	密	良好	丸みのある橢形の器形。U縁部はわずかに外反し、端部は丸く終る。 回転ナダ。	
53	泥质器 身	3区 SD301 ②層	口 径 13.4	灰褐色	密	良好	強く外反する口縁部、端部は丸く終る。 内転ナダ。	灰かぶり
54	泥质器 瓦器	3区 SD301 ②層	-	黒灰色	密	良好	外傾する腹部のみ遺存、1条の内縁を有する。 回転ナダ。	自然釉
55	泥质器 瓦器	3区 SD301 ②層	-	灰黑色	密	良好	腹部の底部から内側して立ち上がる体部に至る。 前回転ケズ後回転ナダ。	
56	泥质器 瓦器	3区 SD301 ①層	底 径 6.0	外曲灰色 内面白灰色	やや粗	良好	平底の底盤から直線的に開く体部に至る。 外曲面ヘラキリ表筋止ナダ、内曲筋止ナダ。	
57	泥质器 瓦器	3区 SD301 ①層	高台径 8.2	青灰色	密	良好	ハの字形に開く丈高の高台、端部は水平な面を持つ。 回転ナダ。	
58	泥质器 瓦器	3区 SD301 ②層	高台径 8.4 0.5	灰色	密	良好	ハの字形に開く低い高台、端部は水平な面を持つ。 回転ナダ、内曲筋止ナダ。	
59	泥质器 瓦器	3区 SD301 ①層	高台径 10.0 1.0	灰色	密	良好	ハの字形に開く高い高台、端部は水平な面を持つ。 端部は高台部から内側へ、直線的に開く。U縁部は尖る。 回転ナダ、内外の底筋静止ナダ。	灰かぶり
60	泥质器 瓦器	3区 SD301 ②層	口 径 高 16.4 4.2	灰色	密	良好	端部に下がる低い高台、端部は水平な面を持つ。 端部は高台部から内側へ、直線的に開く。U縁部は尖る。	

番号	器種・部位	出土 地点	法量 (cm)	色調	胎土	焼成	形態・調整の特徴	備考
61	須恵器 杯(身)	3区 SD301 ①層	口 径 17.0 器 高 3.4	暗青灰色	密	良好	への字形に開く低い高台、端部は水平な面を持つ。全体との境には板を持ち直線的に開く。口縁端部は丸く飾る。 内輪ナデ、内外の底面静止ナデ。	
62	須恵器 杯(身)	3区 SD301 ②層	口 径 38.4 器 高 4.1	灰色	密	良好	への字形に開く低い高台、端部は内傾する面を持つ。全体は高台側から内傾して開く。口縁端部は丸く飾る。 内輪ナデ。	
63	須恵器 杯(身)	3区 SD301 ②層	高台径 10.9 高台高 0.5	灰褐色	密	良好	への字形に開く低い高台、端部は水平な面を持つ。全体との境には板を持ち直線的に開く。口縁端部は丸く飾る。 内輪ナデ、内外の底面静止ナデ。	
64	須恵器 盤	3区 SD301 ②層	口 径 33.0	灰色	密	良好	外反して開く口縁部、端部は外傾する面を持つ。 内輪ナデ。	
65	須生土器 高台盤	3区 SD301 ③層	口 径 15.1	にぼい褐色	やや粗	良好	体部から屈曲して外反する口縁部に至る。端部は丸い。 ヨコナデ。	V様式
66	須生土器 高台盤	3区 SD301 ④層	口 径 20.0	素褐色	やや粗	良好	外反する口縁部、端部は上下に拡張し、外傾する面を持つ。 ヨコナデ。	H様式
67	上輪器(?) 蓋全体	4区 SK401	最大径 16.4 操作高 12.3	にぼい褐色	やや粗	良好	扁平な球形の体部。底部中央に操作孔を有する。 前面へラケズリ後へケ、ナデ、ヘラミガキ、内面 削除えナガ。	内側に赤色顔 料付着
68	下輪器	4区 SP401	口 径 41.5	にぼい褐色	やや粗	良好	下鏡形の体部から外輪模様に開く口縁部に至る。 端部は尖る。把手は舌状。 ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ。	
69	須生土器 高台盤	4区 SD401 ③層	横 径 7.6	灰褐色	やや粗	良好	強く外反して口と支点の脚部、「孔を有する」 外面へラによる面取り後ナデ、ヨコナデ。内面 削り落ヨコナデ。	V様式
70	須生土器 高台盤	4区 SD401 ④層	底 径 4.5	素褐色	やや粗	良好	体部から突出する半球、外底面中央はわずかに窪む。 外輪模様へラミガキ、外底面～底面削面ナデ、内底 ハケ。	E～H様式

図 版



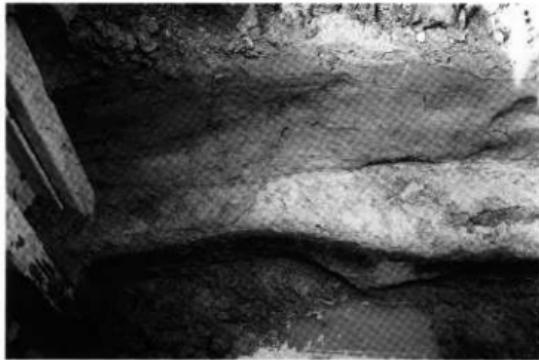
1区全景（東から）



3区全景（西から）



3区SD 301断面



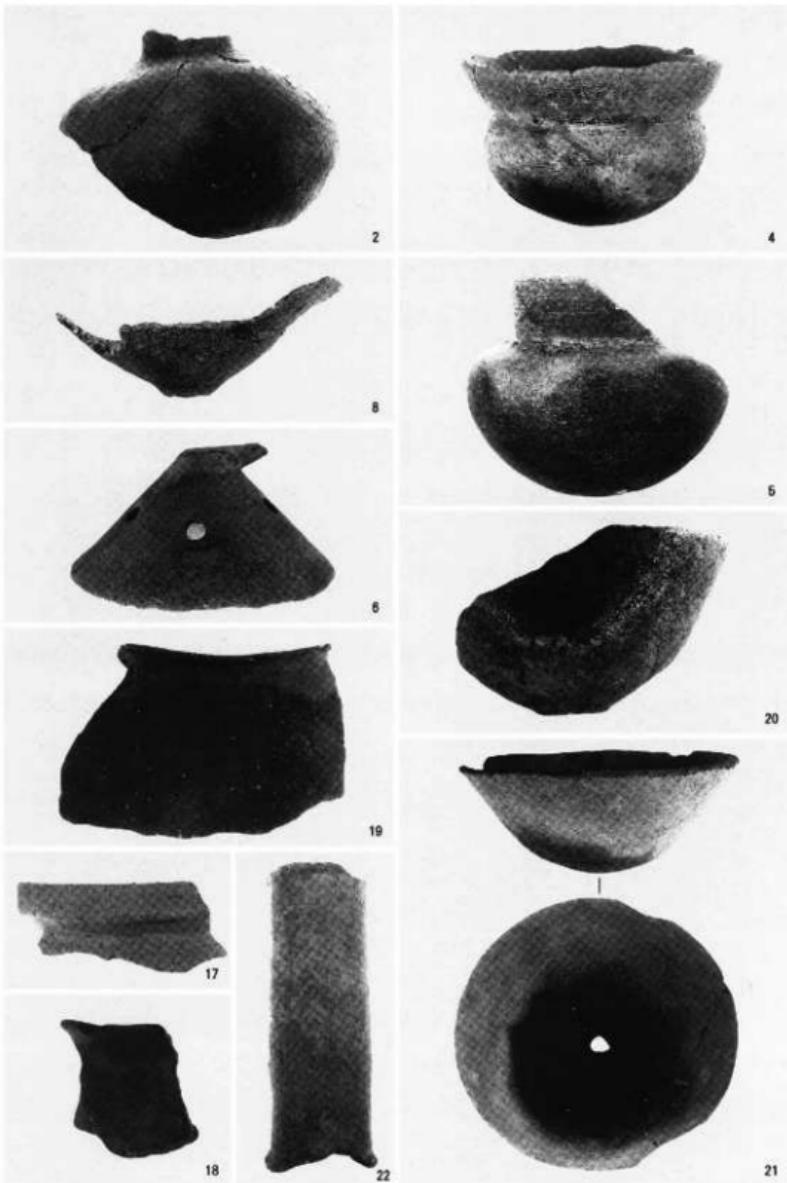
2区北壁



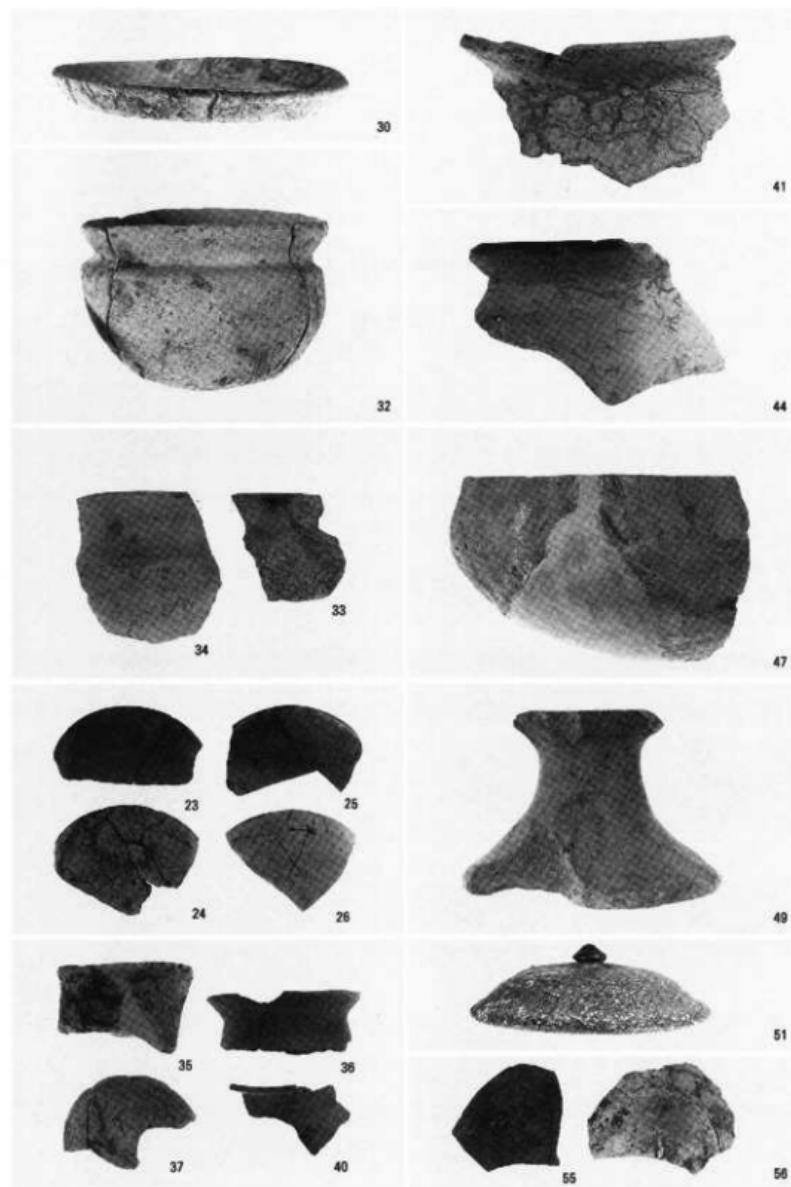
2区近世井戸



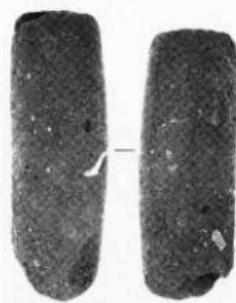
4区S P401遺物出土状況



1区出土遺物



3区 S D301出土遺物



50



S3



S1



S2



68



69



|



67

3区 S D301 (50, + S1 + S2)、第6層 (S3) 4区 S K401 (67)、S P401 (68)、第5層 (69) 出土遺物

III 中田遺跡第8次調査(NT91-8)

西日暮

例　　言

- 1、本書は、八尾市八尾木北5丁目98～105で実施した温泉旅館新築に伴う中田遺跡第8次調査（NT91-8）の報告書である。
- 1、本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第70号 平成3年8月26日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が勝日本海から委託をうけて実施したものである。
- 1、調査は、当調査研究会 坪田真一を担当者として実施した。
- 1、現地調査は、平成3年11月5日から12月1日にかけて実施した。調査面積は500m²を測る。
- 1、現地調査には垣内洋平・坂下 学・浜田千年・福島友香・山内千恵子が参加した。
- 1、内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子が参加した。
- 1、本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地図から起こした座標北である。
- 1、本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を主に田島が作成した。

本 文 目 次

第1章 はじめに.....	37
第2章 調査概要.....	39
第1節 調査方法.....	39
第2節 基本層序.....	40
第3節 検出遺構と出土遺物.....	41
第3章 出土遺物観察表.....	72
第4章 まとめ.....	82

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 (S=1/5000)	38	第18図 SD201・204出土遺物	
第2図 地区割図 (S=1/300)	39	(S=1/4)	55
第3図 調査区北壁断面図 (S=縦:1/40、横:1/200)	40	第19図 SD205出土遺物① (S=1/4)	56
第4図 第1次面平面図 (S=1/150)	41	第20図 SD206出土遺物② (S=1/4)	57
第5図 第3層出土遺物 (S=1/4)	42	第21図 SD206出土遺物① (S=1/4)	58
第6図 第2次面平面図 (S=1/150)	43	第22図 SD206出土遺物② (S=1/4)	59
第7図 第5層出土遺物 (S=1/4)	44	第23図 SD207平・断面図 (S=1/60)	61
第8図 SE201平・断面図 (S=1/20)	45	第24図 SD207出土遺物① (S=1/4)	62
第9図 SE202平・断面図 (S=1/20)	46	第25図 SD207出土遺物② (S=1/6、1/4)	63
第10図 SE202出土遺物 (S=1/4、1/5)	47	第26図 SD207出土遺物③ (S=1/8)	64
第11図 SE203平・断面図 (S=1/20)	48	第27図 第3次面平面図 (S=1/150)	66
第12図 SE203出土遺物 (S=1/4)	48	第28図 SD302、SP304・313出土遺物 (S=1/4)	67
第13図 SE204平・断面図 (S=1/20)	49	第29図 SW301・302平面図	
第14図 SE204出土遺物 (S=1/4、1/5)	50	第30図 SW301出土遺物 (S=1/4)	69
第15図 SE205平・断面図 (S=1/20)	51	第31図 SW302出土遺物 (S=1/4)	71
第16図 SE205出土遺物 (S=1/4)	52	第32図 第8層出土遺物 (S=1/4)	71
第17図 SK206・205、SP207出土遺物 (S=1/4)	53		

表 目 次

表1 第1次面 溝法量表	42	表5 第3次面 ピット法量表	66
表2 第2次面 土坑法量表	53	表6 SW301出土土師器皿分類表	70
表3 第2次面 溝法量表	54	表7 SW302出土土師器皿分類表	70
表4 第2次面 ピット法量表	65		

図版目次

図版一 西区第1次面（北から）	図版十一 出土遺物 第3層（2・4）
西区第2次面（北から）	第5層（23～29）
図版二 東区第2次面（北から）	SE202（41～43）
SE201断割り（北から）	SK206（59・60）
図版三 SE202（北から）	図版十二 出土遺物 SE204
SE202断割り（北から）	図版十三 出土遺物 SE204（48～51）
図版四 SE204（北から）	SE205（54・56・57）
SE204断割り（北から）	SD201（69・70）
図版五 SE205断割り（南から）	SD204（73）
SD206南端側溝内遺物出土状況 (北から)	SD205（77・79・81） SD205
図版六 SD207全景（南から）	図版十四 出土遺物 SD205
瓦質製品（184）出土状況（西から）	SD205（104・105・110～ 113・115・116）
SD207北壁	SD206（他）
図版七 SD207橋脚部分（南東から）	図版十五 出土遺物 SD206
図版八 西区第3次面（北から）	図版十六 出土遺物 SD206（151・154・163・164）
SP313（北から）	SD207（165・166・168・169）
図版九 SW301（東から）	図版十七 出土遺物 SD207
SW301下層（東から）	図版十八 出土遺物 SD302（190）
図版十 SW302（東から）	SW301（他）
西区下層確認トレッチ（北西から）	図版十九 出土遺物 第8層（291・293） SW302（他）

第1章 はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の東西約1.1km・南北約0.8kmがその範囲とされている。旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小畠合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は、昭和45年以降の八尾都市計画図曇川北土地区画整理事業の際発見された遺跡で、昭和46年に大阪府教育委員会により最初の発掘調査が実施された。以後中田遺跡調査会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成績から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

このような情勢下の平成3年、備日本海より、八尾市八尾木北5丁目98～105における温泉旅館新築の届出書が八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあたることから、平成3年8月21日に遺構確認調査を実施した。その結果、古墳時代後期頃に埋まつたと思われる自然流路の堆積、中世の遺物包含層が確認され、同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。^{註1}そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

次にこれまでの中田遺跡発掘調査の成果から、主に当調査地周辺の概要について簡単に記す。

弥生時代前期から中期では、遺跡範囲の中部・南部から南に隣接する東弓削遺跡にかけてが集落域と考えられている。第4次調査①では前期の上坑、東弓削遺跡にあたる②では中期後半の壺・高杯からなる土器棺が検出されている。弥生時代中期から後期では数か所で河川が検出されており、遺跡南部中央付近から北西方向に流路をもつ河川の存在が想定されている。

古墳時代前期になると遺構はほぼ全域で検出されている。注目すべきものとして、第10次調査③では布留式期古相の上坑から朝鮮半島系の上器、第14次調査④では丸太くり抜き井戸がある。また第19次調査⑤では4世紀後半の古墳が検出され、周溝からは船形・家形埴輪等が出土している。中期～後期と集落は衰退してゆくようであるが、ただ遺跡北西部では、隣接する矢作遺跡にかけて、後期から奈良時代に統く集落が存在する可能性がある。

中世以降は鋤溝が検出され、主に生産域となっている。

今回の調査地は中田遺跡の南西部端に位置しており、周辺での発掘調査は少ない。そのため遺跡の概要についてはまだ不明確な地域といえる。当地の東約70m・西約110mでは下水道工

事に伴う調査（第3次調査）が実施されている。東の⑥では弥生時代中期・古墳時代前期初頭の遺構と、これら以前に埋没した河川が検出され、また西の⑦では近世盛土以下は河川堆積が続くことが確認されている。



第1図 調査地位置図 (S=1/5000)

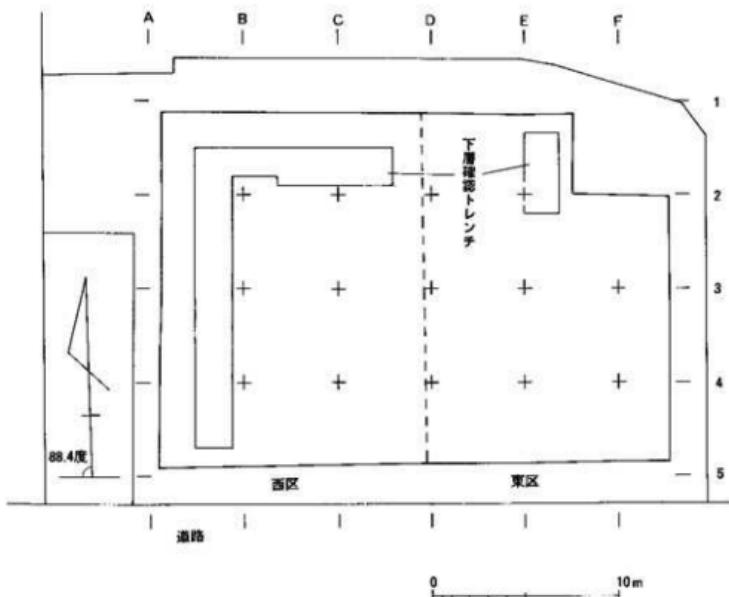
第2章 調査概要

第1節 調査方法

今回の調査は温泉旅館新築に伴うものである。掘削排土処理の都合上、調査区を東西に二分割することになった。そして西区から調査を実施し、終了後東区の調査を実施した。

調査は、西区では現地表下約1.0mまで、東区では約1.2mまでを機械掘削により除去した後、以下約0.4mを対象として人力掘削により実施した。なお検出井戸の断割りには随時機械を使用した。その後、西区ではL字型のトレンチ（東西約16m+南北約10m、幅約2m）を設定して人力掘削により、また東区では機械と人力掘削を併用して、約4m×2mの範囲で下層確認調査を実施した。

地区割は、調査区平面形に合わせて5m方眼を任意に設定した。そして南北ラインにアルファベット（西からA～F）、東西ラインに数字（北から1～4）を冠し、地区名は北西交点番号に代表させた。なおこの方眼の南北ラインは北から東に約1.6度振っている。

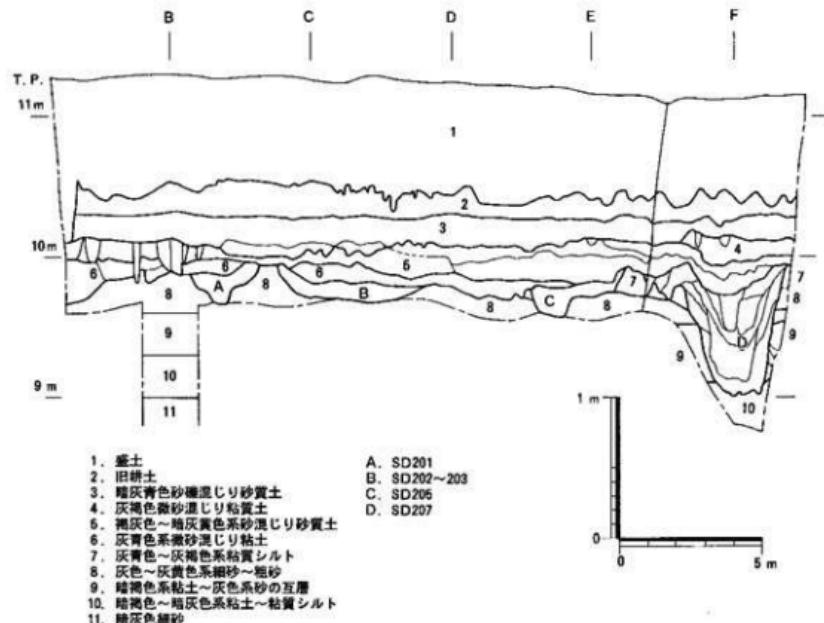


第2図 地区割図 (S=1/300)

第2節 基本層序

第1層は盛土、第2層は旧耕土である。第3・4層は、近世までの遺物、特に中世の遺物を多く含んでおり、第4層は調査区の東部のみに堆積している。第5層は調査区全域にみられ、中世の遺物を含み、非常に固く締まっており整地層と考えられる。この上面が第1次面で、標高は約10.1mである。第6・7・8層の上面が第2次面で、標高は約10.0mを測る。第6層は調査区の中央部から西半部にみられた粘性の強い粘土層であり、落ち込み状の堆積である。第2次面の溝遺構の埋土となる部分もあり、これらの遺構埋没後、当地が沼沢地となっていた時期があったものと考えられる。また西端部ではこの下部の第8層上面でも遺構が確認でき、この部分を第3次面とした。標高は約9.8mを測る。

以下は下層確認調査の結果、粘土～砂が互層状に堆積しており、河川の様相を呈している。第8層の砂層は弥生時代後期から奈良時代の遺物を含んでいるが、断面観察ではこの直下の第9層上面で土坑状の落ち込みが数か所にみられ、当該時期の遺構が存在する可能性がある。第11層の砂層上面の標高は、調査区南西部では約9.3mと高くなっている。



第3図 調査区北壁断面図 (S = 縦 : 1/40、横 : 1/200)

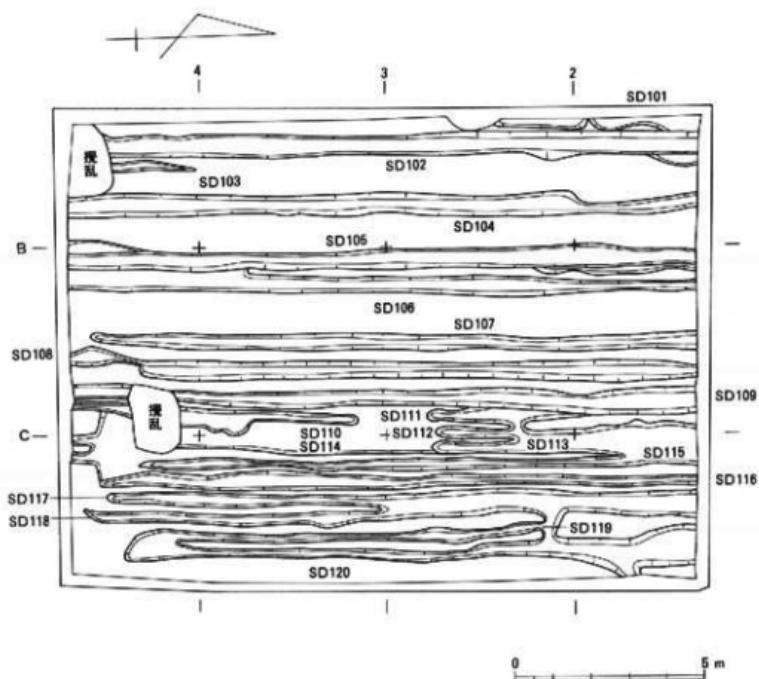
第3節 検出遺構と出土遺物

西区で第1～3次面の3面を、東区ではこのうち第2次面を調査した。

〈第1次面〉

西区全域で、南北方向に平行して直線的にのびる溝20条（SD101～120）を検出した。西部に位置するSD102・105は幅約50cm・深さ6cm～20cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は上層が灰褐色荒砂混じり粘質土、下層が灰黄褐色細砂～微砂であり、溝掘削当初の流水状況が窺える。何らかの水路と考えられる。他の溝は幅20cm～60cm程度・深さ5cm～10cm程度のもので、断面は皿状・逆台形を呈し、埋土はいずれも暗灰色粗砂混じり砂質土である。

SD110～113はSD114の底部の検出である。SD105とSD106、SD119とSD120は調査区南部で、SD117と118は中央部で合流して1条の溝となっている。SD111～113やSD117～120の間には、これらを連結するような東西方向の溝もみられる。



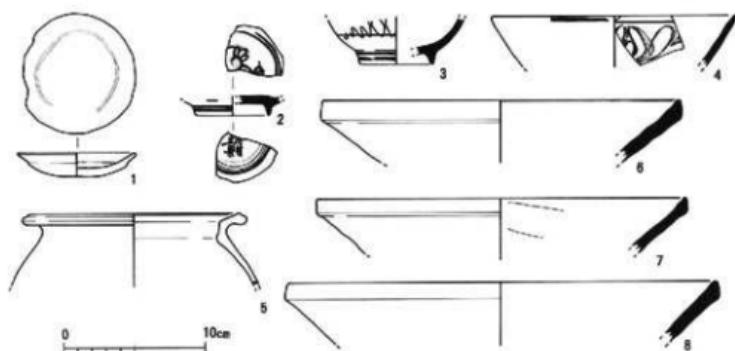
第4図 第1次面平面図 (1/150)

これらの溝からの出土遺物は小片のみで、図化し得るものは無かった。この面を覆う第3層出土遺物には、12世紀～13世紀のもの、16世紀～17世紀のものがある。前者には瓦器皿（1）、中国製青磁（4）、東播系須恵器鉢（6～8）、後者には青花と考えられる鰐頭心碗（2）、大型羽釜（5）、17世紀代の伊万里碗（3）がある。（2）は伊万里の可能性もある。

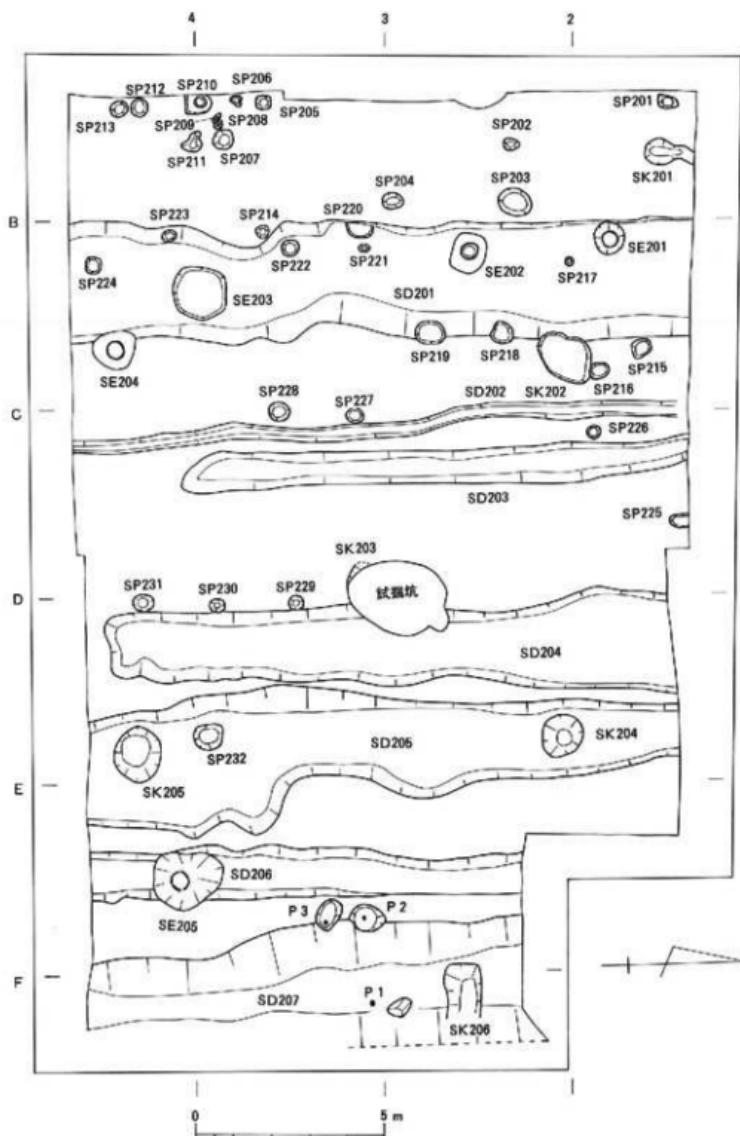
これらの溝は農耕に関する溝と考えられ、時期は近世頃のものであろう。法量等は表1にまとめた。

S D	幅	深さ	間隔(cm)
101	36以上	6	0～10
102	50～95	19	10～38
103	27	11	57～66
104	25～65	11	61～107
105	48～84	18	11～34
106	25～60	7	101～129
107	24～45	7	18～42
108	15～59	8	22～56
109	32～74	7	8～24
110	19～68	10	—
111	27～40	2	13～26
112	24～35	4	10～14
113	25～34	4	—
114	—	1	16～33
115	10～35	6	8～28
116	24～54	6	7～27
117	24～42	6	17～26
118	25～42	5	20～30
119	18～40	4	15～32
120	18～39	7	—

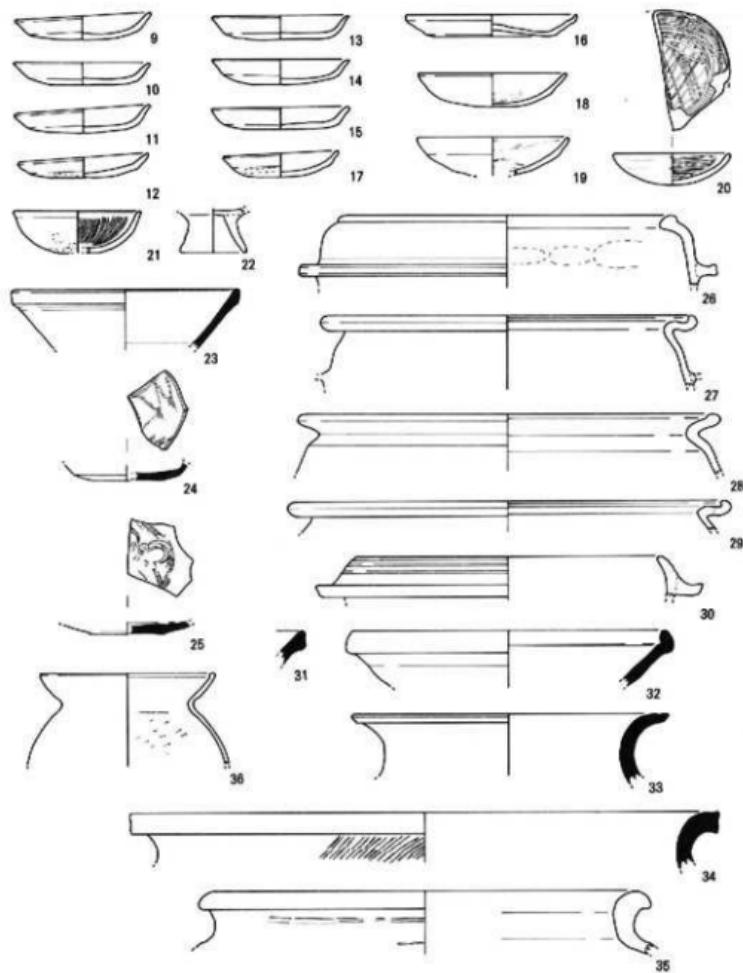
表1 第1次面 溝法量表



第5図 第3層出土遺物 (S=1/4)



第6図 第2次面平面図 (1/150)



0 20cm

第7図 第5層出土遺物 (1/4)

<第2次面>

井戸5基(SE201~205)・土坑6基(SK201~206)・南北方向にのびる溝7条(SD201~207)・ピット32個(SP201~232)を検出した。このうち内区西部の整地層の上面のものはSP201~214である。またこの整地部分の東側は、SD207の西肩まで浅い落ち込み状を呈し(第6層)、他の遺構はその底部の検出である。

第2次面を覆う第5層からは、主に12世紀から14世紀の遺物が出上している。瓦器碗は高台の消失した最終形態のものがみられる(18・19)。羽釜には大和型(26~29)と河内型(30)がある。輸入陶磁器には白磁碗(23)・皿(25)、同安窯系青磁皿(24)がある。

SE201

調査区の北西部1B区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.85mである。掘形平面形はほぼ円形で、規模は約0.9m×0.8mを測り、検出面からの深さは約10cmである。曲物は直径約40cmを測り、最下段の下部約10cmのみが遺存している。埋土は暗灰色粗砂～疊混じり粘質土で、井戸廃絶の際に埋められた土であろう。本来の掘方埋土は遺存していない。

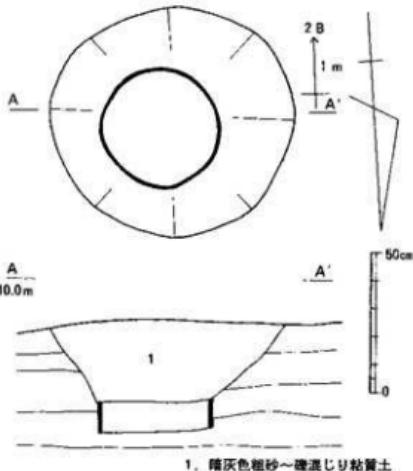
出土遺物には上師器・瓦器の小片があるが、図化し得るものは無く、時期は不明である。

SE202

2B区、SE202の南約2.9mで検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.8mである。掘形平面形は東西に長い長方形に近い偏円形で、規模は約1.1m×0.9m、検出面からの深さは約82cmを測る。曲物は掘形のほぼ中央に位置し、直径約40cmを測るもので、下から3段が遺存している(下から曲物1~3)。曲物の積み方は、曲物2は曲物1の外側に、そして曲物3は曲物2の内側にというものである。

掘方埋土は淡灰色細砂～粗砂の単一層である。枠内埋土は上層が暗灰色細砂疊混じり粘質土、下層が黒灰色粗砂疊混じり粘質土である。

曲物は下から2段を図化した(42・43)。両方とも二重構造で、外側は三段巻きである。曲



第8図 SE201平・断面図 (S=1/20)

物2(42)には、内側と外側の間に補強の為の板が挟まれている。

出土遺物には土師器皿(37)、瓦器碗(38~41)がある。完形の瓦器碗(41)は枠内最下部からの出土である。これらの土器の時期は12世紀後半から末頃に比定される。

SE203

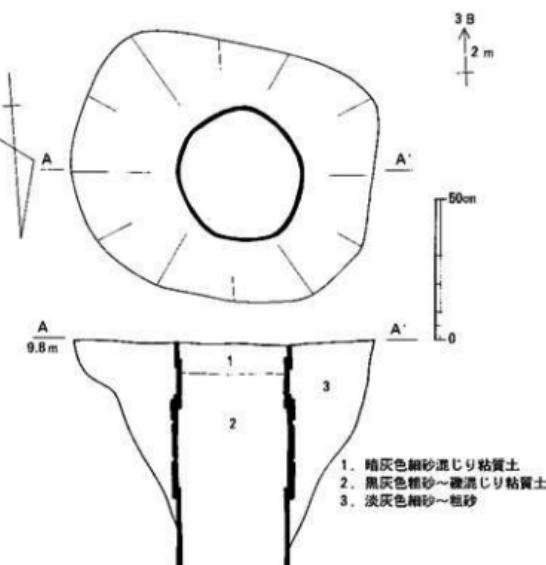
調査区の南西部3~4B区で検出した。検出面の標高は約9.95mである。形状と埋土の様相等から井戸とした。平面形は偏円形で、検山時の規模は

径約1.35m×1.55m・深

さ約0.7mであったが、断ち割りによる南壁断面観察で直径約1.75mになることが確認された。埋土は上層が暗灰色青色砂礫混じり粘質土、下層が暗灰色砂礫混じり粘質土で、東部には暗褐色粗砂~礫混じり粘質土・明灰色細砂~礫の堆積が認められる。断面観察から、何らかの井戸枠施設が存在していた可能性があり、この場合、東部の堆積土が元々の掘方埋土であろう。

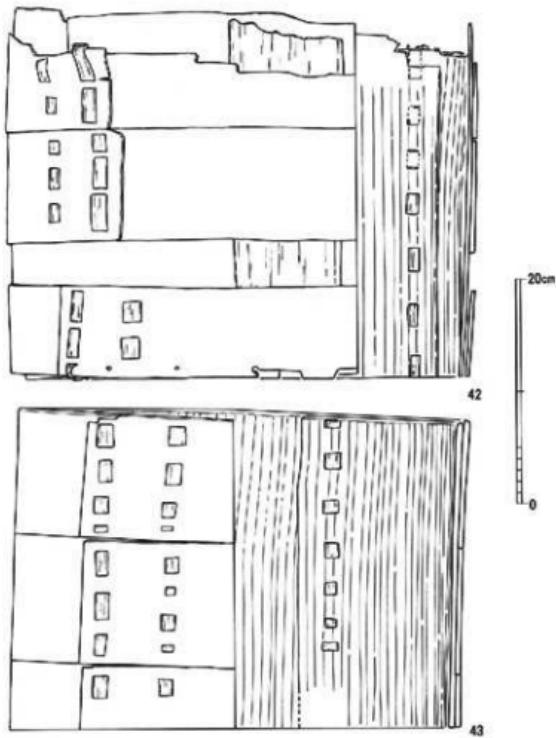
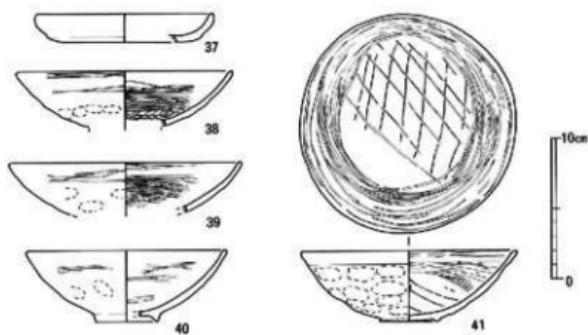
なお、壁面崩壊のため出土状況・位置等は不明確であるが、中央部やや西において、検山面から埋土を約20cm掘り下げたところで立位の竹を検出した。この竹は直径5cm・長さ約20cmを測り、節を2か所に残すものである。一端は節部で、他端は斜めに切断されており、こちらを上にしている。また別の節はくり抜かれている。井戸廃絶に際しての祭祀の可能性があり、広島県草戸千軒町遺跡や兵庫県姫路市加茂遺跡に類似がある。^{註2}

出土遺物には土師器皿(44)、瓦器碗(45・46)がある。これらの土器の時期は、12世紀後半に比定される。

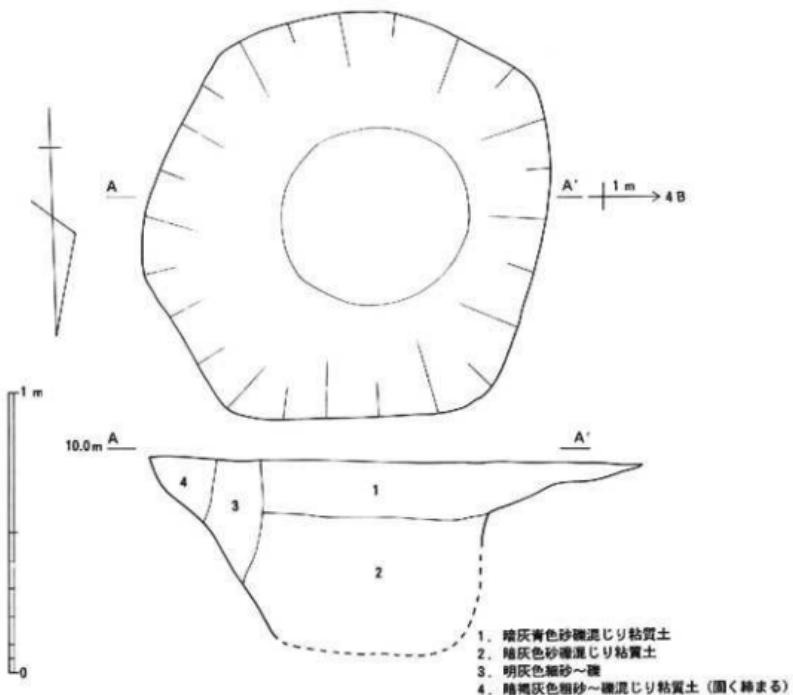


第9図 SE202平・断面図 (S = 1/20)

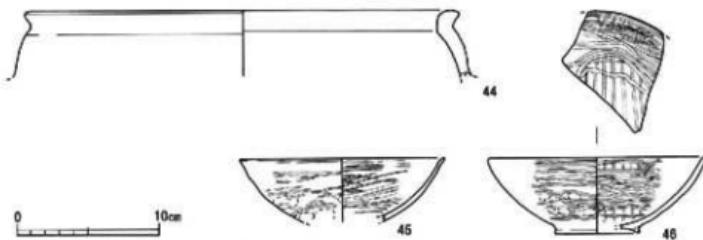
^{註2}



第10図 SE 202出土遺物 (S = 1/4、1/5)



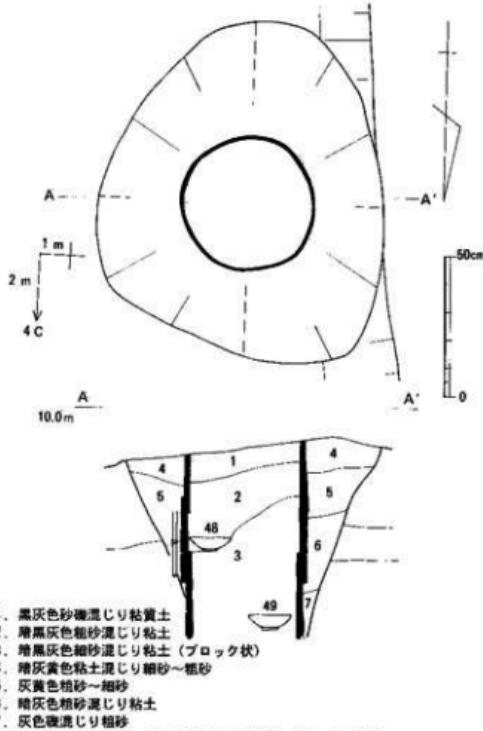
第11図 SE 203平・断面図 ($S = 1/20$)



第12図 SE 203出土遺物 ($S = 1/4$)

SE204

4B区、SE203の南東約1.4mで検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.9mである。掘形平面形は偏円形で、規模は約1.2m×1.0m、検出面からの深さは約72cmである。曲物は掘方のほぼ中央に位置し、直径約40cmで、下から3段が遺存している。なお出土遺物の十師器羽釜は井戸枠であつた可能性がある。曲物の積み方はSE202とは異なり、下のものより径の大きい曲物を上に重ねているようである。また曲物の周囲には立位の竹が巡っている痕跡が認められた



第13図 SE204平・断面図 (S=1/20)

が、補強のためであろう。このような類例は八尾市老原遺跡に認められる（当調査研究会第2次調査 SE-3）。

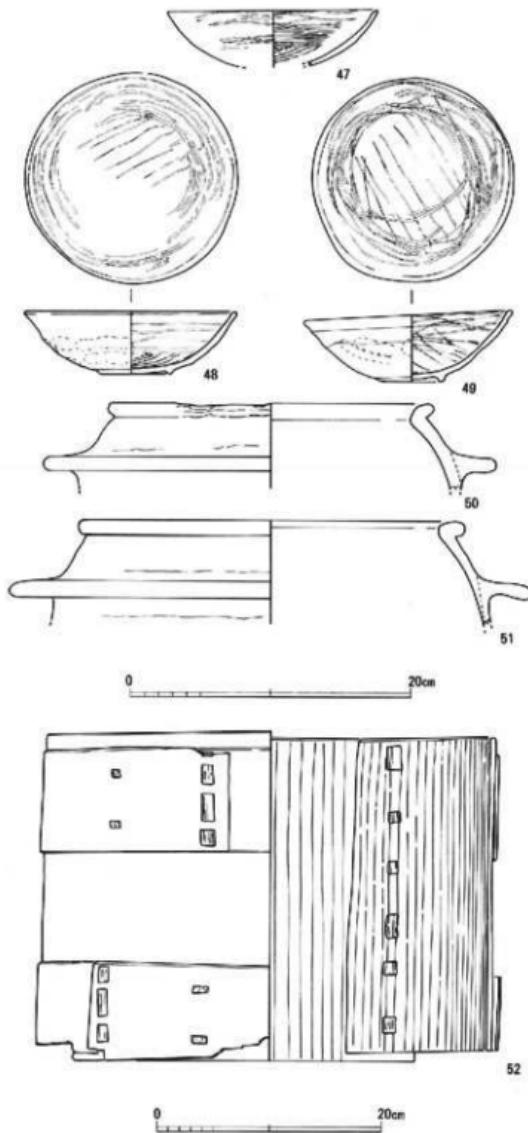
註3

掘方埋土は上から暗灰黄色粘土混じり細砂～粗砂、灰黄色粗砂～細砂、暗灰色粗砂混じり粘土、灰色礫混じり粗砂である。枠内埋土は上から黒灰色砂礫混じり粘質土、暗黒灰色粗砂混じり粘土、暗黒灰色細砂混じり粘土（ブロック状）である。

出土遺物には瓦器椀（47～49）、土師器羽釜（50・51）がある。（48・49）は完形品で、48は枠内最下層の上位、49は下位から、それぞれ正位で出土したものである。これらの土器の時期は、12世紀後半から13世紀前半に比定される。

最下段の曲物（52）は二重構造で、外側は上端と下端の二段巻きである。なおこの外側二段の間の外面、つまり外から見える部分に墨書きを確認した。文面は以下のとおりである。

年
「□安二二□□ □□□□」

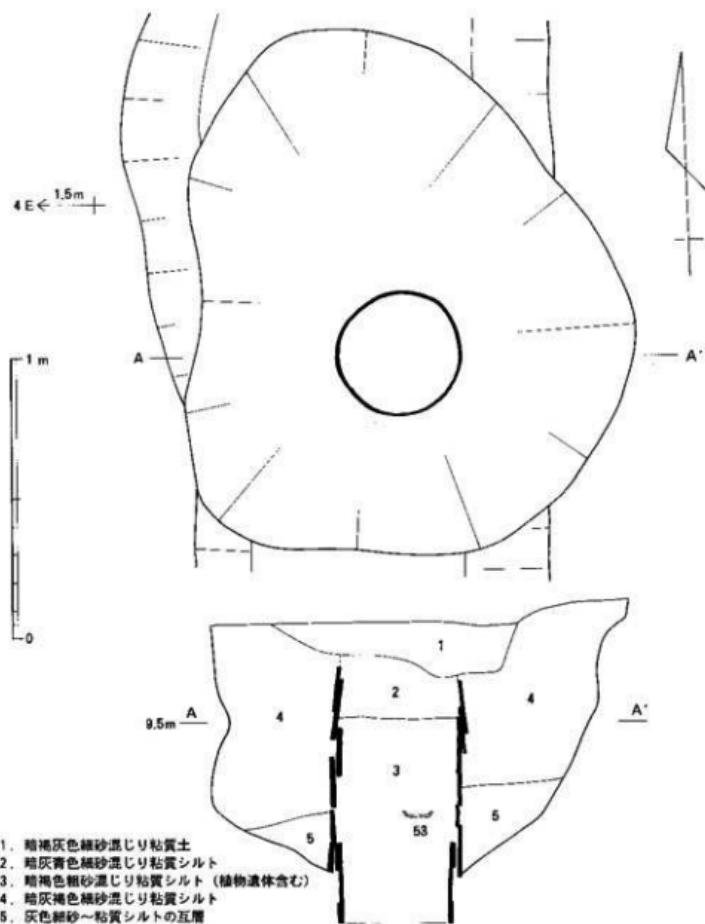


第14図 SE 204出土遺物 (S = 1/4, 1/5)

判読しえる部分は少ないので、5文字目が「年」ならば、最初の二文字は年号と考えられる。出土遺物の時期を下限とし、また曲物の耐久期間等を考慮して推定される年号は『保安(1120年～1123年)』、『久安(1145年～1150年)』、『仁安(1166年～1168年)』、『承安(1171年～1174年)』の四例があげられる。一文字目の偏部分からは『久安』・『承安』の可能性が高い。年号とするならば、続く「二二」については22ではなく4(2+2、あるいは2×2)の意味となるのが妥当であろう。また最後の文字は『義』、あるいは花押である可能性もある。註4

SE205

調査区の南東部3～4E区で検出した曲物井戸で、検出面の標高は約9.9mで

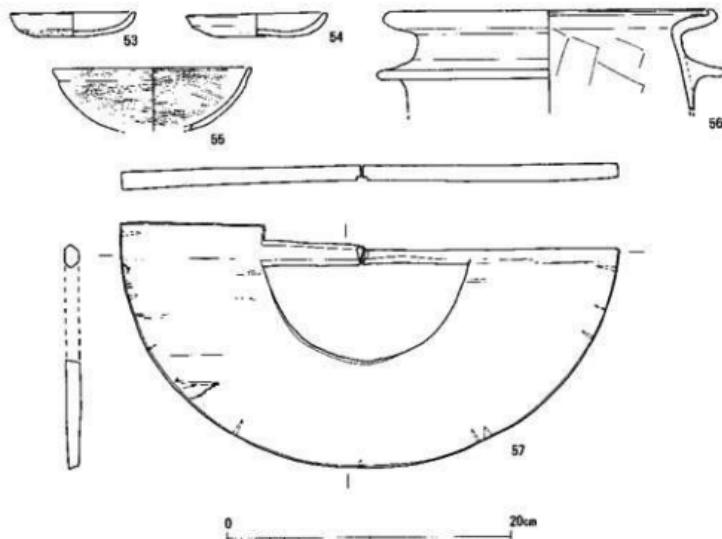
第15図 S E205平・断面図 ($S = 1/20$)

ある。掘形平面形は偏円形で、規模は約 $1.85\text{m} \times 1.6\text{m}$ 、検出面からの深さは約 1.15m である。曲物は直径約 40cm で、下から4段が遺存している。曲物の積み方はSE202と同様で、下から2・4段目が外側になっている。

掘方埋土は上層が暗灰褐色細砂混じり粘質シルト、下層が灰色細砂～粘質シルトの互層であ

る。柱内埋土は上層が暗灰青色細砂混じり粘質シルト、下層が暗褐色粗砂混じり粘質シルト（植物遺体含む）である。

出土遺物には土師器皿（53・54）・羽釜（56）、瓦器碗（55）、木製品（57）がある。土師器皿（54）は完形品で、下から2段目の曲物中位付近の出土である。土師器羽釜（56）は人和C型式に分類されるものである。（57）は井戸枠の補強に使用されていたものである。曲物の底部の半分と考えられ、周縁には釘穴が認められる。中央にはおそらく一対の半円形の窓を施しており、蒸籠の底部であろうか。これらの時期は12世紀中頃から後半に比定される。



第16図 S E 205出土遺物 (S = 1 / 4)

SK201～SK205

SK204・SK205は形状や埋土の状況から井戸である可能性がある。SK203は試掘坑にほとんど削平され、肩の一部を検出したのみであり、全容は不明である。SK205からは土師器皿（61）、瓦器皿（62）、土師器羽釜（63）が出土しており、これらの時期は12世紀後半に比定される。他の土坑からは図化し難い遺物は出土していない。法量等は表2にまとめた。

SK206

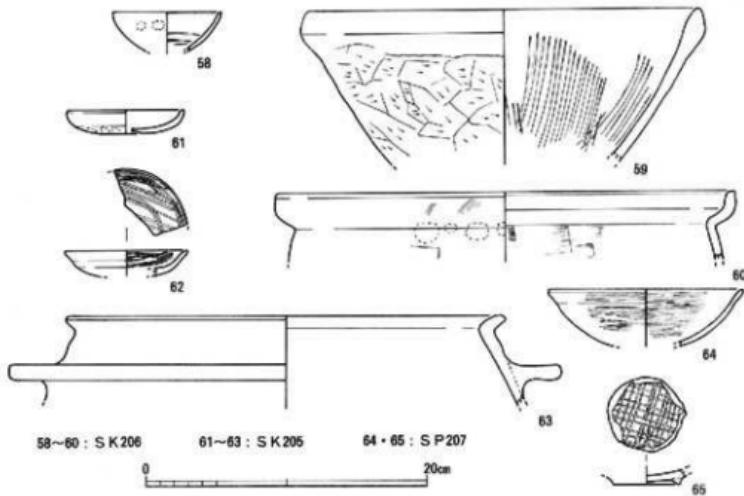
2 E～F区で検出した土坑で、SD207埋没後に掘られている。東は調査区外に続き、平面形は不明であるが、検出部分は長方形を呈している。規模は105cm×155cm以上・深さ約60cmを測

る。断面逆台形で、埋土は上から淡黄灰褐色粗砂混じり粘土・淡灰褐色粘質シルト・暗灰褐色粘質シルト・暗褐色微砂混じり粘土である。

出土遺物には瓦器榠(58)、瓦器摺鉢(59)、瓦器鍋(60)がある。(60)は山城型鍋B型に分類され、13世紀代に比定されるものである。(59)の時期は15世紀末頃と考えられ、出土遺物にはやや時期差がある。
注6

S K	地区	平面形	短辺×長辺	深さ(cm)	埋土(上から)
201	1 A	不定形	40×134	30	暗灰色細砂混じり砂質土 暗灰黄色細砂混じり粘質土
202	1～2 B	不整形	112×168	22	灰褐色粗砂混じり粘質土
203	3 C	不明	—×50以上	46	暗灰色細砂混じり粘質土
204	1～2 D	偏円形	107×127	58	暗灰色細砂混じり粘土
205	4 D	偏円形	124×152	46	暗灰色細砂混じり粘土

表2 第2次面 土坑法量表



第17図 SK 206・205、SP 207出土遺物 (S = 1/4)

SD201～SD206

ほぼ南北方向に平行して伸びる断面皿状の溝である。検出状況は、ベースが主に砂層ということもあって肩が崩れており、溝というよりは砂の起伏という状態であった。また調査区の中央から西部では、第2次面を覆う第6層がこれらの溝に落ち込んでおり、SD204はこの第6層が埋土となっている。

出土遺物はほとんどが破片であり、かなりの時期幅が認められる。SD206の南端部では土器

溜り状の出土状況がみられた。

各溝の法量等は表3にまとめた。出土遺物、及びその時期は後述のとおりである。

SD	幅	深さ	間隔(cm)	埋上
201	242~324	11~26	160~285	暗灰色粗砂混じり粘質土
202	33~47	2~12	28~85	暗灰色粗砂混じり粘質土
203	74~112	4~12	290~348	暗灰色粗砂混じり粘質土
204	175~273	9~14	12~74	灰青色微砂混じり粘土
205	143~390	15~26	22~196	暗褐色粗砂混じり粘土
206	90~141	8~11	60~164	暗褐色微砂混じり粘質シルト
207	340	90		(本文参照)

表3 第2次面 溝法量表

・出土遺物

SD201—上師器皿(66・67)、黒色土器碗(68)、瓦器碗(69・70)。〈11C後半～13C後半〉

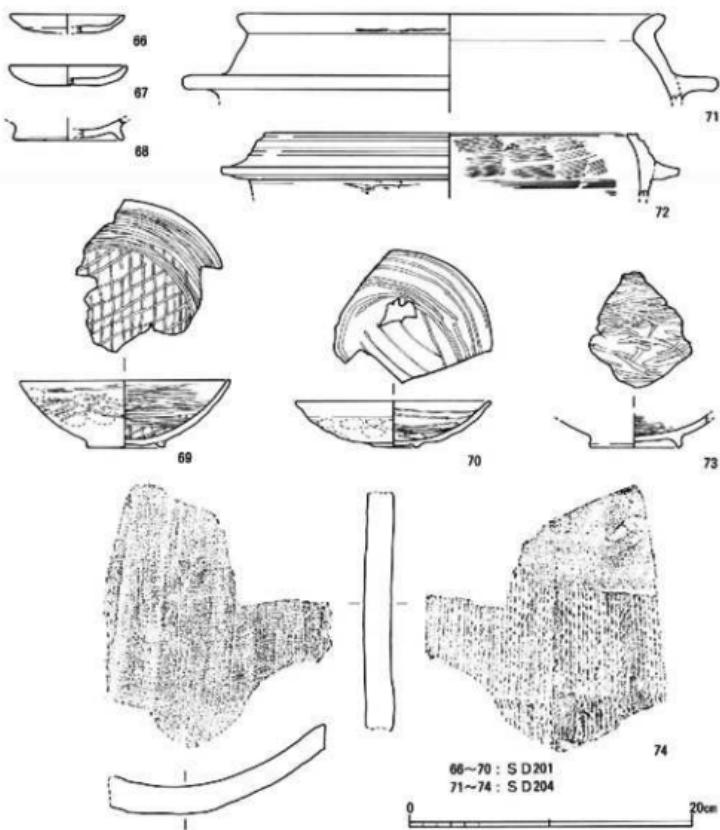
SD204—土師器羽釜(71)、瓦器羽釜(72)・碗(73)、平瓦(74)。〈11C末～15C前半〉

SD205—土師器皿(75～83)・高台付き皿(84)・碗(85)・羽釜(110～114)、瓦器皿(86～89)・碗(90～98)・鉢(99)・壺(115)、中国製青磁(100・101)・白磁(102・103)、人形(104)・木鍤(105)、束縛系須恵器鉢(106～109)、常滑燒窯(116)、丸瓦(117)・平瓦(118)。〈12C前半～14C末〉

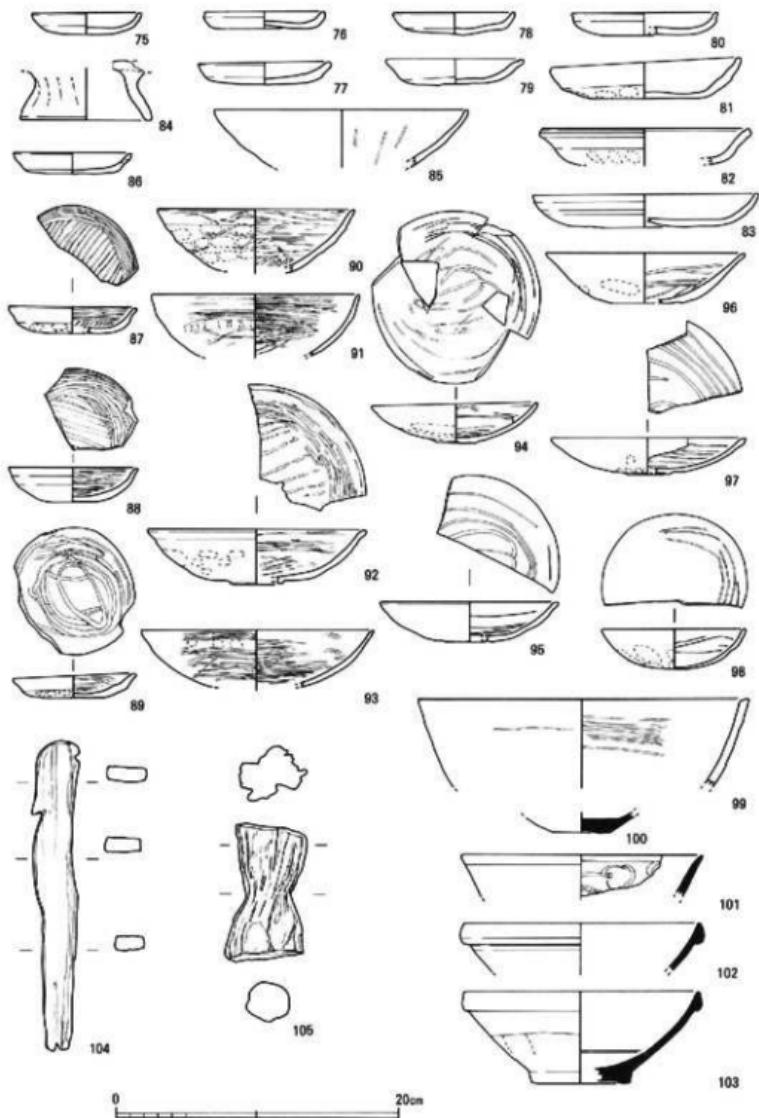
SD206—土師器皿(119～134、138～143)・高杯(152)・高台付き皿(153)・羽釜(160)、瓦器皿(135～137)・碗(144～149)・鉢(150・151)・三足釜(157～159)、陶器鉢(154)、中国製青磁(155)・白磁(156)、束縛系須恵器鉢(161～162)・壺(163)、下駄(164)。〈12C代～13C後半〉

SD205出土の人形(104)は、厚さ約1.0cmの板を切り抜いたもので、下部は欠損し、残存長22.2cmを測る。側面全身人形に分類されるものである。顎は深く切り込みをいれて尖らせ、尻は浅く切り欠いて表現している。鼻・口等の顔の表現はない。後頭部上位の切り込みは被りものの表現と思われる。人形は八尾市城では初めての出土である。また其伴遺物は12世紀前半～14世紀末に比定され、人形としては新しい例の一つであろう。土師器羽釜(113)は大和D型式に分類されるものである。
註7

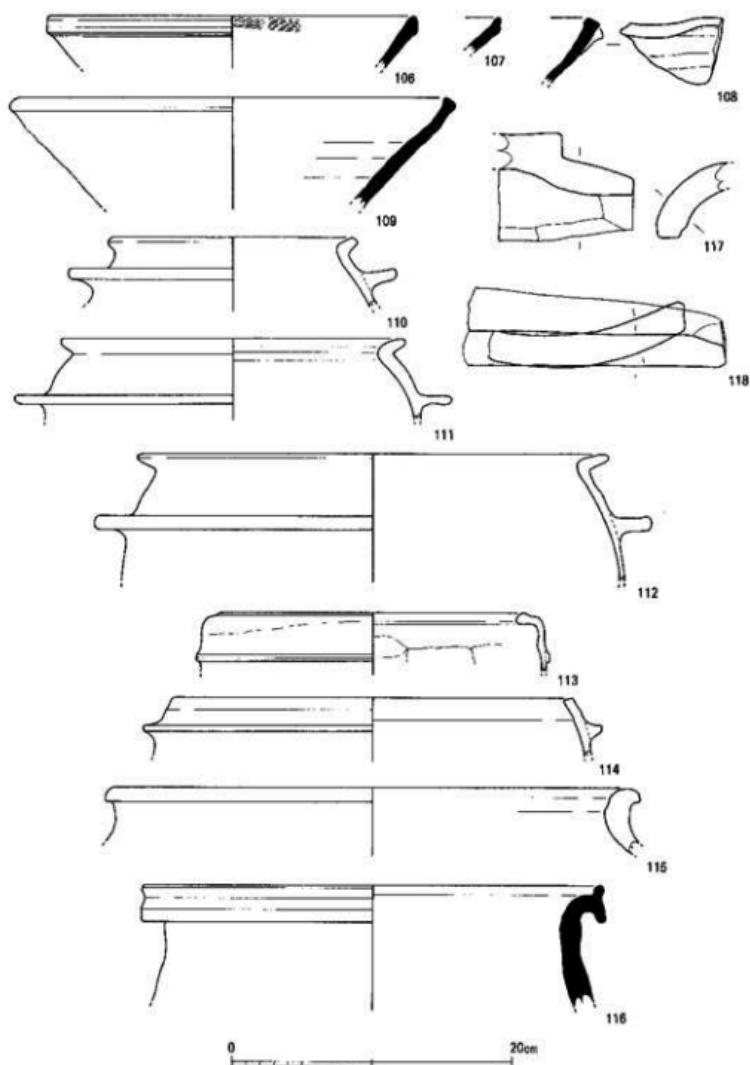
SD206出土の陶器鉢(154)は、貼り付け高台を有し、胎土中には砂粒を多く含むものである。常滑等の東海地方の窯産の可能性が高い。下駄(164)は平面小判形で、法量は長さ17.0cm・幅9.5cm・高さ2.9cmを測る。台と歯を一本から作る連齒下駄に分類される。前歯は後歯に比して小さく、中央に位置する。台上面には足裏による摩滅痕があり、後歯や台後部裏はかなり磨り減っている。



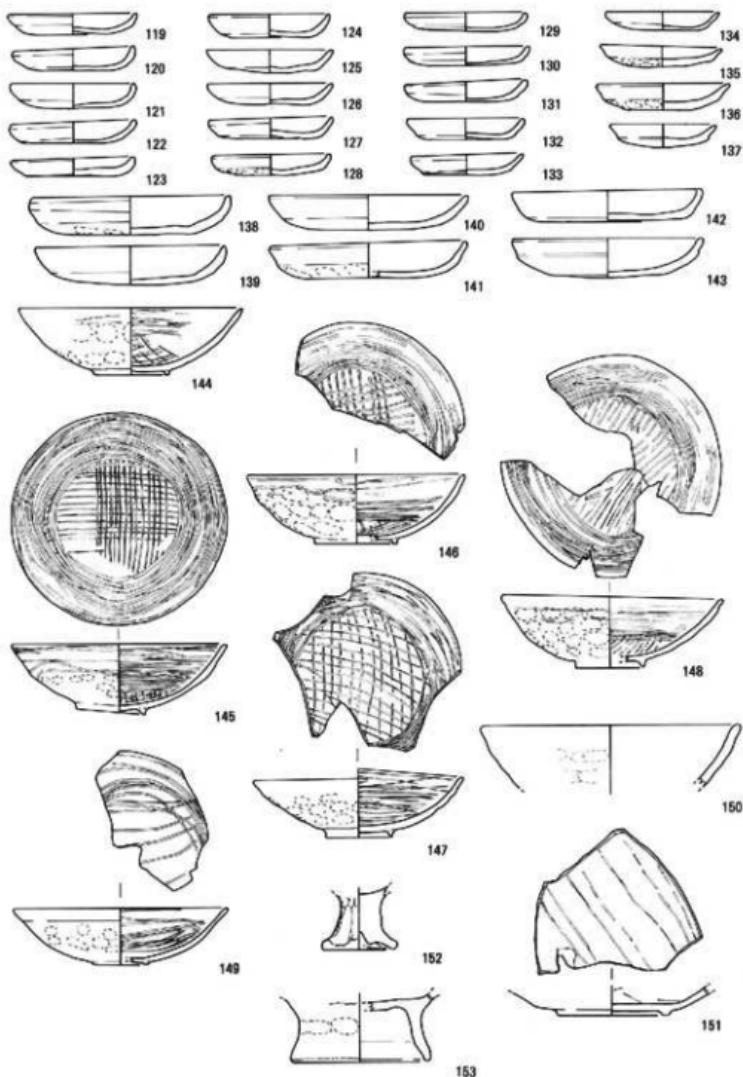
第18図 SD 201・204出土遺物 (S = 1/4)



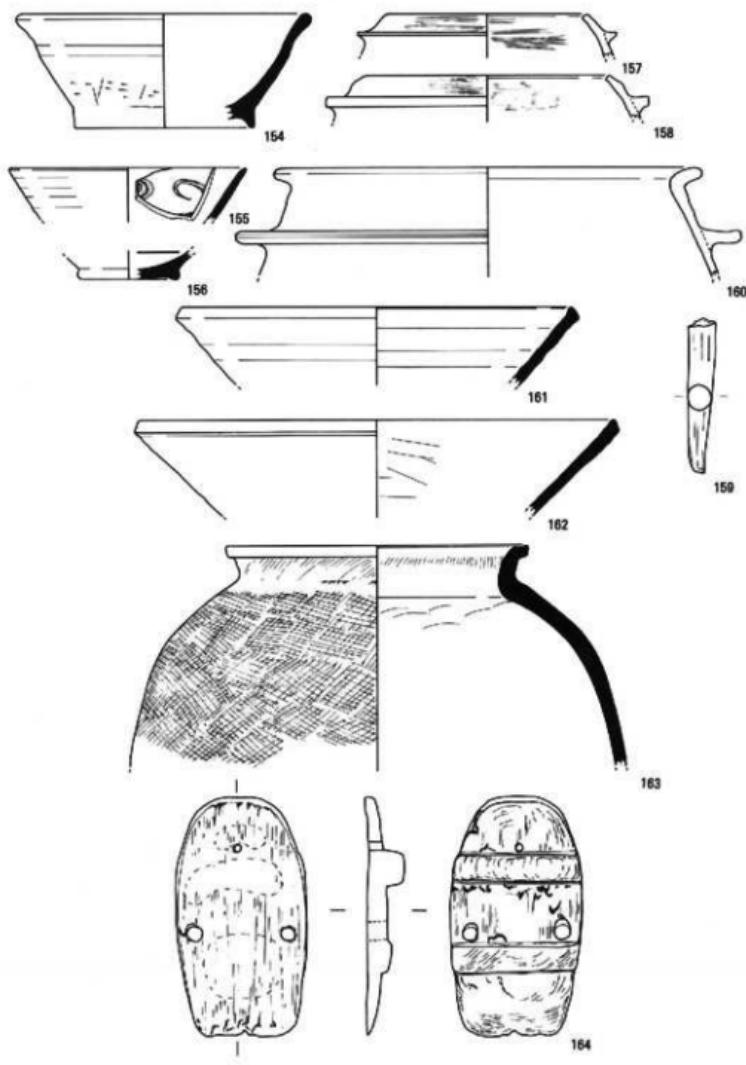
第19図 SD 205出土遺物① (S = 1/4)



第20図 SD 205出土遺物② (S = 1/4)



第21図 SD206出土遺物① (S = 1 / 4)



第22図 S D206出土遺物② (S = 1 / 4)

SD207

調査区の東端で検出したほぼ南北方向の溝である。規模は幅約3.4m・深さ約0.9mを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は大まかにみて上層が暗灰青色粗砂混じり粘質土、中層が淡褐色微砂混じり粘質シルト、下層が暗灰色粗砂混じり粘質土で、中層には多量の植物遺体が含まれている。埋土の状況から灌水状態にあったことが窺える。

当溝には橋が架けられていたようで、溝の西肩に2基、中央に1基、計3基の折り取られた橋脚（P 1～P 3）が遺存していた（187～189）。橋脚間の距離は東西約2.3mで、橋幅は親柱にあたるP 2・P 3間の内寸から約90cmと想定できる。P 1は溝中央付近にあたると考えられ、溝底部に約80cmが打ち込まれている。P 2・P 3には掘形があり、規模はP 2=98cm×70cm・深さ42cm、P 3=83cm×61cm・深さ42cmを測る。橋脚には直徑約12cmの木材が使用され、下端部は尖らせ、上端部には鋸痕が認められる。この鋸痕が加工痕か、あるいは折り取る際のものかは不明である。P 1は他より丁寧な作りで、表面は六角形に面取りされ、また規則的な手斧痕を残している。これらの処理を装飾と考えると、P 1は見えることを前提として作られた橋脚であることが窺えよう。なお第2次面上画では、P 2の北約4m地点でもこれらと同様の木材を検出している。P 1付近の上層、溝底部から約60cm上からは約70cm×45cmを測る巨石が出土しており、礎石であった可能性がある。

P 1（187）－残存長152.9cm・直徑12.5cm。断面六角形。

P 2（188）－残存長52.3cm・直徑11.4cm。断面丸みを帯びた六角形。

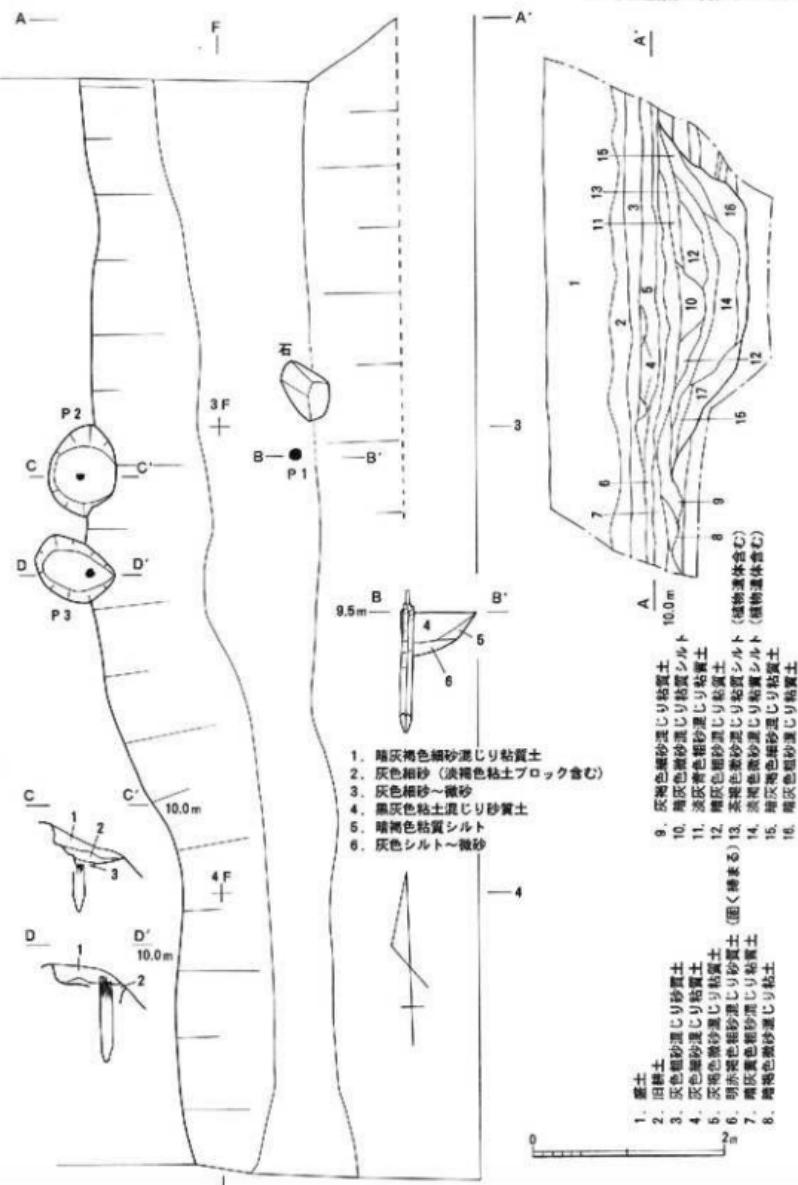
P 3（189）－残存長92.3cm・直徑11.7cm。断面丸みを帯びた六角形。

出土遺物には土器器皿（165～170）、羽釜（175・176）、瓦器椀（171～174）・三足釜（177）、火鉢（178）、束縛系須恵器甕（179）・鉢（180）、不明陶器（181）、中国製白磁（182）、棒状木製品（183）、瓦質不明製品（184）、瓦（185・186）がある。時期は12世紀後半から14世紀末に比定されるものである。瓦器椀は高台の消失した最終形態のものである。（183）は長さ53.3cmを測り、全体が六角形・八角形に面取りされた精製品である。細い方の端部には切り込みがある。（184）は高さ37.8cmを測り、裏面には薬？の痕跡が明瞭に遺存し、土壁に貼り付けていたような状況である。また部分的に炭が付着している。形状とこれらのことを考え合わせると、かまどの焚き口部分である可能性がある。軒平瓦（185）は頸が欠損しているが、瓦当の文様は連珠文が確認できる。

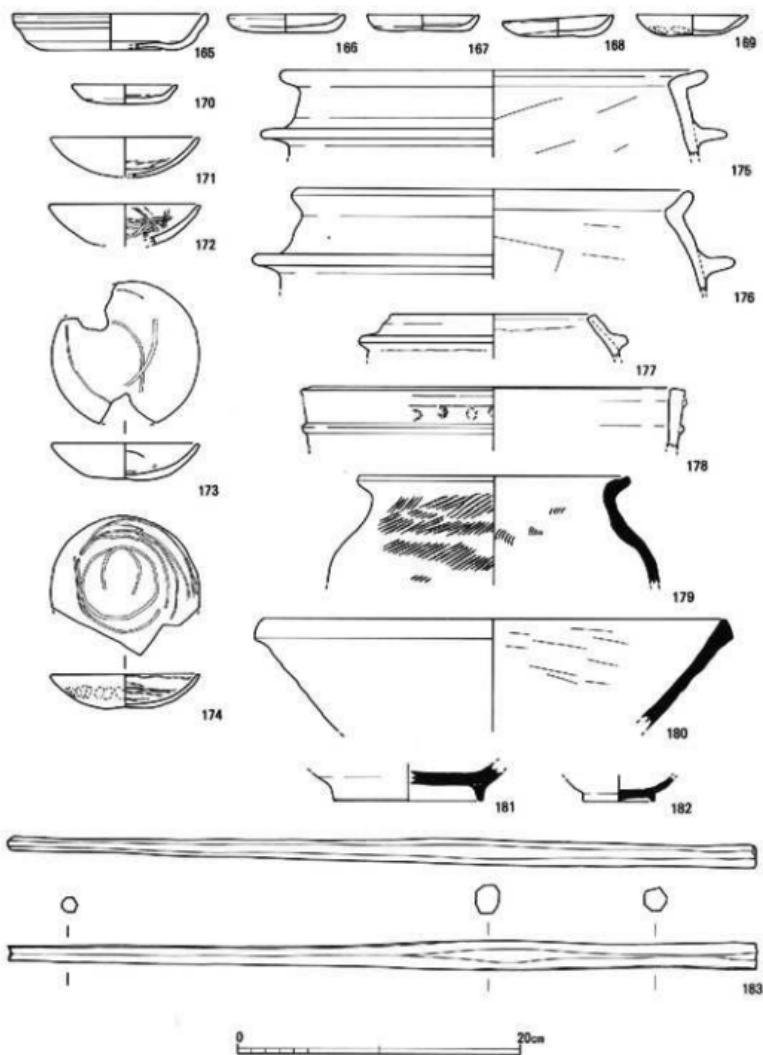
SP201～SP232

調査区南西部3～4 A区のSP205・210・212は、約1.7m間隔でほぼ南北方向に並び、掘立柱建物を構成する柱穴である可能性がある。3～4 D区のSP229・230・231は約2.0m間隔でSD204の西肩に並んでおり、何らかの関連が考えられる。これら以外のピットには関連性は見

III 中田流域第8次(NT91-8)

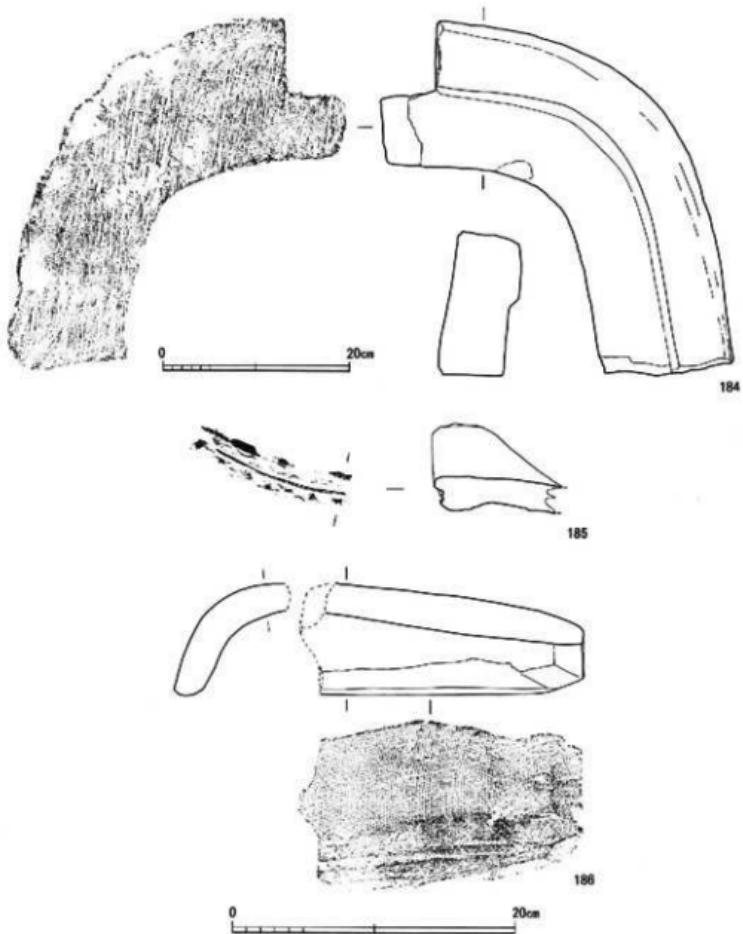


第23図 SD 207平・断面図 (S = 1 / 60)

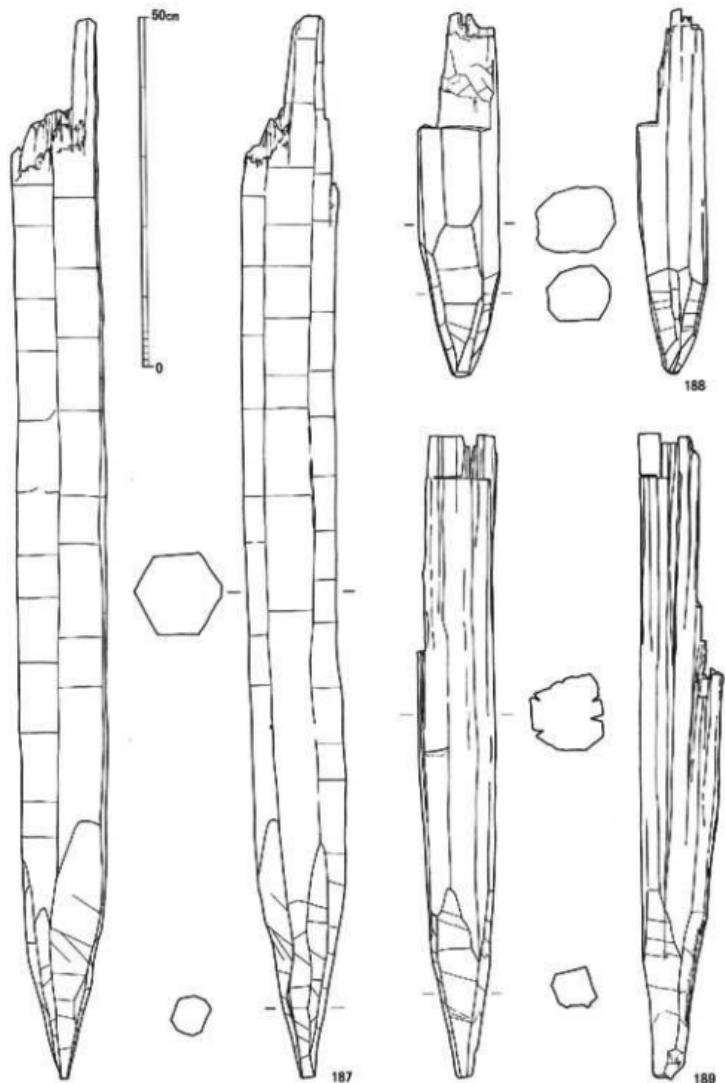


第24図 SD 207出土遺物① (S = 1/4)

いだせないが、分布は調査区西部ほど密といえる。なお SP217・220～224はSD201の底部、SP232はSD205の底部で検出された。SP207から12世紀後半に比定される瓦器楕(64・65)が出土しているが、他のピットからは固化しそる遺物は出土していない。法量等は表4にまとめた。



第25図 SD207出土遺物②(S=1/6, 1/4)



第26図 SD207出土遺物③ (S = 1 / 8)

SP	地区	平面形	径	深さ(cm)	埋土(上から)
201	1 A	偏円形	24×55	14	明褐色細砂
202	2 A	偏円形	35×44	10	灰色細砂混じり粘質土
203	2 A	偏円形	78×90	12	灰色細砂混じり粘質土
204	2 A	偏円形	46×55	6	褐灰色粗砂
205	3 A	方 形	39×47	13	灰褐色細砂混じり粘質土
206	3 A	不定形	25×35	4	灰褐色細砂混じり粘質土
207	3 A	偏円形	48×57	17	灰褐色粘質土・灰褐色細砂混じり粘質土
208	3 A	椭円形	22×29	10	灰褐色粘質土
209	3 A	長円形	14×31	10	灰褐色粘質土
210	3~4 A	不整形	52以上×72	20	淡灰色細砂混じり砂質土
211	3~4 A	不定形	40×52	14	灰褐色粘質土・灰褐色細砂混じり粘質土
212	4 A	円 形	43×53	14	明褐色細砂
213	4 A	円 形	44×46	14	明褐色粗砂
214	3 B	偏円形	32×37	15	暗灰黄色粗砂混じり粘質土
215	1 B	不整形	46×57	7	灰褐色粗砂混じり粘質土
216	1 B	不整形	43×48	9	灰褐色粗砂混じり粘質土
217	1~2 B	偏円形	22×24	17	灰褐色粘土混じり粗砂
218	2 B	偏円形	54×60	10	灰褐色粗砂混じり粘質土
219	2 B	偏円形	61×84	10	灰褐色粗砂混じり粘質土
220	3 B	不 明	40以上×75	5	暗灰黄色粗砂混じり粘質土
221	3 B	椭円形	21×29	7	暗灰色細砂混じり粘土
222	3 B	円 形	43×47	12	暗灰色細砂混じり粘土
223	4 B	偏円形	31×39	12	暗灰色粗砂混じり粘質土
224	4 B	偏円形	45×52	18	暗灰色粗砂混じり粘質土
225	1 C	不 明	35×50以上	15	灰褐色粗砂混じり粘質土
226	1 C	円 形	37×39	6	灰褐色粗砂混じり粘質土
227	3 C	偏円形	43×50	7	灰褐色粗砂混じり粘質土
228	3 B~C	偏円形	55×57	13	灰褐色粗砂混じり粘質土
229	3 D	円 形	40×43	9	暗灰色細砂混じり粘質土
230	3 D	円 形	34×40	13	暗灰色細砂混じり粘質土
231	4 D	円 形	45×54	17	暗灰色細砂混じり粘質土
232	3~4 D	偏円形	68×84	29	暗褐色細砂混じり粘土

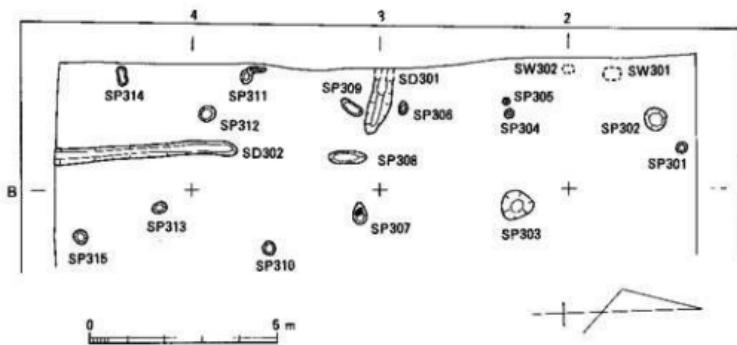
表4 第2次面 ピット法量表

<第3次面>

西区西部の整地面下で溝2条 (SD301・302)・ピット15個 (SP301~315)・土師器皿の集積2か所 (SW301・302)を検出した。

SD301・302

SD301は東西方向 (幅50~60cm・深さ18~22cm)、SD302は南北方向 (幅33~45cm・深さ12~22cm)の溝で、埋土は暗灰色粗砂混じり粘土である。ピットとしたSP308は、その形状からSD302に連続すると考えられ、このことから両溝は直角に屈曲する溝であった可能性がある。SD302上層部からは、11世紀末から12世紀初頭に比定される瓦器碗(190)が出土している。



第27図 第3次面平面図 ($S = 1/150$)

SP301~315

これらのピットの位置等からは関連性は認められない。SP307には根石が遺存している。法量等は表5にまとめた。

SP	地区	平面形	径	深さ(cm)	埋土	遺物
301	1 A	円形	30×28	7	灰黑色粗砂混じり粘質シルト	
302	1 A	偏円形	59×55	18	暗灰青色粗砂混じり粘質シルト	
303	2 B	偏円形	84×73	18	暗灰青色粗砂混じり粘質シルト	
304	2 A	円形	26×24	7	灰黑色粗砂混じり粘質シルト	191
305	2 A	円形	18×17	5	灰黑色粗砂混じり粘質シルト	
306	2 A	椭円形	36×22	16	暗灰色粘土混じり粗砂	
307	3 B	椭円形	60×34	3	暗灰色粘土混じり粗砂	(根石)
308	3 A	長円形	96×32	8	暗灰色粘土混じり粗砂	
309	3 A	長円形	64×27	3	暗灰色粘土混じり粗砂	
310	3 B	円形	37×31	10	暗灰色粘土混じり粗砂	
311	3 A	不定形	50×16	17	暗灰色粘土混じり粗砂	
312	3 A	円形	46×43	21	暗灰色粗砂混じり粘土	
313	4 B	椭円形	38×28	16	暗灰色粗砂混じり粘土	192
314	4 A	長円形	53×20	16	暗灰色粗砂混じり粘土	
315	4 B	円形	38×36	13	暗灰色粗砂混じり粘土	

表5 第3次面 ピット法量表

SW301

調査区の北西角の整地面下で検出した土師器皿の集積である。掘形は無く、南北約76cm・東西約48cmの範囲に拡がっている。構造は上部と下部に分かれ、上部に小皿48枚(193~240)以上、下部に大皿12枚(241~252)の計60枚以上で構成され、厚さは約15cmを測る。上部の小皿は主に正位、下部の大皿は主に逆位であった。

小皿は口縁部の形態から2種類(I類・II類)に、また色調では大皿も含めて3種類(A~B)に、次のように分類できる。

- 形態
 - I類：いわゆる「て」の字状口縁皿の系譜上に位置付けられるもの。
 - II類：直線的、または外反気味な口縁のもの。
- 色調
 - A：淡茶灰色系。
 - B：乳白色系で、部分的に赤味を帯びるものもある。
 - C：灰白色~灰黄色系。

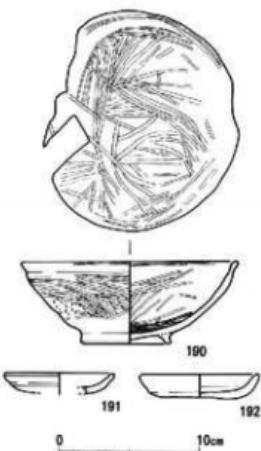
形態では、小皿のうち60%近くの28枚(193~220)がI類である。色調では、I類においてはAが1点のみで、他はBである。Bの部分的な赤味は焼きむらと考えられ、I類のほとんどがこのBであり、これらは一括して焼成されたものであろう。II類ではAが75%を占め、Bは無い。大皿では逆にAの割合が少なく25%となっている。

小皿はいずれも口縁部ヨコナデ、底部はナデで指頭圧痕が遺存するという技法である。ただII類の口縁部はヨコナデの強さにより、外反するものと直線的なものがみられる。また底部と口縁部との境は、稜を成すものと不明瞭なものがある。これらは明確には区別しえないので、個体差の範囲で捉えられるものと思われ、分類はしなかった。ただII C類の多くが底部と口縁部との境の不明瞭なものである。

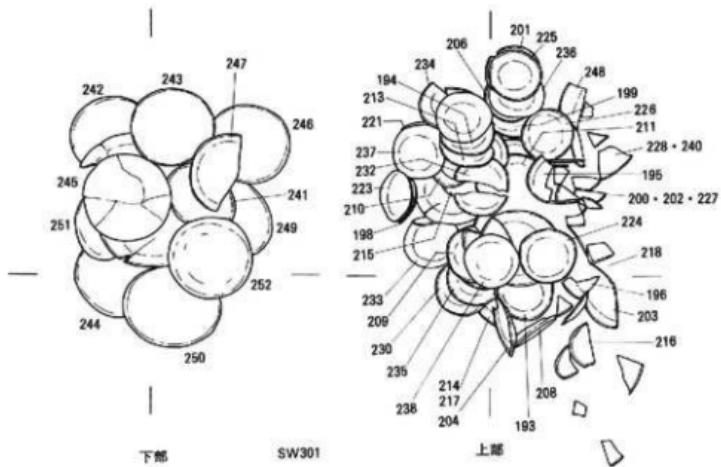
法量はI類とII類にはほとんど差は無く、口径9.0cm~10.3cmで、平均値は9.6cmとなる。

大皿は口縁部ヨコナデ、底部ナデで、底部外面には指頭痕が遺存する。法量は、口径14.8cm~16.1cmで、平均値は15.3cmとなる。

皿の規格・形態・色調による分類は表6にまとめた。なお第3章での個々の観察表は省略した。

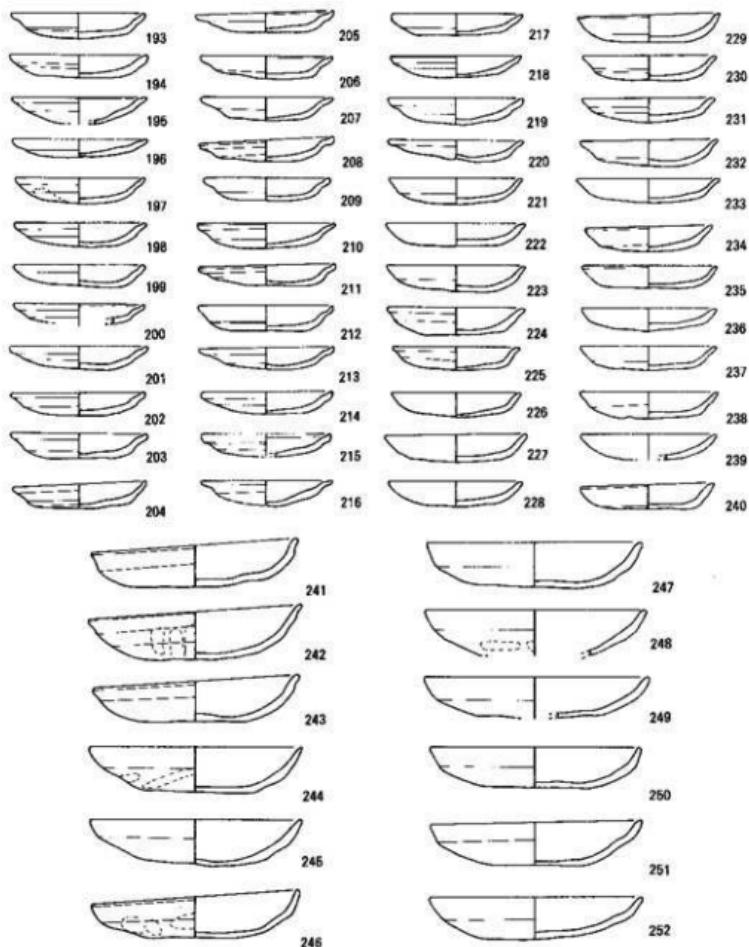


第28図 S D302, S P304・313
出土遺物 (S = 1/4)



0 50cm

第29図 SW301・302平面図 (S = 1/10)



第30図 SW301出土遺物 (S = 1/4)

		法量・形態			
色 調		小皿		大皿	計
		I類	II類		
A	1 (193)	15 (221~235)	16	3 (241~243)	19
B	27 (194~220)	-	27	-	27
C	-	5 (236~240)	5	9 (244~252)	14
計	28	20	48	12	60

表6 SW301出土土師器皿分類表

SW302

SW301の南約0.8mに位置し、南北約34cm・東西約33cmの範囲に拡がる。SW301と同じ構造で、上部に小皿35枚(253~287)、下部に大皿3枚(288~290)の計38枚で構成され、正位に大皿3枚を重ね、その周囲と上部を覆うように小皿が積まれている。厚さは約15cmを測る。上部の小皿は主に正位であるが、横位に立てられているものもある。

皿の規格・形態・色調からSW301と同様の分類が可能であり、表7にまとめた。なお第3章での個々の観察表は省略した。

形態的に注目されることは、小皿においてはSW301と異なりI類が一点も含まれていない。また色調ではBが無く、AとCでは逆にCの占める割合が多くなり60%程度となっている。両造構を合わせてBはI類固有の色調といえる。大皿はAのみである。

調整技法においては、小皿・大皿ともにSW301のものとほぼ同様であるが、大皿の口縁部のヨコナデがいずれも二段である。

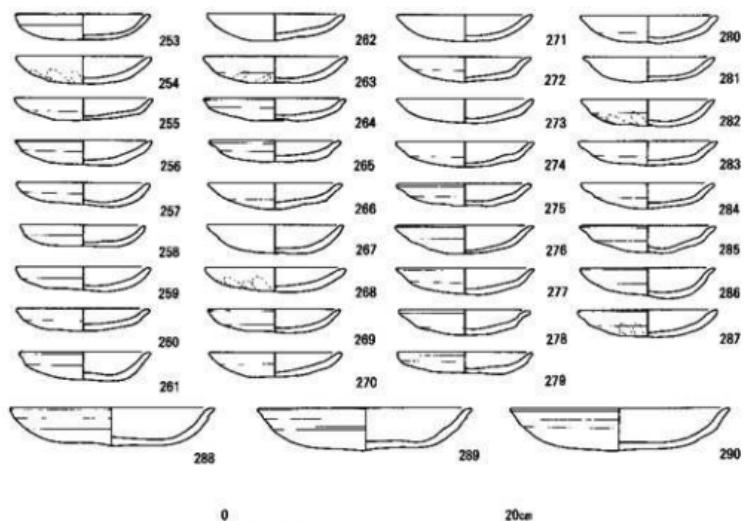
法量は小皿が口径9.1cm~10.25cmで、平均値は9.7cm、大皿が口径14.75cm~15.6cmで、平均値は15.2cmとなる。

		法量・形態			
色 調		小皿		大皿	計
		I類	II類		
A	-	13 (253~265)	13	3 (288~290)	16
B	-	-	-	-	-
C	-	22 (266~287)	22	-	22
計	-	35	35	3	38

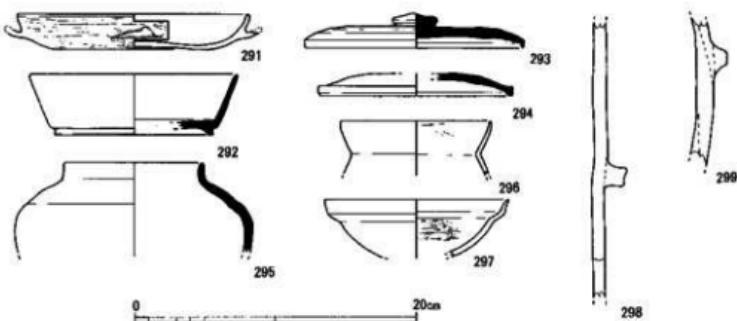
表7 SW302出土土師器皿分類表

SW301との関係であるが、小皿1類が含まれていないこと等、皿の構成比率に違いはあるものの、層位的にも、また同様の構造であることからも同時に構築されたものであろう。

SW301・302の土器の時期は、11世紀末から12世紀初頭と考えられる。遺構の性格としては整地にともなう地鎮の可能性がある。八尾市域での類例として、跡部遺跡第2次調査において、土師器小皿を一括埋納した12世紀頃のピットが検出されている。
註8



第31図 SW302出土遺物 (S = 1/4)



第32図 第8層出土遺物 (S = 1/4)

〈下層出土遺物〉

第8層の砂層からは、弥生時代後期から奈良時代までの遺物が出土している。土師器（291）は、口縁部外面横方向、底部外面一定方向の密なヘラミガキを施す。二方向あるいは三方向に三角形把手を付し、杯としては特異な形状のものである。8世紀初頭、平城IIの段階に比定される平城京左京一条二坊七・八坪長屋土邸跡 SD4750の出土遺物に類似が認められる。^{註9}須恵器（292～295）も同時期に比定されるものであろう。円筒埴輪（298）は横断面の円弧の形状から、橢円筒埴輪の可能性がある。（299）は形象埴輪で、突起が屈曲するようである。

第3章 山土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土 地点	法量(cm) I+II (復元値) 高さ	色調 外 内	釉上	機械	技法・形態等の特徴	残 存 状
1	丸器 皿	2～3 A 第3層	8.5 1.7	灰色	素	良好	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。内面一帯の網目状模文。	ほぼ完形
2	青花 碗	2 C 第3層	高台径 (5.3) 高台高 0.9	乳青灰色	密	良好	網目模様。高台内に鉛款「□明□□年製」。	底部1/4 欠損
3	伊万里 碗	2 C 第3層	高台径 (5.4) 高台高 1.0	乳灰青色	密	良好	網目文。	1/3 欠損
4	青磁 碗	西区 第3層	(17.4)	淡緑灰色	密	良好	内面片切彫りによる垂葉文。	極小 欠損
5	土師器 羽釜	2 B～C 第3層	(15.9)	淡褐色	密	良好	I+II縁部ヨコナデ。底部ナデ。	1/3 欠損
6	東播系 須恵器 鉢	3 D～E 第3層	(25.7)	灰系色	密	良好	I+II縁部ヨコナデ。	極小 欠損
7	東播系 須恵器 鉢	4 D～E 第3層	(26.6)	淡灰青色	密1.5mm以下 の砂粒含む	良好	回転ナデ。	極小 欠損
8	東播系 須恵器 鉢	4 D～E 第3層	(31.1)	灰色	密1.5mm以上 の砂粒含む	良好	回転ナデ。	極小 欠損
9	土師器 皿	3 A 第3層	9.75 2.0	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
10	土師器 皿	3 A 第5層	9.85 1.8	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	4/5
11	土師器 皿	3 A 第5層	9.85 2.05	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
12	土師器 皿	1～2 C 第5層	9.45 1.8	明乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
13	土師器 皿	3 A 第5層	9.75 1.75	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
14	土師器 皿	3 A 第5層	9.75 1.8	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形

III 中州遺跡第8次(NT91-8)

遺物番号 回収番号	器種	出土 地点	法縫(cm) (復元値) 基高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	備考
15	土師器 皿	3人 第5層	9.85 1.65	乳茶色	密	良好	口縁部ヨコナギ。底体部ナゲ。	ほぼ完形
16	土師器 皿	3~4E ~F 第5層	12.35 1.6	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。底体部ナゲ。	2/3 一部反転
17	瓦器 皿	1A 第5層	8.2 1.9	白灰色	密	良好	口縁部ヨコナギ。底体部外面ユビオサ エ、内面ナゲ。	1/1層部 1/3欠損
18	瓦器 碗	3~4D ~F 第5層	(10.7) 2.45	淡灰色	密	良好	口縁部ヨコナギ。底体部ナゲ。	1/3 一部反転
19	瓦器 碗	3~4E ~F 第5層	(11.0)	淡灰色	密	良好	口縁部ヨコナギ。底体部ナゲ。	1/4 反転
20	瓦器 皿	東K 第5層	(8.3) 2.3	淡灰褐色	密	良好	口縁部ヨコナギ。底体部ナゲ。内面斜 格子・網状ヘラミガキ。	1/2 反転
21	土師器 杯	3~4C 第5層	(9.2)	淡褐色	密: 1mm以下の 砂粒含む	良好	口縁部ヨコナギ。底体部外面ユビオサ エ、内面放射状ヘラミガキ。	1/4 反転
22	土器 高台付S皿	4A 第5層	脚径 (4.8) 脚高 2.6	乳茶色	密	良好	ナゲ。	脚部1/4 一部反転
23	白磁 碗	4D~E 第5層	(16.4)	淡灰白色	密	良好	回転ナゲ・回転ヘラケズリ。	1/10 反転
24	青磁 皿	2B 第5層	底深 (5.0)	淡綠灰色	密	良好	回転ナゲ・回転ヘラケズリ。内面側に よるジグザグ文。底部外周輪郭。	1/4 反転
25	白磁 皿	2B 第5層	(5.4)	乳白色	密	良好	内面ヘラ筋による花文。底部外周輪 郭。	1/4 反転
26	土師器 羽釜	4D~E 第5層	(24.1) (29.0)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部は焰部～外周ナゲ。内面ヨコナ ギ。脚ヨコナギ。	1/10 反転
27	土師器 羽釜	4D~E 第5層	(26.8)	淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。底体部外面ヨコナギ、 内面ナゲ。	極小 反転
28	土師器 羽釜	3~4E ~F 第5層	(30.1)	淡系灰色	密 1mm以下の 砂粒含む	良好	ナゲ。	極小 反転
29	土師器 羽釜	4D~E 第5層	(31.6)	淡乳茶色	やや粗	良好	ヨコナギ。	極小 反転
30	瓦器 羽釜	3D~E 第5層	(21.8) (27.5)	淡灰色	密 1mm以下の 砂粒含む	良好	ヨコナギ。脚下面ヘラケズリで煙付着。	極小 反転
31	束縛系 須恵器 鉢	4D~E 第5層		灰色	密	良好	回転ナゲ。内面ナゲ。	極小
32	束縛系 須恵器 鉢	3~4C 第5層	(22.4)	灰色	密	良好	回転ナゲ。口縁部外周自然輪。	極小 反転
33	束縛系 須恵器 盤	1B 第5層	(22.6)	淡茶色	密	良好	回転ナゲ。	1/8 反転
34	束縛系 須恵器 盤	3B 第5層	(42.0)	暗灰色	密	良好	ナゲで、外周タキを残る。	極小 反転
35	瓦器 甕	3D~E 第5層	(32.2)	灰色	密	良好	口縁部ヨコナギ。底体部外周タキ、内 面ナゲ。	極小 反転

遺物名号 測定番号	器種	出土 地點	法量(cm) (復元後)	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 状 況
36	布留式土器 甌	S E 202 曲物内 第5層	(12.6) 7.03	乳茶色 暗乳茶色 密	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部内面ヘラケザリ。	1/8 反転
37	土器器 皿	S E 202 曲物内	(12.7) 16.5	乳茶色 灰黑色 密	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1/4 反転	
38	瓦器 碗	S E 202 曲物内	(16.5)	淡灰色 灰黑色 密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は見込み格子、体部密なヘラミガキ。	1/8 反転	
39	瓦器 碗	S E 202 曲物内	(16.6)	暗灰色 黑灰色 密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は、体部密なヘラミガキ。	1/8 反転	
40	瓦器 碗	S E 202 曲物内 高台径 (4.5)	(14.4) 5.0 4.5	黑灰色 黑灰色 密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は、体部粗なヘラミガキ。 高台高 0.6	極小 反転	
41	瓦器 碗	S E 202 曲物内 高台径 (4.5)	15.4 5.05 4.5	黑灰色 黑灰色 密	良好	内面は、見込み格子、体部粗なヘラミガキ。 高台高 0.3	完形	
42	土器 甌	S E 202 下から二 段目	直径 高さ 41.6 33.0				外側は二段巻きで、下段のみ巻き方向が逆。 内側と外側の間に、横條のための長方形の溝を抜んでいる。底は斜次に通る。	
43	土器 甌	S E 202 最下段	直径 高さ 46.0 28.5				外側は三段巻き。	
44	土器器 羽釜	S E 203	(31.0)	暗乳茶色 やや粗	良好	口縁部ナダで、底部外縁ヨコナデ。	極小 反転	
45	瓦器 碗	S E 203	(14.8)	黑灰色 密	良好	外面粗なヘラミガキ、内面密なヘラミガキ。	1/5 反転	
46	瓦器 碗	S E 203 高台径 (6.1)	(15.6) 5.4 (6.1)	黑灰色 密	良好	外面やや密なヘラミガキ。内面は見込み平行、体部密なヘラミガキ。 高台高 0.6	1/6 反転	
47	瓦器 碗	S E 204 曲物内 高台径 (6.1)	(15.6) 5.4 (6.1)	灰黑色 密	良好	外面粗なヘラミガキ。内面は見込み格子状、体部粗なヘラミガキ。 高台高 0.6	1/8 反転	
48	瓦器 碗	S E 204 曲物内 高台径 (6.1)	15.25 4.45 5.0	黑灰色 密	良好	内面見込み平行、体部粗なヘラミガキ。 高台高 0.4	完形	
49	瓦器 碗	S E 204 曲物内 高台径 (6.1)	15.0 5.1 4.9	黑灰色 密	良好	内面見込み平行、体部粗なヘラミガキ。 高台高 0.5	完形	
50	土器器 羽釜	S E 204 曲物内 高台径 (6.1)	(22.4) (32.6)	暗乳茶色 やや粗	良好	ナダ。脚ヨコナデ。口縁底部の二か所にくぼみ有り。	1/4 反転	
51	土器器 羽釜	S E 204 曲物内 高台径 (6.1)	(27.8) (37.5)	乳茶色 やや粗	良好	U線部-体部外縁ヨコナデ。内面ナダ。 脚下面焼付着。	1/5 反転	
52	土器器 皿	S E 204 最下段	直径 高さ 41.5 29.0			外側は上部と下部の二段巻きで、巻き方向は逆。外面は単書。		
53	土器器 皿	S E 205 曲物内 最下端	(8.9) 1.7	暗乳茶色 密	良好	U線部ヨコナデ。底体部外縁ユビオサエ、内面ナダ。	1/2 一部反転	
54	土器器 皿	S E 206 曲物内 最下端	10.05 1.7	乳茶色 密	良好	U線部ヨコナデ。底体部外縁ユビオサエ、内面ナダ。	ほぼ完形	
55	瓦器 碗	S E 208 曲物内 最下端	(14.0)	淡黑色 灰黑色 密	良好	内外面密なヘラミガキ。	1/5 反転	
56	土器器 羽釜	S E 208 曲物内 最下端	(23.7) (34.7)	暗灰色 密	やや粗 3.5 mm 以上の砂粒含む	良好 ナダ。外縁焼付着。	1/5 反転	

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	法線(cm) (復元後) 高さ	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 状
57 上	曲物底	SE205 掘形内	白経 厚さ 1.1	35.4				
58	瓦器 小瓶	SK206		(7.8)	淡灰色	密	良好 口縁部ヨコナデ。体部外面ナゲ、内面 輪郭状の崩れハラミガキ。	1/5 反転
59 上	瓦器 瓶	SK206		(29.0)	墨灰色	やや粗5.0mm 以下の砂粒含む	良好 口縁部ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、 内面削し目。	1/4 反転
60 上	瓦器 瓶	SK206		(33.1)	成灰色	南0.5mm以下 の砂粒含む	良好 口縁部ヨコナデ、外面ハケ残る。口 縁部へ体部間外面ユビオサヌ。体部外 面ナゲ、内面ナゲ。	極小 反転
61	土防腐 丸	SD205		(8.5) 1.65	乳白色	密	良好 口縁部へ体部間外面ヨコナデ、全体外 面ユビオサヌ、底部内面ナゲ。	1/4 反転
62	瓦器 皿	SK205		8.8 1.9	淡灰色	密1.5mm以下 の砂粒含む	良好 口縁部外側ヨコナデ。底体部内面ナゲ。 内面は見込み平行+輪郭状ヘラミガキ。	1/4 反転
63	土断面 瓦器	SK205 背逆		(31.6) (30.6)	乳白色	やや粗	良好 口縁部へ体部外側ヨコナデ。底体部内面 ナゲ。裏付石。	1/8 反転
64	瓦器 瓶	SP207		(14.0)	淡灰黑色	密	良好 外面はやや衝撃、内面は密なハラミガ キ。	1/8 反転
65	瓦器 瓶	SP207 高台高 高台高	4.9 0.5	墨灰色	密		良好 底部外側ナゲ。見込み格子状ヘラミガ キ。	高台のみ 一部反転
66	土断面 瓦器	SD201		(8.2) 1.4	淡灰茶色	密	良好 ナゲで、口縁部内面ヨコナデ。	1/4 反転
67	土断面 瓦器	SD201		(8.5) 1.4	乳灰茶色	やや粗	良好 口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	1/4 反転
68	黑色土器 瓶	SD201 高台高 高台高	(8.0) 1.0	乳灰茶色	やや粗		良好 外面ナゲ。内面ヘラミガキ。八脚(内 里)。	1/2 反転
69 上	瓦器 瓶	SD201 高台高	(15.1) 4.8 5.6	墨灰色	密		良好 口縁部ヨコナデ。体部外側ユビオサヌ。 外面直なハラミガキ。内面は見込み斜 格子一体構成なハラミガキ。高台高 0.6	1/4 一部反転
70 上	瓦器 瓶	SD201 高台高	(14.1) 3.3 3.4	墨灰色	密		良好 口縁部ヨコナデ。体部外側ユビオサヌ。 底部外側ナゲ。内面見込み平行+体部 粗なハラミガキ。高台高 0.3	1/3 一部反転
71	土断面 羽釜	SD204 背逆	(30.7) (38.0)	墨茶色	やや粗2mm以 下の砂粒含む	良好	口縁部ナゲ。両ヨコナデ。	極小 反転
72	瓦器 羽釜	SD204 背逆	(26.7) (32.7)	灰茶色	密		良好 口縁部外側ヨコナデ、内面ハケ。体部 外面ヘラケズリ。	1/8 反転
73 上	瓦器 瓶	SD204 高台高 高台高	6.5 0.8	墨灰色	密		良好 底体部外側ナゲ。高台ヨコナデ。見込 み一定方向のハラミガキ。	高台のみ 一部反転
74	半瓦	SD204 縦逆	(19.0) (15.5)	白灰色	やや粗	良好	凹面布目。凸面同様後、一部横方向の ヘラケズリ。側面ナゲ。	1/5
75	土断面 皿	SD205		7.85 1.6	乳灰茶色	やや粗	良好 口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	3/4
76	土断面 皿	SD205		(8.6) 1.2	乳灰茶色	密	良好 口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	1/3 反転
77 上	土断面 皿	SD205		9.35 1.7	乳灰茶色	やや粗	良好 口縁部ヨコナデ。底体部外側ユビオサ ヌ、内面ナゲ。	2/3

遺物番号 回収番号	器種	出土 地点	法量(cm) (復元値) 濃高	色調 外 内	胎 上	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 状
78	土師器 皿	SD205	8.75 1.65	乳灰茶色 密	南	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユ ビオサエ、内面ナダ。	1/2
79 考	土師器 皿	SD205	9.9 1.8	淡灰灰白 密	0.2m以下 の砂粒含む	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナダ。	完形
80	土師器 皿	SD205	(10.25) 1.6	乳茶色 密	南	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナダ。	1/4 反転
81 考	土師器 皿	SD205	(13.5) 2.95	乳茶色 密	南	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナダ。	ほぼ完形
82	土師器 皿	SD205	(15.0)	淡灰灰白 密	0.1m以下 の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナダ。	1/8 反転
83	土師器 皿	SD205	(15.9) 2.3	淡灰茶色 密	0.1m以下 の砂粒含む	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナダ。	1/8 反転
84	土師器 高台付豆皿	SD205	脚底径 脚高 (9.4) 3.5	乳茶色 密	南	良好	底部ナダ。	1/4 反転
85	土師器 碗	SD205	(18.0)	淡灰灰白 密	1m以下の 砂粒含む	良好	口縁部外側ナデ、内面ヨコナデ。底体 外側ユビオサエ、内面ヘラミガキ。	1/8 反転
86 古	瓦器 皿	SD205	(8.5) 1.5	黑灰色 密	南	良好	口縁部～内面ナデ。底体部外面ユビオ サエ。	1/5 反転
87 古	瓦器 皿	SD205	(9.2) 1.9	黑灰色 密	南	良好	口縁部外側ヨコナデ。底体部外面ユ ビオサエ、内面見込み平行・体表面密な ヘラミガキ。	1/3 反転
88 古	瓦器 皿	SD205	(9.2) 2.5	淡灰灰白 密	南	良好	ヨコ形外側ヨコナデ。底体部外面ナデ。 内面見込み平行・体表面密なヘラミガキ。	1/4 反転
89 古	瓦器 皿	SD205	8.9 1.8	黑灰色 密	南	良好	口縁部外側ナデ。底体部外面ユビオサ エ、内面表面き状ヘラミガキ。	ほぼ完形
90 古	瓦器 碗	SD205	(14.0)	淡灰灰白 密	南	良好	口縁部外側ヨコナデ。底体部外面ユビ オサエ。外側は粗なヘラミガキ。内面 は見込み粗・体表面密なヘラミガキ。	1/3 反転
91 古	瓦器 碗	SD205	(14.8)	黑灰色 密	南	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサ エ。外側は粗なヘラミガキ。内面は体表面 密なヘラミガキ。	1/8 反転
92 古	瓦器 碗	SD205 高台径	(15.6) 3.9 (3.9)	黑灰色 密	南	良好	口縁部外側ヨコナデ。底体部外面ユビ オサエ。底体外側ナデ。内面は見込み平 行・体表面密なヘラミガキ。高台高 0.3	1/4 反転
93 古	瓦器 碗	SD205	(16.6)	淡灰灰白 密	南	良好	内面表面密なヘラミガキで、外面上位に ユビオサエ残る。	1/5 反転
94 古	瓦器 碗	SD205 高台径	12.0 2.95 2.85	黑灰色 密	南	良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユ ビオサエ。内面表面き状ヘラミガキ。高 台高 0.2	4/5
95 古	瓦器 碗	SD205 高台径	(12.8) 2.85 3.3	黑灰色 密	南	良好	ヨコ形ヨコナデ。底体部外面ナデ。内 面表面き状ヘラミガキ。高台高 0.1	1/4 反転
96 古	瓦器 碗	SD205	(14.0)	灰色 密	南	良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサ エ。底体外側ナデ。内面見込み平行・体 表面密なヘラミガキ。	1/6 反転
97 古	瓦器 碗	SD205 高台径	(13.6) 2.5 2.8	黑灰色 密	南	良好	口縁部外側ヨコナデ。底体部外面ユ ビオサエ。内面表面き状ヘラミガキ。高 台高 0.2	1/5 反転
98 古	瓦器 碗	SD205	10.1 2.9	白灰色 密	南	良好	口縁部ナデ。底体部外面ユビオサエ。 内面表面き状ヘラミガキ。	1/2

遺物番号 測定番号	器種	出土 地点	法量(cm) (復元値) 直高	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	焼 成 考
99 古	丸器 鉢	SD205	(23.2)	黒灰色 素面	素	良好	口縁部ヨコナギ。全体外面ナゲ、内面 ヘラミガキ。	極小 反転
100 古	青磁 皿	SD205	底径 4.0	乳灰褐色 素		良好	曲輪ナゲ。回転ヘラケズリ。底部外側 輪括取り。	底部のみ 一部反転
101 古	青磁 碗	SD205	(17.0)	淡緑灰色 素		良好	内面片切砸りによる花文。	1/8 反転
102 古	白磁 碗	SD205	(17.4)	乳茶灰色 素		良好	回転ナゲ。回転ヘラケズリ。	極小 反転
103 古	白磁 碗	SD205	(16.8) 6.5 (7.0)	乳灰色 素	素	良好	回転ナゲ。回転ヘラケズリ。外面下半 露胎。	1/3 反転
104 古	人形	SD205	長さ 22.2 幅 2.8 厚さ 1.0				下端部欠損。	
105 古	木輪	SD205	長さ 9.8 幅 3.0~5.5					
106	車轡系 須恵器 鉢	SD205	(36.6)	灰色 素	0.5mm以 下 の砂粒含む	良好	口縁部外面回転ナゲ、内面ナゲで、内 面にヘケ残る。	極小 反転
107	車轡系 須恵器 鉢	SD205		灰色 素		良好	口縁部外面回転ナゲ、内面ナゲ。外面 自然施。	極小
108	車轡系 須恵器 鉢	SD205		灰色 素		良好	口縁部ナゲ。	極小
109	車轡系 須恵器 鉢	SD205	(33.0)	灰色 やや粗		良好	回転ナゲ。	極小 反転
110 古	卜器 羽筆	SD205	(17.9) (23.6)	乳茶色 素	やや粗 3mm以 下の砂粒含む	良好	口縁部~外外面ヨコナギ。内面ナゲ。 口縁部と同様煤付有。	1/8 反転
111 古	卜器 羽筆	SD205	(24.9) (33.0)	灰褐色 素	やや粗 1.5mm以 下の砂粒含 む	良好	口縁部ヨコナゲ。全体ナゲ。筒ヨコナゲ。	1/5 反転
112 古	土師器 羽筆	SD205	(33.9) (40.0)	乳茶色 素	やや粗	良好	口縁部ヨコナゲ。全体ナゲ。筒ヨコナ ゲで煤付有。	1/5 反転
113 古	土師器 羽筆	SD205	(22.2) (25.0)	淡乳茶色 素	やや粗	良好	口縁部~筒ヨコナゲ。内面ナゲ。外面 煤付有。	極小 反転
114	土師器 羽筆	SD205	(28.8) (33.0)	灰褐色 素	やや粗	良好	口縁部~筒ヨコナゲ。全体ナゲ。	極小 反転
115 古	瓦器 壺	SD205	(38.4)	暗灰褐色 素	やや粗	良好	口縁部回転ナゲ。	極小 反転
116 古	常滑 壺	SD205	(33.2)	淡褐灰色 素	0.5mm以 下 の砂粒含む	良好	回転ナゲ。	極小 反転
117	九瓦	SD205		淡灰褐色 素		良好	凹面施目。凸面ナゲ。五瓣四面窓跡ヘ ラケズリ。	極小
118	平瓦	SD205	長辺 18.9 短辺 14.0	墨灰色 素	やや粗	良好	凹面ナゲ。凸面横目。側面ナゲ。端部 ヘラケズリ。	1/5
119 古	土築器 面	SD206		9.3 1.6	乳灰褐色 素	良好	口縁部ヨコナゲ。全体ナゲ。	3/4

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値) 器高	色調 外 内	胎 上	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 状 況
120 上	土師器皿	SD206	8.85 1.7	淡乳茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ケダ。	4/5
121 上	土師器皿	SD206	9.1 1.7	淡灰茶色 密0.2mm以下 の砂粒含む		良好	口縁部～内側ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
122 上	土師器皿	SD206	9.1 1.65	乳茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	7/8
123 上	土師器皿	SD206	8.9 1.4	乳茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
124 大	土師器皿	SD206	(8.7) 1.65	乳茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	1/2 反転
125 大	土師器皿	SD206	9.1 1.7	淡茶灰色 密0.5mm以下 の砂粒含む		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	完形
126 大	土師器皿	SD206	9.1 1.5	淡灰茶色 密0.5mm以下 の砂粒含む		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	ほぼ完形
127 大	土師器皿	SD206	8.95 1.55	明乳茶色 密		良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
128 上	土師器皿	SD206	8.6 1.55	乳灰茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	3/4
129 上	土師器皿	SD206	(9.0) 1.3	淡茶灰色 密1.5mm以下 の砂粒含む		良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部ナデ。	1/2 一部反転
130 上	土師器皿	SD206	9.1 1.4	乳灰茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
131 大	土師器皿	SD206	8.95 1.6	暗灰茶色 密		良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	完形
132 大	土師器皿	SD206	8.5 1.6	淡灰茶色 密1mm以下の 砂粒含む		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
133 上	土師器皿	SD206	8.1 1.56	乳茶色 密		良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
134 上	土師器皿	SD206	8.2 1.3	淡灰茶色 密1mm以下の 砂粒含む		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
135 大	瓦器皿	SD206	(8.75) 1.4	灰色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。底体部ナゲ。	1/2 一部反転
136 大	瓦器皿	SD206	9.6 1.9	生灰色 密		良好	口縁部～内面ヨコナデ。底体部外面ユビオサエ、内面ナデ。	ほぼ完形
137 上	瓦器皿	SD206	(7.7) 1.7	淡灰色 密		良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ。底体部ナゲ。	1/2 反転
138 大	土師器皿	SD206	14.4 2.8	暗乳茶色 密		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	完形
139 上	土師器皿	SD206	13.8 2.7	淡茶灰色 密0.5mm以下 の砂粒を含む		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	1/2
140 大	土師器皿	SD206	14.35 2.5	暗乳茶色 やや粗		良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナゲ。	ほぼ完形

III 中田遺跡第8次(NIT91-8)

遺物番号 回収番号	器種	出土 地点	法寸(cm) (復元値) 器高	色調 外 内	胎 土	構成	技法・形態等の特徴	残 存 状 況
141 大	土師器 皿	SD206	14.3 2.6	暗乳茶色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
142 大	土師器 皿	SD206	13.6 2.3	暗乳茶色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	ほぼ完形
143 大	土師器 皿	SD206	(13.7) 3.8	乳灰茶色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。内面導 付。	1/2 反転
144 大	瓦器 碗	SD206 高台径	(16.0) 4.75 (5.4)	墨灰色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。底体部内面ナデ。高台ヨコ ナデ。外面粗なヘラミガキ。内面見込み格子 +体部粗なヘラミガキ。高台高 0.4	1/3 反転
145 大	瓦器 碗	SD206 高台径	15.4 4.9 5.0	墨灰黑色	赤	良好	体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。 外面粗なヘラミガキ。内面見込み格子 +体部粗なヘラミガキ。西台高 0.5	完形
146 大	瓦器 碗	SD206 高台径	(15.7) 4.9 (6.1)	墨灰色	赤	良好	体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。 外面粗なヘラミガキ。内面見込み格子 +体部粗なヘラミガキ。高台高 0.5	1/3 反転
147 大	瓦器 碗	SD206 高台径	(15.2) 4.2 (4.9)	墨灰色	赤	良好	体部外面ユビオサエ。底部外面ナデ。 内面見込み格子+体部粗なヘラミガキ。高台高 0.6	1/2 一側反転
148 大	瓦器 碗	SD206 高台径	15.85 5.1 (4.95)	墨灰色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。高台ヨ コナデ。底体部ナデ。外側面で、内面は見込 み手行。体部粗なヘラミガキ。高台高 0.6	1/4 一部反転
149 大	瓦器 碗	SD206 高台径	(15.4) 4.0 4.0	墨灰黑色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。 底部外面ナデ。内面見込み平行+粗な ヘラミガキ。高台高 0.25	1/4 反転
150 大	瓦器 盆	SD206 高台径	(15.4) 4.0 4.0	灰白色	赤	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。 内面ヘラミガキ。高台高 0.25	極小 反転
151 大	瓦器 盆	SD206 高台高	7.95 4.0	墨灰色	赤	良好	底部外面ナデ。内面見込み平行ヘラミ ガキ。	高台 3/4 一部反転
152 大	土師器 高杯	SD206 脚高	5.4 3.5	乳茶色	赤	良好	ナデ。	脚のみ 一部反転
153 大	土師器 高台付5足	SD206 脚高	10.0 3.8	乳灰茶色	やや粗	良好	底部ナデ。脚部ヨコナデで、外側上位 ユビオサエ。	脚のみ
154 七	陶器 鉢	SD206 高台径	(21.2) 8.1 (12.9)	墨灰色	やや粗	良好	口縁部-内面回転ナデ。体部外面回転 ヘラミガゼ。底部ナデ。高台貼付け。 高台高 1.5	1/4 反転
155 七	青磁 碗	SD206	(17.0)	緑灰色	赤	良好	内面片切り彫りによる花文。	極小 反転
156 七	白磁 碗	SD206 底径	(7.2) 乳灰茶色	赤	良好	回転ナデ。底部外面露胎。	1/2 反転	
157 七	瓦器 羽茎	SD206 脚径	(14.4) (18.6)	墨灰茶色	赤	良好	口縁部ハケで、端部ヨコナデ。脚ヨコ ナデ。	1/6 反転
158 七	瓦器 羽茎	SD206 脚径	(17.65) (23.2)	墨灰茶色	赤	良好	口縁部ハケで、端部ヨコナデ。脚ヨコ ナデ。同様付着。	極小 反転
159 七	瓦器 三足器	SD206 脚底	11.0	白灰色	やや粗	良好	ナデ。	脚のみ
160 七	土師器 羽茎	SD206 脚径	(30.8) (36.4)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ナデで、端部ヨコナデ。L字縁部 +体部外面側付着。	極小 反転
161 七	東播系 須恵器 盆	SD206	(29.0)	墨灰色	赤	良好	口縁部回転ナデ。体部ナデ。	1/4 反転

遺物番号 回収番号	器種	出土 地點	法面(cm) (復元値) 厚肉	色調 外 内	胎 土	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 状 況
162 大	東播系 須恵器 鉢	SD206	(34.8)	暗灰色	密 度 3 mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部回転ナガ。底部ナガ。	極小 反転
163 大	東播系 須恵器 鏡	SD206	(21.8)	暗灰色	密	良好	口縁部回転ナガで、底部外側タタキ残る。底部外側タタキ、内側ナガ。	1/4 反転
164 大	下鉢	SD206	長さ 幅 高さ 17.0 9.5 2.9					完形
165 大	土師器 皿	SD207	(14.0) 2.6	淡灰茶色	密1.5 mm以下 の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナガ。底体部ナガ。	1/3 反転
166 大	土師器 皿	SD207	8.3 1.3	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナガ。底体部ナガ。	ほぼ完形
167 大	土師器 皿	SD207	(8.0) 1.1	淡灰茶色	密1 mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナガ。底体部ナガ。	1/3 反転
168 大	土師器 皿	SD207	8.0 1.55	乳白色	やや粗	良好	口縁部ヨコナガ。底体部ナガ。	ほぼ完形
169 大	土師器 皿	SD207	(7.6) 1.4	灰色	密	良好	口縫形～内面ヨコナガ。底体外側ユビ オサエ。底部ナガ。	ほぼ完形
170 大	土師器 皿	SD207	7.8 1.5	淡灰茶色	密0.2 mm以 下の砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナガ。底体部ナガ。	1/4 反転
171 大	瓦器 碗	SD207	(10.0) 2.8	灰黑色	密	良好	口縁部外側ヨコナガ。内面ナガ。底体 外側ナガ。内面粗なヘラミガキ。	反転
172 大	瓦器 碗	SD207	(10.9)	淡灰茶色	密3 mm以下 の砂粒を含む	良好	外側ナガ。内面丸方斜のヘラミガキ。	1/4 反転
173 人	瓦器 碗	SD207	10.6 2.5	灰黑色	密	良好	口縁部外側ヨコナガ。底体外側ナガ。 内面溝巻き状ヘラミガキ。	4/5
174 大	瓦器 碗	SD207	10.7 2.4	淡灰茶色	密3 mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナガ。底体外側ユビオサエ。 底部外側ナガ。内面溝巻き状ヘラミガ キ。	3/4
175 大	土師器 羽釜	SD207 鉄鋸	(30.2) (33.0)	淡茶褐色	やや粗2 mm以 下の砂粒を含 む	良好	口縁部ナガ。内面ヨコナガで下面に焼 付着。	1/8 反転
176 大	土師器 羽釜	SD207 鉄鋸	(28.6) (34.3)	淡茶色	密3.5 mm以 下の砂粒を含 む	良好	口縁部ナガ。内面ヨコナガで下面に焼 付着。	1/5 反転
177 大	瓦器 羽釜	SD207 鉄鋸	(14.7) (19.3)	黒灰色	密	良好	口縁部外側ヨコナガ、内面ナガ。内面 ヨコナガで下面に焼付着。	1/6 反転
178 大	瓦器 火鉢	SD207	(27.3)	暗灰色	密	良好	口縁部回転ナガ。11縁部2条の火薬筒 に菊花スタンプ文。	極小 反転
179 大	東播系 須恵器 鉢	SD207	(19.5)	灰色	密	良好	回転ナガで、底体タタキ残る。	1/3 反転
180 大	東播系 須恵器 鉢	SD207	(33.9)	灰褐色	密1 mm以下の 砂粒を含む	良好	口縁部ヨコナガ。底体ナガ。	極小 反転
181 大	陶器 鉢	SD207 高台井	(10.8) 1.2	灰色	やや粗	良好	回転ナガ。底体外側未調査。高台付 け。	1/5 反転
182 大	白磁 碗	SD207 高台井	(5.2) 0.6	乳灰色	密	良好	回転ヘラケズリ。回転ナガ。底体外側 裏板。見込み蛇の目状に輪巻き取り。	底部のみ 一部反転

III 中田遺跡第8次(NT91-8)

遺物番号 図版番号	器種	出土 場所	法算(cm) 口径 (深元値) 器高	色調 外 内	施土	施成	技法・形態等の特徴	備考	
183 大	木製品	SD207	長さ 幅 1.0~2.0	53.3			表面は六角形~八角形に面取りされる。 細い方の端部には切り込みが入る。		
184 人	瓦質製品	SD207	高さ 幅	37.8 37.5	灰色	素	表面から側面はナガ。上小口曲面は粘土。 切り取り後未焼成。裏面には墨?の痕跡。 縫付省。断面13.1mm。断面13.1mm。	1/2?	
185	軒平瓦	SD207	長辺 高さ	9.0	褐色	素1m以下の 砂粒を含む	良好	凹面布目。側面ナガ。遍珠文。	極小
186	丸瓦	SD207	長辺 高さ	18.7 8.8	白色	素	良好	凹面布目。凸面ナガ。端部ナガ。	1/4
190 大	瓦質 明	SD302 高台壁		15.6 5.8 6.4	灰褐色	素	口縁部ヨコナガ。高台ヨコナガ。底外部 ナガ。外縁は厚で分離した、内面は薄で放射状のヘラミヨギ。高台高 0.8	4/3	
191	土器器 皿	SP304		7.8 1.5	淡灰系色	素1m以下の 砂粒を含む	良好	口縁部~内面ヨコナガ。底体部ナガ。	1/4 反転
192	土器器 皿	SP313		8.6 1.6	淡灰系色	素1m以下の 砂粒を含む	良好	口縫部ヨコナガ。底体部ナガ。	完形
294 干	土器器 环	2B 第8層	(16.7) 2.5	乳白色	素	良好	外縁ヘラミガキで、底部にヘラケズリ残る。内面は口縫部ヨコナガ。底部ナギ。耳はナギで、2~3方向。	1/2 反転	
292	須恵器 杯身	西区 第8層	(14.9) 4.3 (11.4)	白色	素	良好	回転ナガ。 高台高 0.8	1/5 反転	
293 干	須恵器 杯蓋	西区 第8層	(15.7) 2.45 (11.4) つまみ紐 3.8	灰色	半0.2mm以下 の砂粒を含む	良好	回転ナガ。天井部外縁回転ヘラケズリ。 つまみナガ。灰かぶり。 つまみ高 0.9	1/4 一部反転	
294	須恵器 杯蓋	西区 第8層	(14.0)	灰色	素	良好	回転ナガ。天井部外縁回転ヘラケズリ。 内面ナガ。	1/6 反転	
295	須恵器 広口切頭盤	西区 第8層	(30.1)	灰色	素	良好	回転ナガ。両部外縁ナガ。灰かぶり。	1/6 反転	
296	土器器 皿	西区 第8層	(10.8)	乳白色	素	良好	ナガ。口縫部内面ヘラミガキ。	1/6 反転	
297	土器器 皿	西区 第8層	(13.2)	乳白色	素	良好	口縫部ヨコナガ。底体外縁ナガ、内面 ヘラミガキ。	極小 反転	
298	円筒埴輪	西区 第8層	突堤高 突堤幅	1.4 1.3	暗灰系色	やや粗	良好	ナガ。平面橢円形?	極小
299	形象埴輪	東区 第8層	突堤高 突堤幅	1.0 0.9	暗灰系色	やや粗	良好	ナガ。突堤は屈曲する。	極小

第4章 まとめ

今回の調査では、特に平安時代後期から室町時代の遺構・遺物を検出した。

第2次面では南北方向に平行する7条の溝（SD201～207）を検出した。山上遺物からみると、調査区西部のSD201と中央部のSD204が11世紀後半から、東部のSD205・206・207がやや遅れて12世紀中頃からとなる。そしてSD201・SD206は13世紀末頃には埋没し、その後SD204・205・207は14世紀末まで機能していたと思われる。

これらの溝のうち東端に位置するSD207は、規模や埋土の点から他の溝とは性格を異にするものである。SD207には橋が架けられており、また埋土の状況からも流路というよりは、「堀」、すなわち集落・屋敷地を区画する区画溝としての機能が考えられる。埋土中には建築材と考えられる多量の加工木材や、少量ではあるが瓦が含まれており、また上層からは礎石に使用されたとも思える巨石が出土している。これらのことからもSD207の東側に屋敷等の建物の存在も想定できよう。SD207の出土土器の時期には12世紀末から14世紀末の幅があり、鎌倉時代から室町時代前半という長期間にわたる集落の存在が窺える。同時期のこのような区画溝は、八尾市域では成法寺遺跡や福万寺遺跡で確認されている。^{註10} ^{註11}

井戸は5基（SE201～205）を検出した。出土遺物の時期は12世紀後半から13世紀初頭に比定される。これらの井戸は溝（SD201・206）に重複しており、同時に機能していたとも考えられよう。

第2次面の西部では、地鎮遺構と考えられる土師器皿集積を伴う整地層が確認され、整地層の下、第3次面では11世紀末～12世紀前半の遺構が検出された。調査区の西側に平安時代後期の集落遺構が存在する可能性がある。

下層確認調査では砂層中から弥生時代後期～奈良時代の遺物が検出されている。古墳時代前期までの土器はかなり摩滅しており、河川による流入が主であろう。埴輪については、東部の調査で検出されている古墳との関連が注目される。奈良時代の土器にはかなり遺存状態の良好なものがあり、周辺に8世紀初頃の集落の存在が十分考えられる。

註

註1 八尾市教育委員会「15. 中川遺跡（91～207）の調査」「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書」
1992. 3

註2 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘祝」（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒No.36』）

註3 財團法人八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度」〈II 老原遺跡

(第2次調査) 『財團法人八尾市文化財調査研究会報告13』1987年

この例では、補強のため曲物周間に隙間なく竹を打ち込んでいる。当例は竹の遺存が想く断言はできないがこれほど強固な補強ではなかったようである。

註4 墓書の解説については、八尾市立歴史民俗資料館 尾崎良史・小谷利明氏から御教示を得た。

註5 森島康雄「中河内の羽釜」(日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究VI』1990年12月)

註6 伊野近富「12~16世紀の京都の土器」(日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究V』1989年11月)

註7 前掲書 註4

註8 八尾市教育委員会文化財室「跡部遺跡発掘調査報告」「八尾市文化財紀要5」1991. 3

註9 古代の土器研究会編「古代の土器 I 都城の土器集成」

註10 財團法人八尾市文化財調査研究会「成法寺遺跡」(第6章 第6次調査(ST90-6) 発掘調査報告)『財團法人八尾市文化財調査研究会報告33』1991

註11 財團法人八尾市文化財調査研究会「福万寺遺跡-上之島町北3」(目22-1の調査-1)

『財團法人八尾市文化財調査研究会報告24』1990. 6

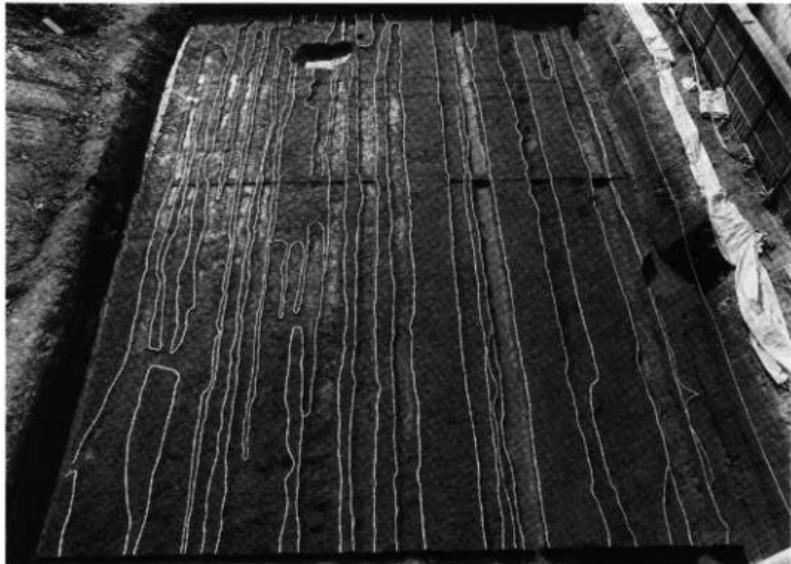
参考文献

財團法人八尾市文化財調査研究会「1 節振八遺跡(第1次調査)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 嘉和61年度」1987

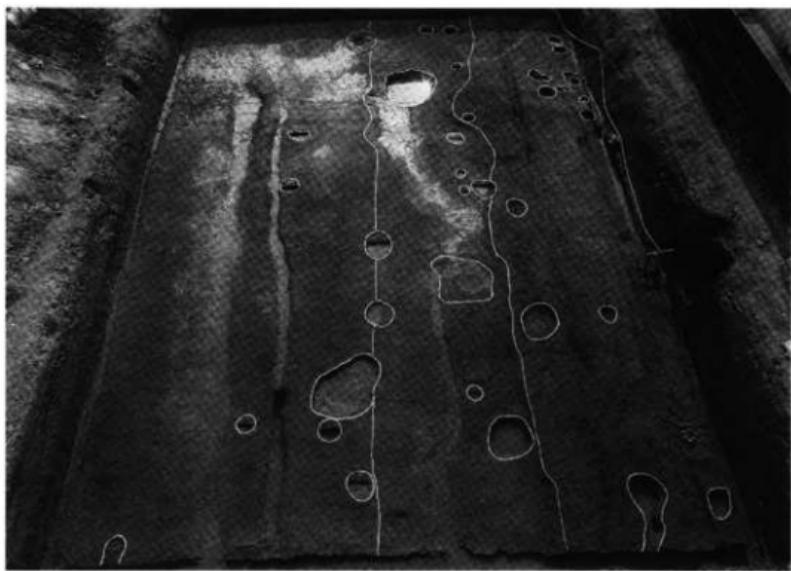
奈良国立文化財研究所「木器集成図録 近畿古代篇」1984

乙益重隆・金子裕之「人形」(『神道考古学講座』第三巻 原始神道期二 1981)

図 版



西区第1次面（北から）



西区第2次面（北から）



東区第2次面（北から）



S E 201断割り（北から）



S E 202 (北から)



S E 202断面 (北から)



S E 204 (北から)



S E 204断割り (北から)



S E 205断割り（南から）

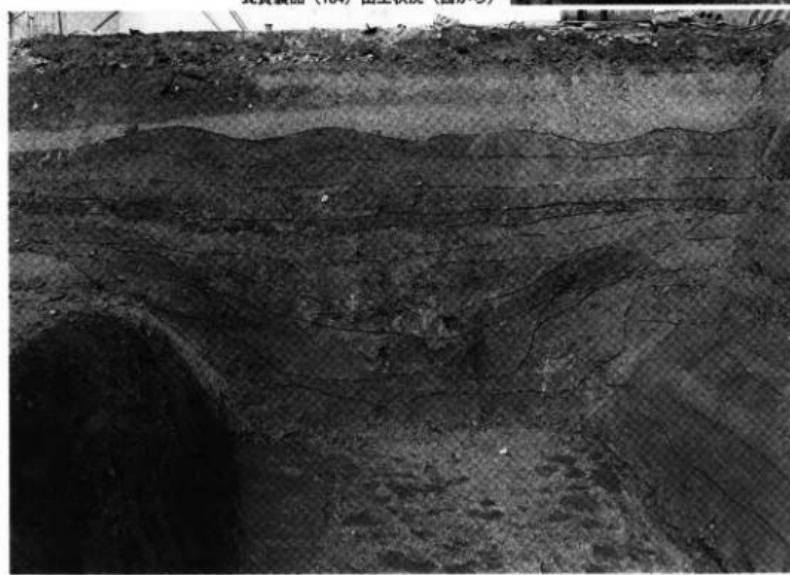


S D 206南端倒溝内遺物出土状況（北から）



SD 207全景（南から）

瓦質製品（184）出土状況（西から）



SD 207北壁



S D 207 横脚部分（南東から）



西区第3次面（北から）



S P313（北から）



SW301 (東から)



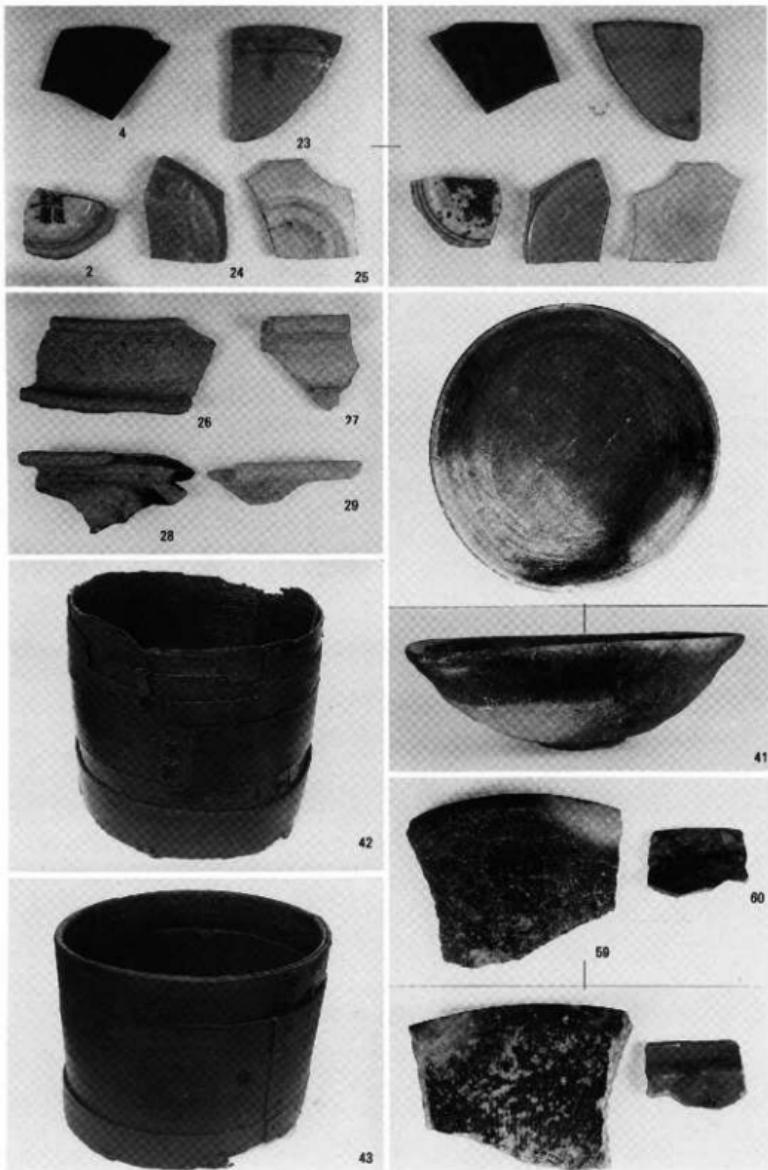
SW301下層 (東から)



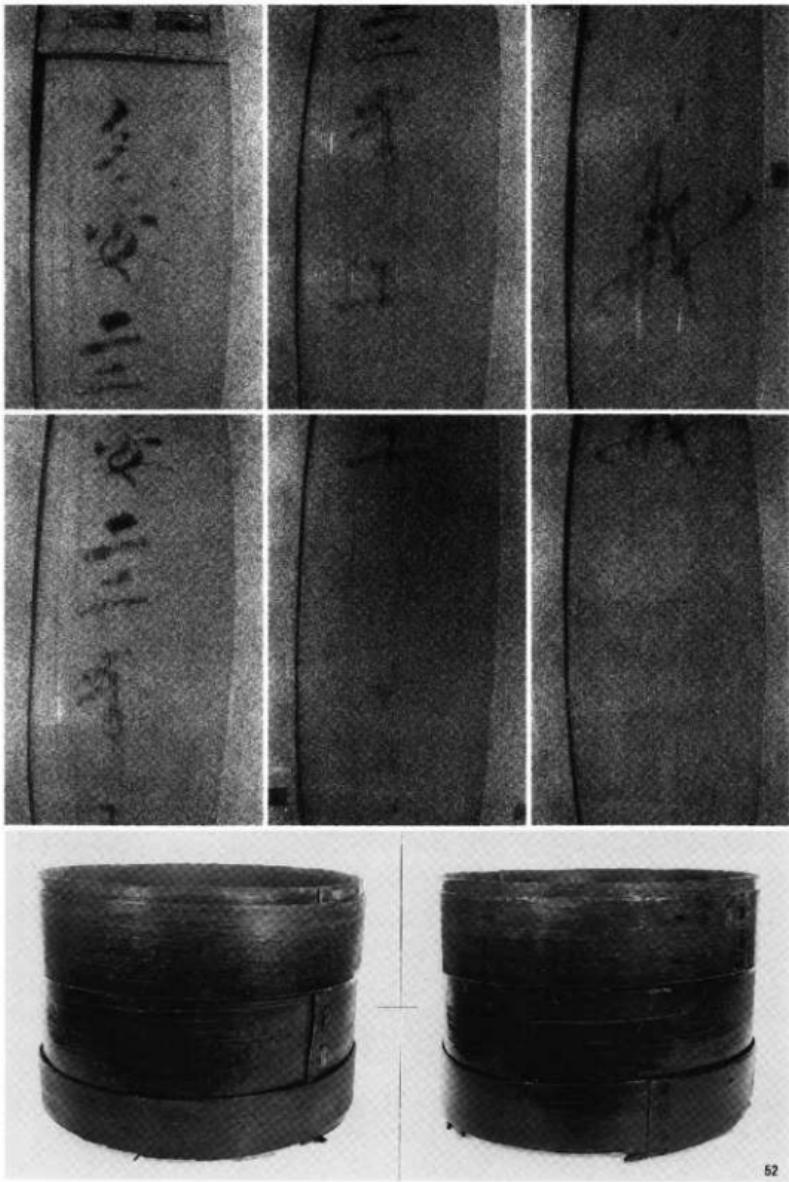
S.W302 (東から)

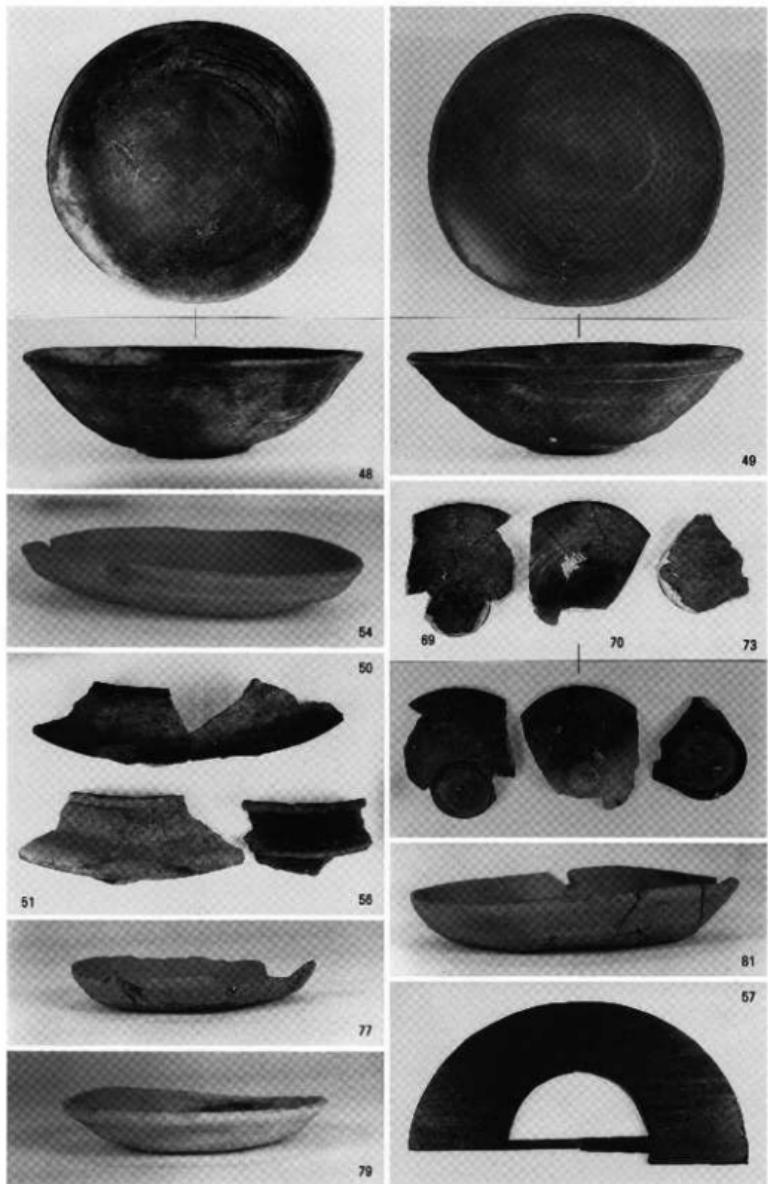


西区下層確認トレンチ（北西から）

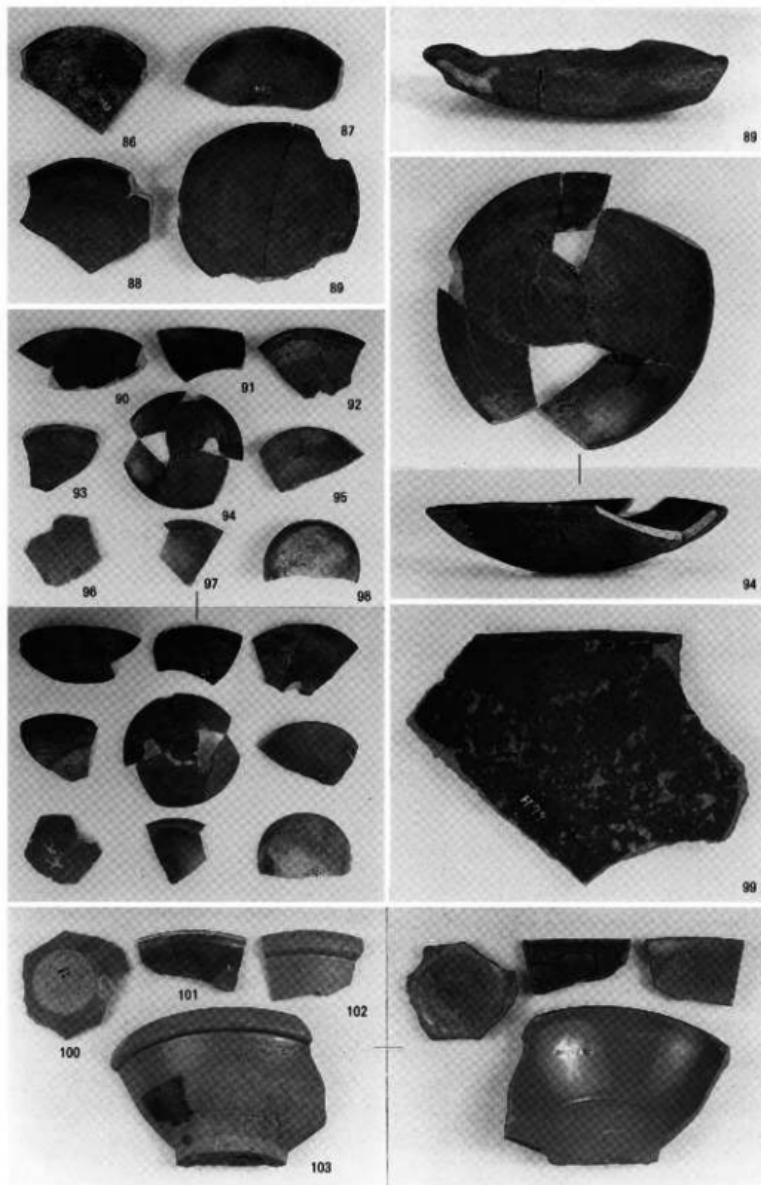


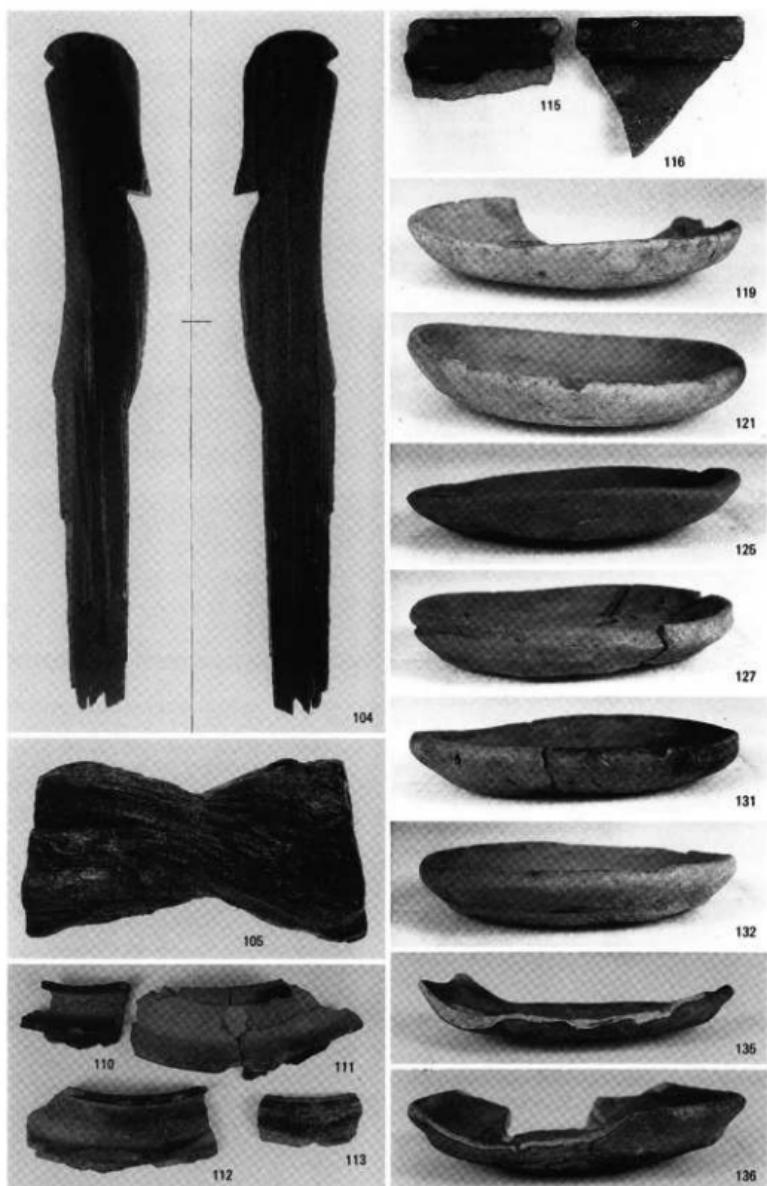
第3層(2・4)、第5層(23~29)、SE202(41~43)、SK206(59・60)





S E 204 (48~51)、S E 205 (54・56・57)、S D 201 (69・70)
S D 204 (73)、S D 205 (77・79・81)





S D 205 (104・105・110~113・115・116)、S D 206 (他)



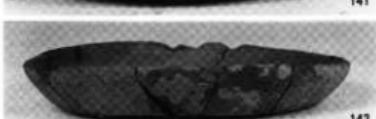
138



140



141



142



143



144

147



146

149



139



145



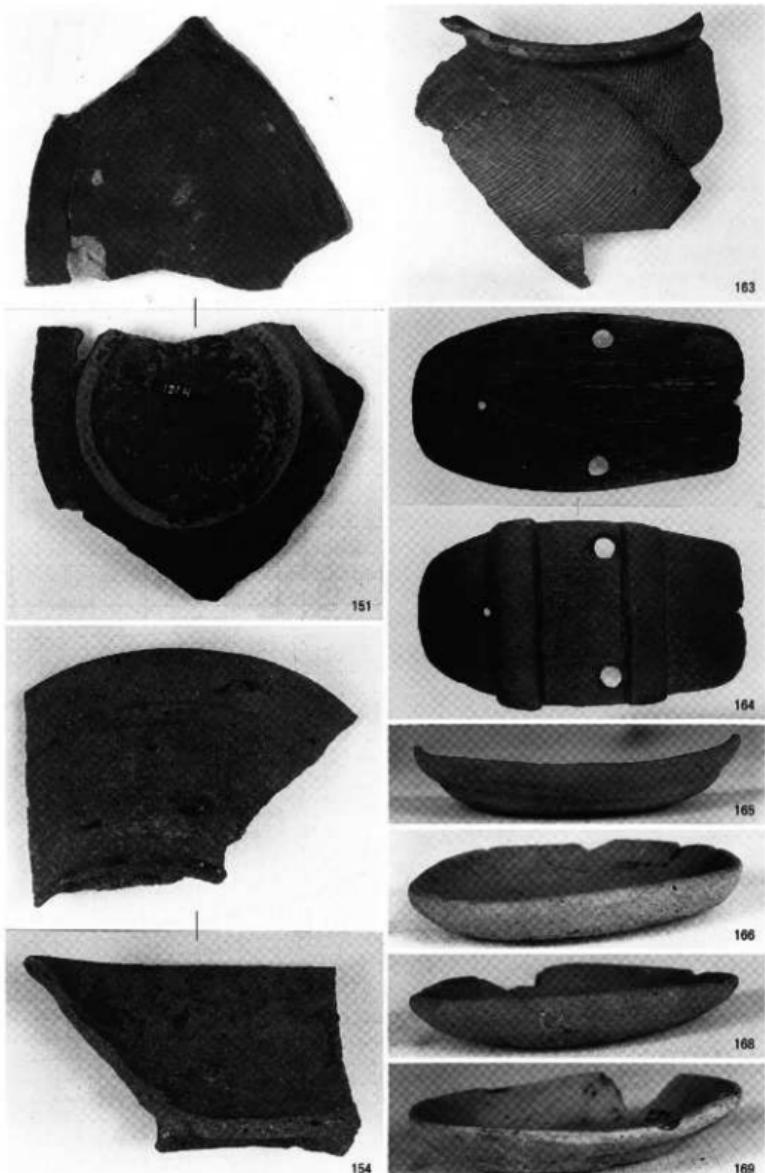
148



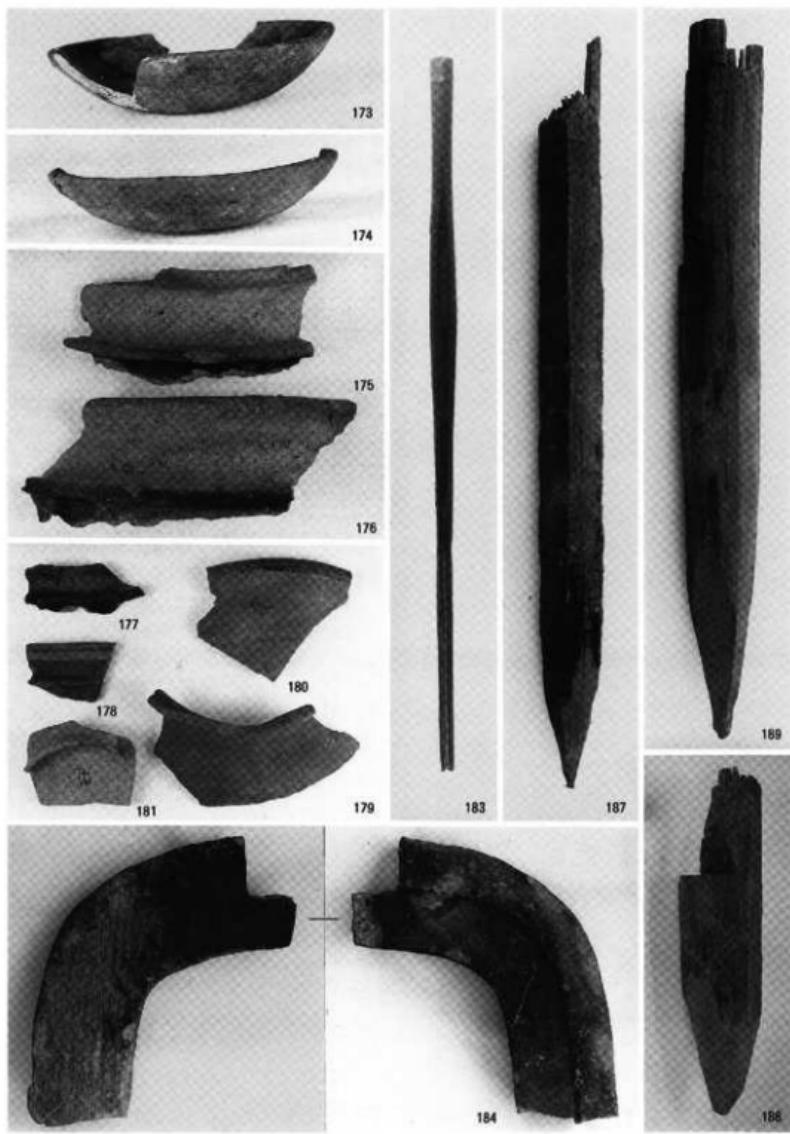
152



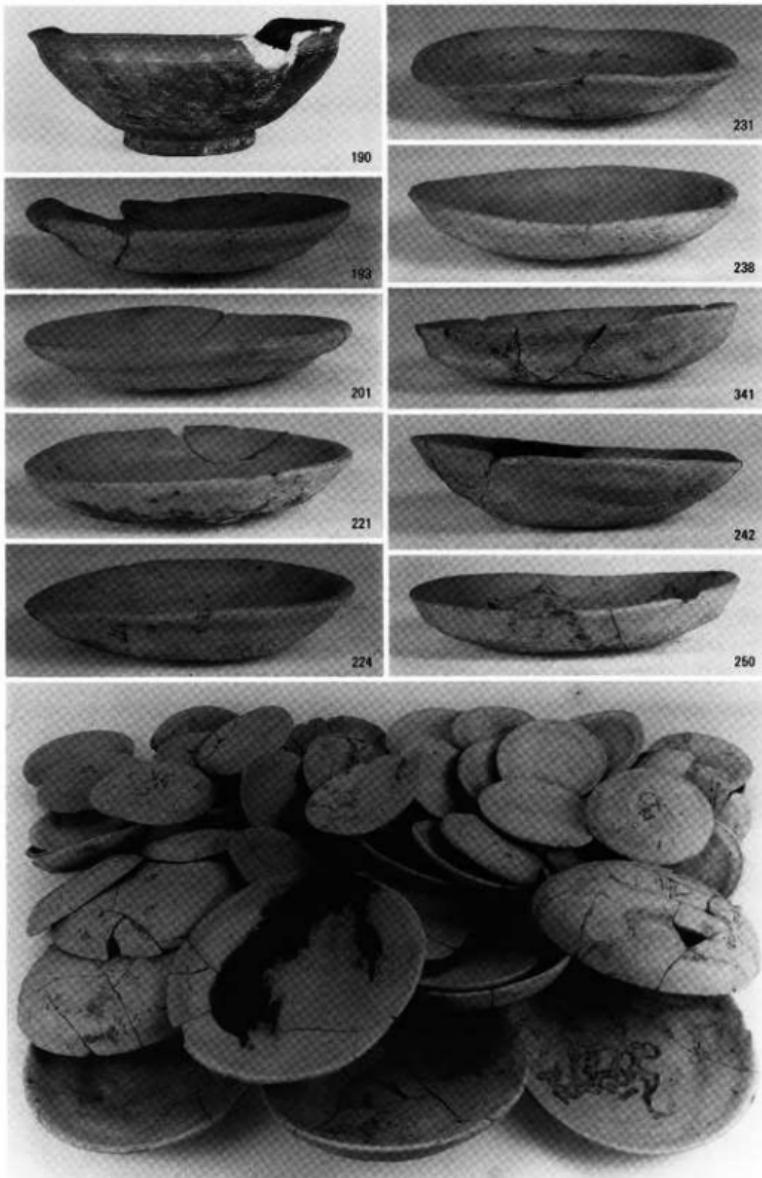
153



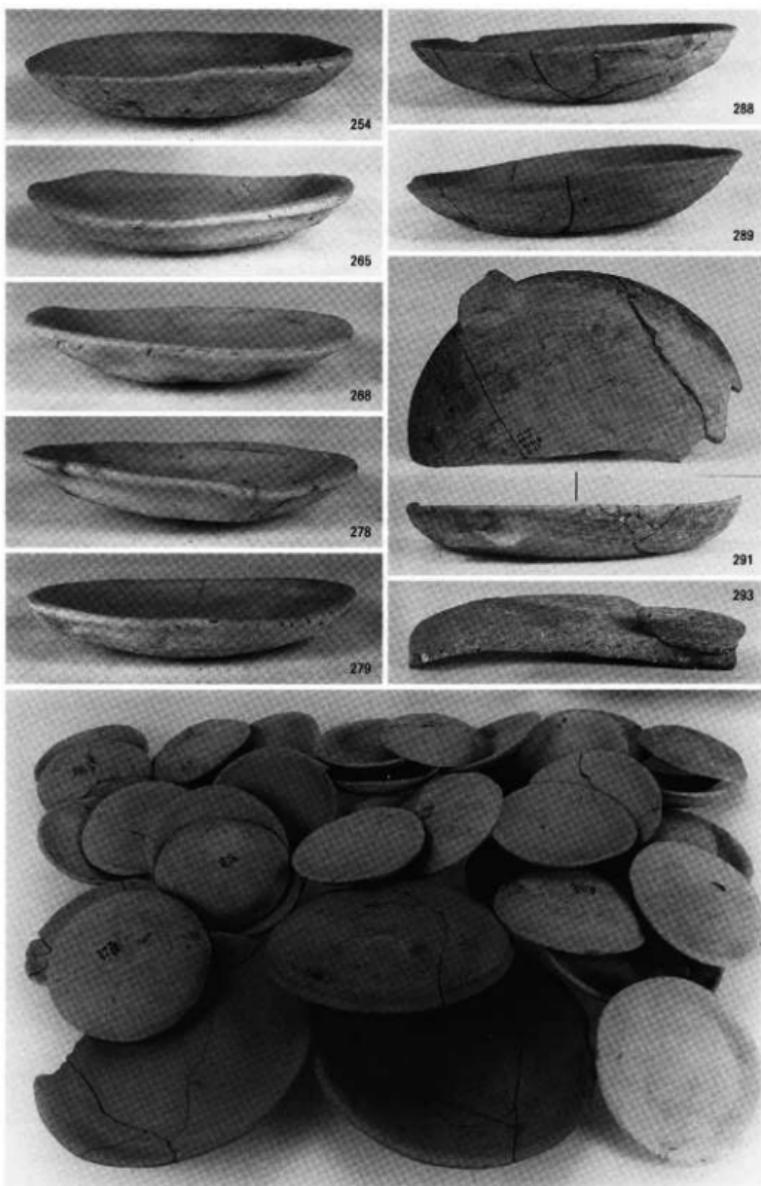
S D 206 (151 • 154 • 163 • 164), S D 207 (165 • 166 • 168 • 169)



S D 207



S D302 (190)、S W301 (他)



第8層 (291・293)、S W302 (他)

IV 中田遺跡第24次調査 (NT94-24)

調査文書

例　　言

- 1、本書は、八尾市刑部4丁目210-1で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
- 1、本書で報告する中田遺跡第24次調査(NT94-24)の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第151号 平成6年3月25日)に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が安堂清長氏から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は平成6年4月13日から平成6年4月26日(実働10日間)にかけて、原田昌則を担当者として実施した。面積184m²を測る。調査においては大見康裕・辻野優子・浜田千年・平沼寿隆・與儀徳保が参加した。
- 1、内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成7年5月31日に完了した。
- 1、本書作成に関わる業務は遺物実測ー辻野・沢村妙子・田島和恵、図面レイアウトー原田、図面トレースー北原清子、遺物写真撮影ー成海佳子が行った。
- 1、本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1 はじめに.....	85
2 調査概要.....	86
1) 調査の方法と経過.....	86
2) 基本層序.....	86
3) 検出遺構と出土遺物.....	88
3 まとめ.....	94

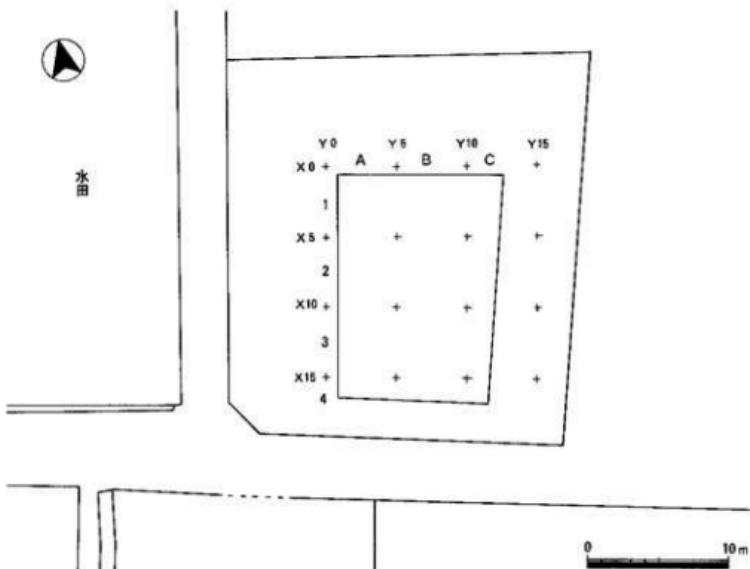
IV 中田遺跡第24次調査 (NT94-24)

1 はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田1～6丁目、刑部1～4丁目、八尾木1～6丁目付近の東西1.1km・南北0.8kmがその範囲とされている。

地理的には長瀬川と玉出川に挟まれた低位冲積地の標高10～11m付近を中心と展開している。当遺跡周辺にはこれらの地理的条件を背景として、南に東弓削遺跡、西に矢作遺跡、北西に成法寺遺跡、北に小阪合遺跡が近接する位置に存在しており、遺跡分布が比較的密な地域であることが指摘できる。当遺跡内では、昭和45年以降、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施されており、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

このような情勢下、安堂清長氏から八尾市刑部4丁目210-1において共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財課に提出された。この地点は中田遺跡範囲の東部に位置しており、



第1図 調査区設定図

近隣では、昭和54年に市教育委員会が南西約130m地点で実施した発掘調査で、古墳時代初頭に比定される吉備系土器群が多量に出土している。さらに、北西側に隣接する地点で平成5年に当調査研究会が行った発掘調査(NT93-17)においても、吉備地方の特殊器台に影響された弥生時代後期の大形装飾器台3点が出土しており、前記調査地点と共に吉備地方に関連した遺物が数多く出土する地域として注目されていた。このような既往調査の結果を踏まえて、平成6年3月14日に八尾市教育委員会により遺構確認調査が実施された結果、弥生時代後期から中世に至る遺物包含層の存在が確認された。以上の経過を経て発掘調査を実施することに至ったもので、発掘調査は事業者・八尾市教育委員会・当調査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき、当調査研究会が事業者から委託を受けて実施した。現地での発掘調査期間は、平成6年4月13日から平成6年4月26日までの10日間である。調査面積は184m²を測る。内業整理および本書作成にかかる業務は、調査終了後平成7年5月31日まで随時実施した。(調査位置図はP-3参照)

2 調査概要

1) 調査の方法と経過

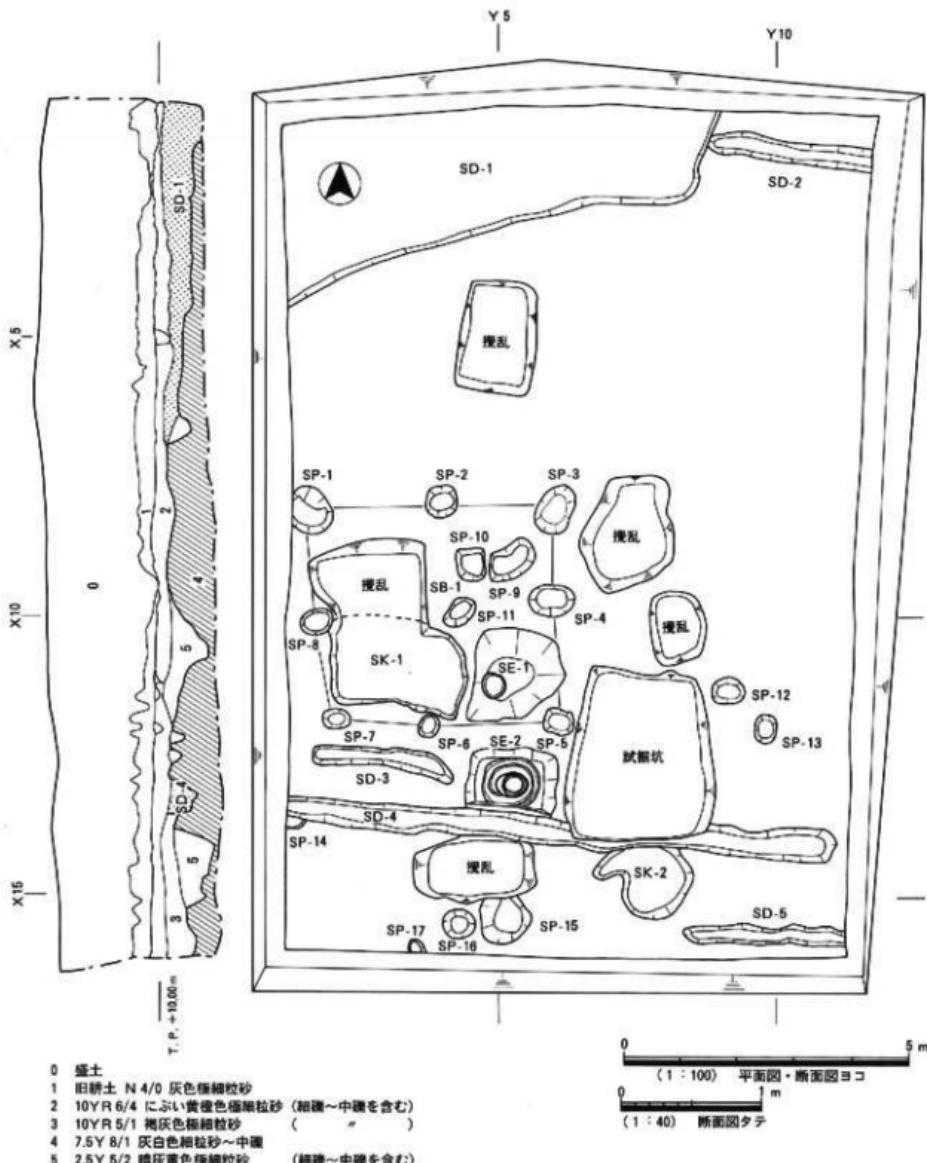
今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、建物の基礎工事で破壊される部分の東西16m、南北11.5mを調査対象とした。調査地の地区割については、調査地の北西隅のX 0・Y 0地点を基点として東西15m、南北20mにわたって設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向はアルファベット(西からA～C)、南北方向は算用数字(北から1～4)で示し、地区の表示は1A～4C区と呼称した。地点の表示には、東西線(X 0～X15)・南北線(Y 0～Y15)の交点の数値を使用した。掘削に際しては、表上下0.6m前後までを機械掘削した後、以下0.2mについては層理に従って人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。その結果、表下0.8～0.9m前後(標高9.90m前後)に存在する第4層上面で、平安時代末期に比定される掘立柱建物1棟(SB-1)、井戸2基(SE-1・SE-2)、土坑2基(SK-1・SK-2)、溝5条(SD-1～SD-5)、小穴17個(SP-1～SP-17)を検出した。遺物は遺構内および第2層・第3層からコンテナ箱に3箱程度が出土している。

2) 基本層序

表上下0.8～0.9m付近で埋没河川が検出されており、この部分では粗粒砂～中疊を主体とする層相が認められた(第4層)。上層の第2層・第3層においても第4層の影響を受けたためか、細疊～中疊が優勢な層相であった。全体で4層を確認した。

第0層 盛上。層厚0.5～0.7m。上面の標高はT.P.+10.7～10.9m。

第1層 旧耕土。N 4/0灰色極細粒砂。層厚0.15m前後。



第2図 検出遺構平面図

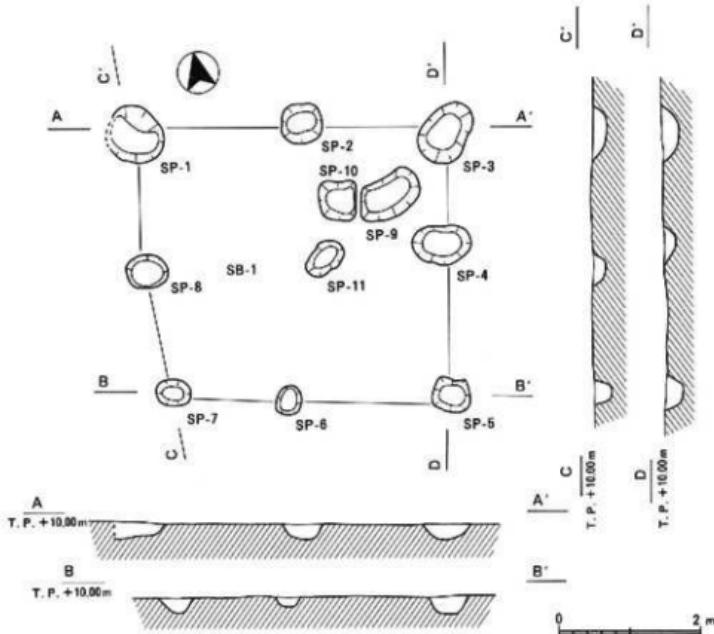
- 第2層 10YR 6 / 4 にぼい黄橙色細礫～中礫混じり極細粒砂。層厚0.1m前後。古墳時代後期～近世に至る遺物を極少量含む。
- 第3層 10YR 5 / 1 褐灰色細礫～中礫混じり極細粒砂。層厚0.1～0.2m。一部、欠損する部分がある。弥生時代後期～平安時代末期に至る遺物を少量含む。
- 第4層 7.5Y 8 / 1 灰白色細粒砂～中礫。層厚1.2m以上。河川堆積土。弥生時代後期の遺物を含む。上面が平安時代末期の遺構検出面。

3) 検出遺構と出土遺物

掘立柱建物 (SB)

SB-1

2・3AB区で検出した。SP-1～SP-8で構成されている。東西2間(4.0～4.4m)×南北2間(3.9m)の規模を測る。主軸方向はほぼ磁北で、床面積は約16.4m²を測る。建物を



第3図 SB-1 平断面図

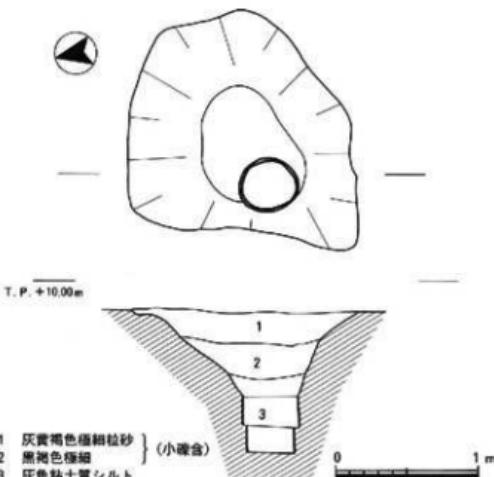
構成する柱穴は、上面の形状が円形および楕円形を呈しており、径0.46~0.9m・深さ0.14~0.25mを測る。埋土は褐色細粒混じり細粒砂である。遺物はSP-2・3・5・7・8から弥生土器、土師器、須恵器の小片が極少量出土している。

井戸 (SE)

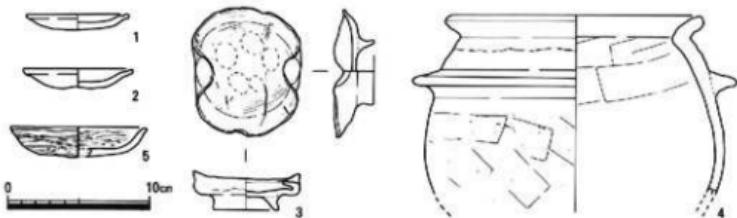
SE-1

3AB区で検出した。掘形の平面形状が不定形を呈する曲物積み上げ井戸で、東西幅1.58m、南北幅1.6m、深さ1.0mを測る。井戸側は、掘鉢状に掘られている掘形の南西部に設置されている。調査時点では最下段の井戸側（曲物・径35cm・高さ19cm）のみが遺存していた。埋土は、断面形状に沿って3層（第1層～第3層）が堆積しており、最下層の第3層は炭を含む灰色粘土質シルトである。遺物は第1層～第3層から土師器小皿・台付き耳皿・土釜、瓦器椀・瓦器小皿の小片が少量出土している。そのうち図化し得たものは、土師器小皿（1・2）・台付き耳皿（3）・土釜（4）、瓦器小皿（5）の5点である。（1・2）はともに1/6程度が遺存する土師器小皿の小片である。いわゆる「て」字状口縁を有する土師器小皿の最終段階の形態を呈するものである。胎土はともに精良で、色調は（1）が明灰白色、（2）が淡黄褐色である。（3）は高台付き耳皿で完形品である。口径9.2cm、器高2.8cm、高台径4.8cm、高台高1.0cmを測る。全体に丁寧な作りであるが、内底面には高台との接合の際に内側から押えたため生じた指頭大のくぼみが5ヶ所認められる。胎土は精良で色調は灰白色である。（4）は口縁部の1/4程度が遺存する土師器土釜である。

鉢は断面三角形ではなく水平に貼付
けられているが、上部の調整は丁
寧でなく、一部には指頭整形によ
る圧痕が残されている。胎土には
石英・長石・チャートの小砂粒が
多量に含まれている。色調は茶灰
色である。（5）は1/4程度が遺
存する瓦器小皿である。体部外
面および底部内面に密なヘラミガキ
が施されている。胎土は精良で色
調は淡灰色を呈する。出土遺物の
特徴から、井戸の廃絶時期は12世
紀前葉の一時期が推定される。



第4図 SE-1 平断面図



第5図 SE-1出土遺物実測図

SE-2

SE-1の南側で検出した。SE-1と同様、曲物積み上げ井戸である。掘形の南部はSD-4により切られているが、検出部分からみて平面形状は隅丸方形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.58m、南北幅1.1m、深さ1.16mを測る。井戸側は摺鉢状を呈する掘形のはば中央部に設置されており、調査時点では曲物4段が遺存していた。埋土は6層（第1層～第6層）から成る。遺物は第3層を除く各層から、土師器小皿・中皿、瓦器椀・小皿、須恵器鉢の小片が少量出土している。

そのうち、岡化し得たものは土師器小皿（6）・中皿（7）、瓦器椀（8）・小皿（9・10）の5点である。（6）は1/4程度が遺存する土師器小皿である。内面および口縁部外面はヨコナデ、他はナデを施す。

胎土は精良で色調は淡茶色である。（7）は復元口径が15.2cmを測る土師器中皿である。口縁端部はヨコナデのため側面に明瞭な面を有する。

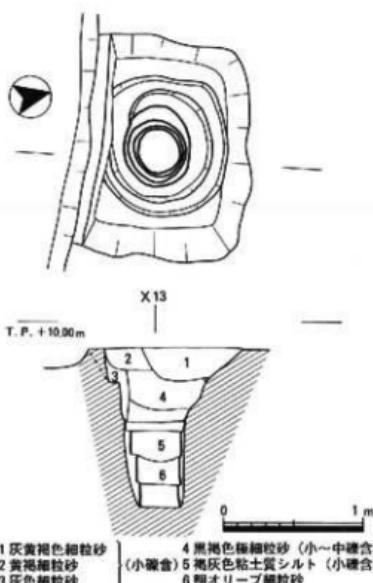
胎土は精良で色調は淡茶灰色である。（8）は復元口径が14.4cmを測る瓦器椀である。体部外

面および体部内面は密なヘラミガキ、見込みには格子状ヘラミガキが施されている。胎土は精

良で色調は淡灰色である。（9・10）は瓦器小皿で、ともに1/10程度が遺存する小片である。

口縁部は（9）が斜上方に伸び、（10）は外反して伸びる。（10）は底部外面以外にヘラミガ

キが施されている。2点ともに胎土は精良で、色調は黒灰色である。遺物の特徴から井戸の廃



第6図 SE-2平断面図

絶時期は12世紀中葉の一時期が推定

される。

土坑 (SK)

SK - 1

3 A区で検出した。北部が擾乱されており全容は不明である。検出部分では東西方向に長い不整方形を呈している。東西幅2.39m、南北幅1.5m、深さ0.1mを測る。埋土は褐灰色細粒砂の單一層である。遺物は古墳時代後期～奈良時代の土師器甕、須恵器杯身のほか、平安時代末期の土師器小皿の小片が少量出土している。

SK - 2

3・4 B区で検出した。不定形を呈するもので、北部はSD-4に切られている。検出部分で、東西幅1.79m、南北幅1.22m、深さ0.14mを測る。埋土は2層から成る。遺物は土師器小皿、瓦器碗の小片が少量が出土しているが時期は明確でない。

溝 (SD)

SD - 1

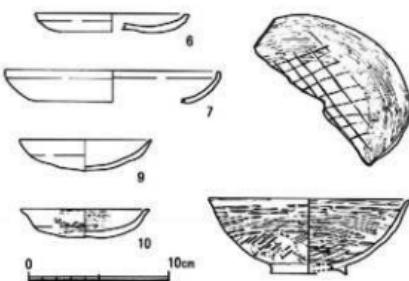
調査区の北部で検出した。北肩は調査区外に至るため不明である。検出部分では東西方向に直線的に伸びるもので、東端部分で屈曲し北東方向に流路を変えている。検出長7.4m、幅1.82～3.3m、深さ0.11mを測る。埋土は2層から成る。遺物は弥生時代後期の甕・高杯、古墳時代後期の土師器甕・高杯、須恵器杯蓋・甕、平安時代末期の土師器小皿・瓦器碗が出土しているがいずれも小片化したものである。

SD - 2

調査区の北東部で検出した。東西方向に伸びるもので、東部は調査区外に至る。検出長2.42m、幅0.36m、深さ0.12mを測る。埋土は灰黄褐色中疊混じり極細粒砂の單一層である。遺物は古墳時代後期の土師器甕・高杯、須恵器甕・甕、平安時代末期の土師器小皿等の小片が少量出土している。

SD - 3

3 A区で検出した。東西方向に伸びるもので、全長2.53m、幅0.33～0.4m、深さ0.11mを測る。埋土は灰黄褐色中疊混じり極細粒砂の單一層である。遺物は土師器・須恵器の小片が極少量出土したが時期は明確でない。



第7図 SE-2 出土遺物実測図

SD-4

3 A区から3 C区にかけて東西方向に直線的に伸びるもので、西部は調査区外に至る。西からSP-14・SE-2・SK-2を切っている。検出長9.65m、幅0.5m前後、深さ0.12~0.15mを測る。埋土は上層の褐灰色極細粒砂と下層の灰色中粒砂の2層である。遺物は土師器・須恵器・瓦器の小片が少量出土している。

SD-5

調査地の南東部で検出した。東西方向に直線的に伸びるもので東部は調査区外に至る。検出長2.9m、幅0.27m、深さ0.06mを測る。埋土は灰色細粒砂の單一層である。遺物は土師器の小片が少量出土したが時期は明確でない。

小穴 (SP)

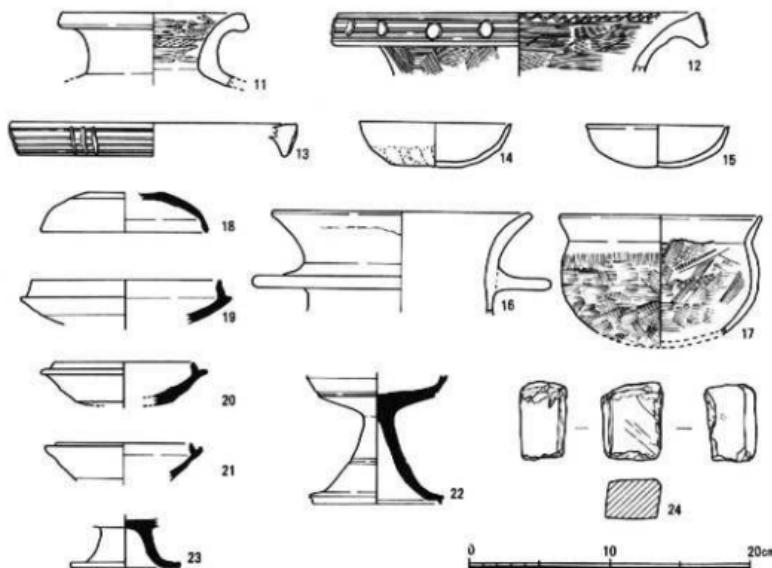
小穴は総数で17個 (SP-1~SP-17) を検出した。概ね、調査区の中央部から南部にかけて検出されている。そのうち、SP-1~SP-8は掘立柱建物 (SB-1) を構成する柱穴である。これらを除いた小穴9個SP-9~SP-17は、上面の形状では円形・楕円形・隅丸方形に区別できる。規模は、SP-9・SP-15が幅0.9mでやや大型である以外は、幅0.5m前後のものが中心である。深さは、0.04~0.2mで比較的浅いものが多い。埋土は褐灰色小礫混じり細粒砂の單一層である。遺物はSP-2・3・5・7・8・10・13~15から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器の小片が極少量出土している。

包含層出土遺物

第3層を中心としてコンテナ箱2箱程度が出土した。全体に小破片で出土したものが大半を占めている。時期的には弥生時代後期、古墳時代後期~奈良時代、平安時代末期から鎌倉時代初頭に比定されるものに大別される。そのうち、図化したものは14点 (11~24) である。

弥生時代後期のものとしては、3点 (11~13) 図化した。(11) は口径12.8cmを測る広口壺である。口縁部が外反して伸びるもので、端部は重下して面を有する。牛駒山西麓産の特徴とされる茶褐色の色調で、長石・角閃石・黒雲母が多量に含まれている胎土が使用されている。(12) は口縁部が垂下し、外面に面を持つ広口壺である。復元口径25.7cmを測る。口縁部外面に5状の沈線を巡らせた後、円形浮文が等間隔に貼り付けられている。口縁部内面はハケナデの後1条の波状文さらに2本の沈線を隔てて5本を1単位とする波状文が施文されている。胎土および色調は (11) と同様である。(13) は垂下する口縁部の小片で、器種は広口壺ないしは器台等が考えられる。口縁端面には4本の沈線を巡らした後、3本を1単位とする棒状浮文が設けられている。なお、棒状浮文・口縁端部下半・口縁部内面の一部に赤色顔料が塗布されている。胎土ならびに色調は (11) と同様である。

古墳時代後期から飛鳥時代に比定されるものは11点 (14~24) 図化した。(14・15) は復元



第8図 第3層出土遺物実測図

口径が10cm前後を測る土師器壺である。口縁端部が尖り気味で終る(14)と口縁端部が小さく外反し外面に沈線が巡る(15)がある。2点ともに胎土は精良で、色調は(14)が赤茶色、(15)が明橙色である。(16)は土師器上釜である。口縁部は外反して伸びるもので、鉢は水平方向に貼り付けられている。色調は茶灰色で、胎土には長石・角閃石・赤色酸化土粒が含まれている。(17)は復元口径14.4cm、器高9.4cmを測る小型甌である。体部外面は下位が乱方向、中位が横方向、上位が縦方向に密なハケナテ調整が行われている。赤茶色の色調で胎土には石英・長石・赤色酸化土粒が少量含まれている。(18)は1/6程度が遺存する須恵器杯蓋である。偏平な器形で口縁部は下外方に下り端部は丸い。(19~21)は須恵器杯身である。3点ともに1/4程度が遺存している。(19)は立上りが内傾して伸びた後直立し、受部は水平に短く伸びる。(20・21)は立上りが内傾して短く伸びる。受部は水平に短く伸びる(20)と内湾して上方に伸びる(21)がある。(22)は須恵器高杯で脚部は完存している。裾部径は9.0cm、脚部高は6.4cmを測る。胎土には0.1~1mm大小の小砂粒が多量に含まれている。焼成は堅緻で裾部外面および杯部内面に灰かぶりが認められる。色調は灰白色である。(23)は短脚の須恵器高杯である。裾部径7.8cm、脚部高3.8cmを測る。図化した須恵器類は(18~23)は概ね6世紀末~7世紀中葉に比定される。(24)は4面に使用面を認める砥石で、石材は流紋岩である。

3 まとめ

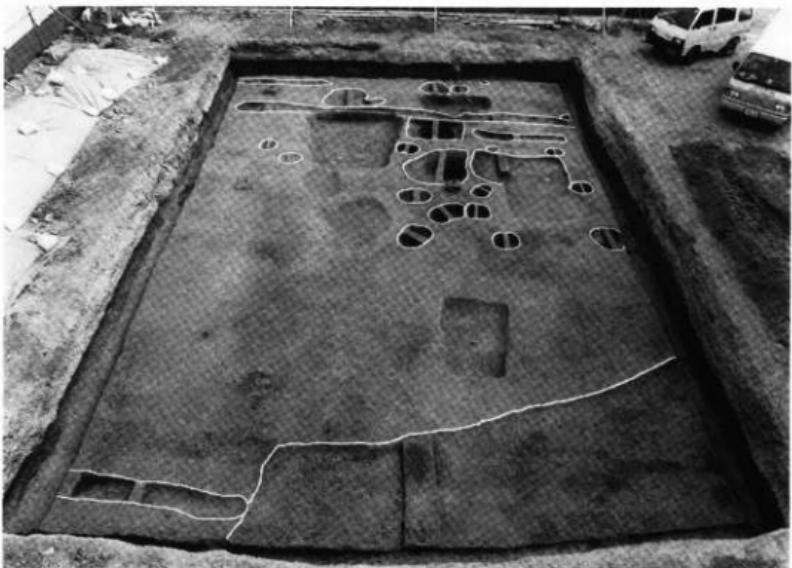
今回の調査では、小面積にもかかわらず、弥生時代後期から平安時代末期の遺物を含む包含層の存在と平安時代末期の居住域を構成する遺構を検出した。遺構を検出した第4層上面は、埋没自然河川の上面に対応するもので、下層確認調査においては少なくとも1.2m以上の堆積が認められた。層相は、上部に細礫～中礫が混在し、下部では粗粒砂が優勢であることから、比較的流勢の早い自然河川であったことが推定される。上部を中心として弥生時代後期の遺物が出土していることから、この時期以前の埋没自然河川と考えられる。なお、同様の土層の広がりは、北西部の近接する位置で実施された発掘調査（NT93-17）^{註1}では確認されていないことから、流路は南北方向に伸びるもので、その西端が当調査地の西部付近にあったものと考えられる。東部については、調査地から東300m地点に位置する玉串川にかけて自然堤防が形成されており、今回検出した自然河川もIH玉串川に関連した河川の可能性もあり、今後も付近の調査には注意を払う必要があろう。

一方、平安時代末期の遺構については、掘立柱建物を中心とする居住域を検出した。検出した井戸2基はSE-1が12世紀前葉、SE-2が12世紀中葉に比定されるもので、約半世紀にわたって集落が営まれていたことが明らかとなった。特に12世紀中葉段階においては、掘立柱建物（SB-1）・井戸（SE-2）・溝（SD-4）を1単位とする遺構配置が想定される。これらの遺構以外にも南壁面には数多くの小穴の存在が確認でき、集落がさらに南部一帯に広がっていたようである。なお、調査地の南に近接する位置に、御剣神社が鎮座していることから、今回検出した集落はこれらを中心に展開していたことが推定される。

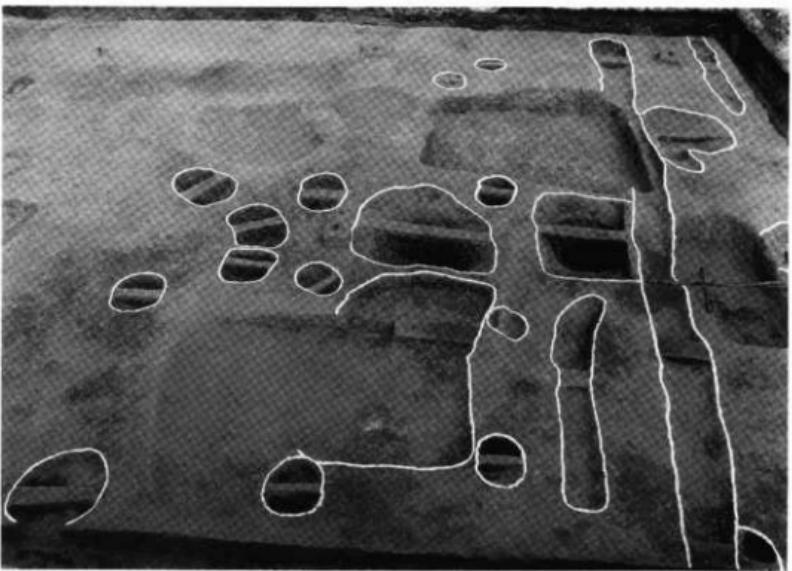
註

註1 高荻千秋 1993「II中田遺跡（第17次調査）」『姫八尾市文化財調査報告43』姫八尾市文化財調査研究会

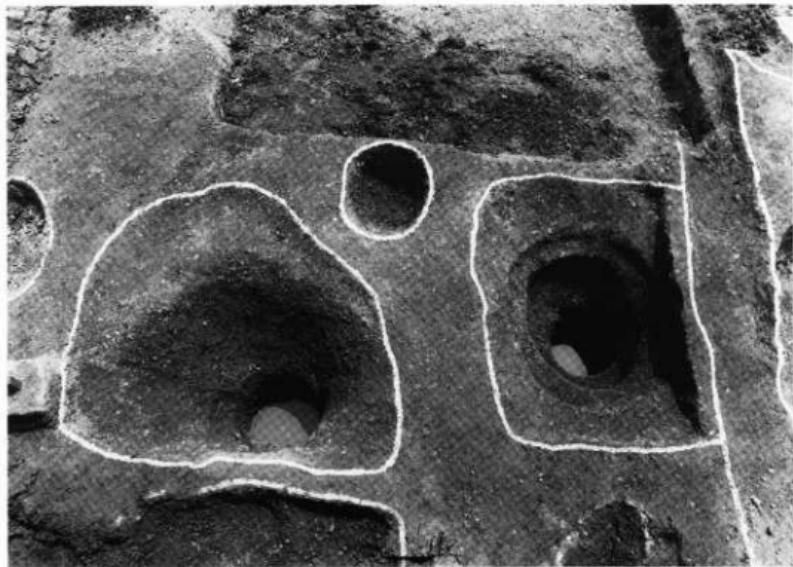
図 版



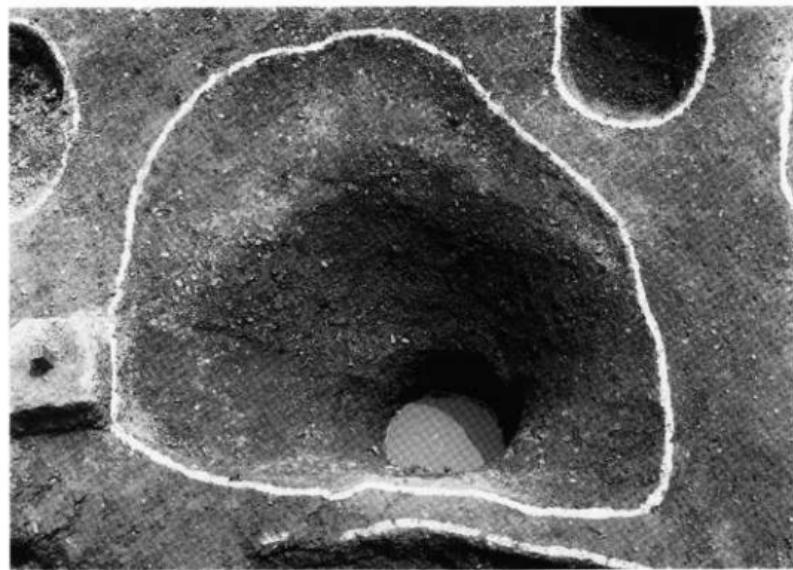
調査区全景（北から）



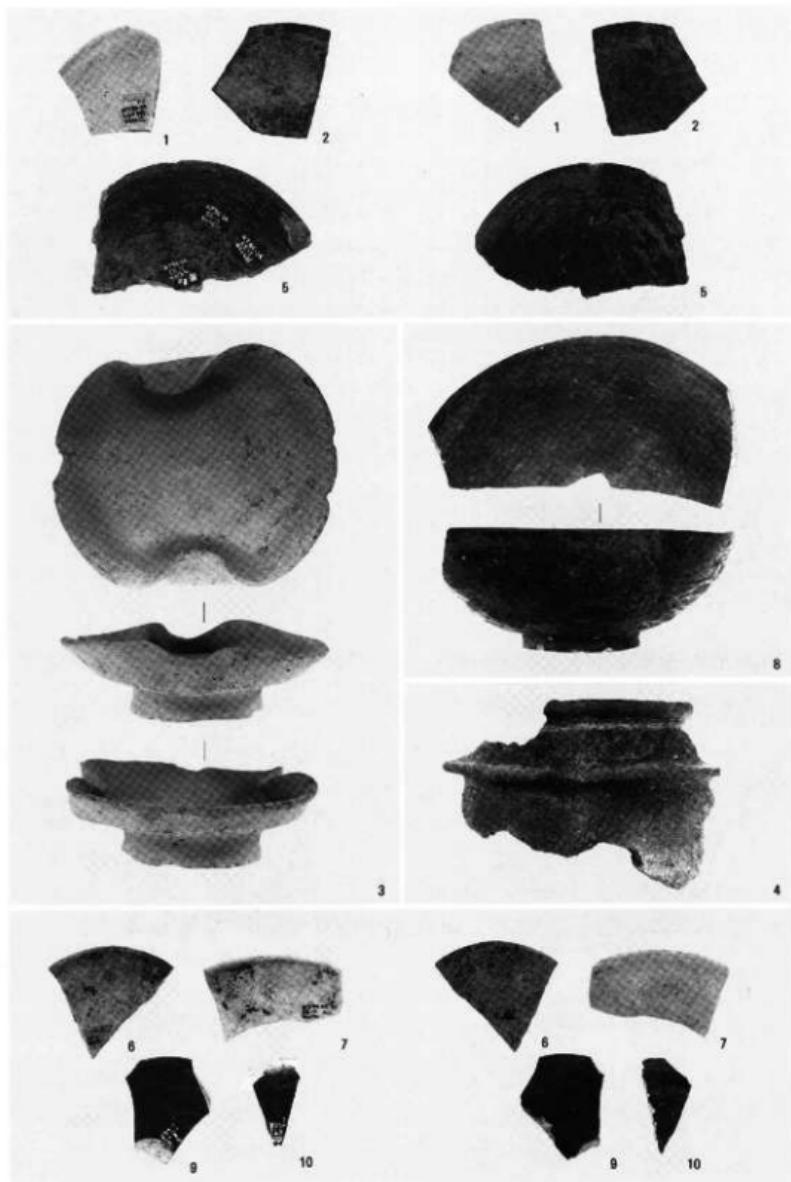
SB-1 検出状況（西から）



SE-1・SE-2検出状況（西から）



SE-1検出状況（西から）



SE-1 (1~5)・SE-2 (6~10) 出土遺物



第3層出土遺物

V 中田遺跡第28次調査 (NT94-28)

六月

例　　言

- 1、本書は八尾市刑部2丁目地内で実施した公共下水道工事（平成6年度第5工区）に伴う発掘調査である。
- 1、本書で報告する中田遺跡第28次調査（NT94-28）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋297-3号 平成6年9月22日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は平成6年11月18日から12月5日（実働4日間）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は20.96m²を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。
- 1、内業整理は、現地調査終了後実施し平成7年7月31日に終了した。
- 1、本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー中西、西村（和）、西村（公）が行った。
- 1、本書の執筆、編集は西村（公）が行った。

目　　次

1 はじめに.....	95
2 調査概要.....	96
1) 調査の方法と経過.....	96
2) 検出遺構と出土遺物.....	96
3 まとめ	102

V 中田遺跡第28次調査 (NT94-28)

1 はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置する遺跡で、中田1～6丁目、八尾木北1～6丁目、刑部1～4丁目付近にあたる。地理的には河内平野のほぼ中央部を流れる長瀬川と玉串川に挟まれた冲積地にあたる。当遺跡の西には矢作遺跡が、南には東弓削遺跡が、北には小阪合遺跡がある。

当遺跡内では、当調査研究会が27件の調査を行っている他、大阪府教育委員会文化財保護課、八尾市教育委員会文化財室により調査が実施されており、弥生時代～近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回調査を行った場所は、八尾市刑部2丁目地内で、平成2年度に当調査研究会が実施した第6次調査地に隣接している。従来から当調査地近辺では発掘調査が行われており、弥生時代から近世に至るまでの構構及び遺物が出土している。このことから、今回の工事に伴い発掘調査を実施するに至ったもので、事業者、八尾市教育委員会文化財課、財団法人八尾市文化財調



第1図 調査地周辺図

査研究会との間で取りかわした三者協定に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が事業者から委託を受けて実施した発掘調査である。現地発掘調査の期間は平成6年11月18日～12月5日で、調査面積は20.96m²を測る。

2 調査概要

1) 調査の方法と経過

調査地は、到達立坑が1箇所と中間立坑が3箇所あり、到達立坑を軸に

1、中間立坑を西からNo.2～No.4とした。

調査に際しては、周辺の調査結果をもとに、現地表下0.8mまでに存在する盛土を機械で掘削し、以下約0.8mは人力と機械を併用して掘削を行い調査を実施した。

また、到達立坑部分は、現地表下約4.0mまでの下層確認調査を実施した。

2) 検出遺構と出土遺物

No.1

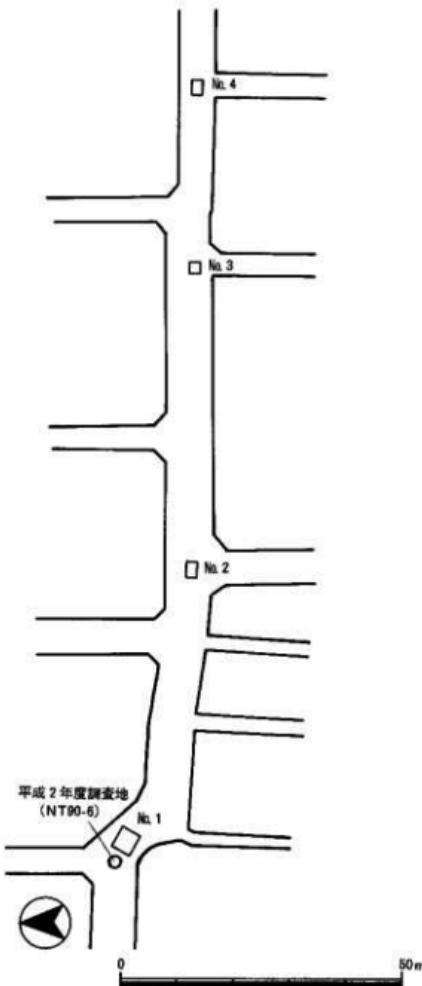
4×4mの到達立坑掘削工事の調査区である。

① 基本層序

第0層 盛土（上面標高T.P.+10.6m）。層厚0.7m。

第1層 暗灰色（N 3 /）細砂混粘土（旧耕作上）。層厚0.1m。

第2層 暗灰色（10YR 4 / 1）細砂混粘土。層厚0.15m。
鎌倉時代末期頃の遺物包含層。



第2図 調査位置図

第3層 黒褐色 (10YR 3/1) シルト混粘土。層厚0.1m。

平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺物包含層。

上面で溝1条 (SD-101) 検出した。

第4層 黒色 (5Y 2/1) 粗砂混粘土。層厚0.15~0.4m。

奈良時代の遺物包含層。

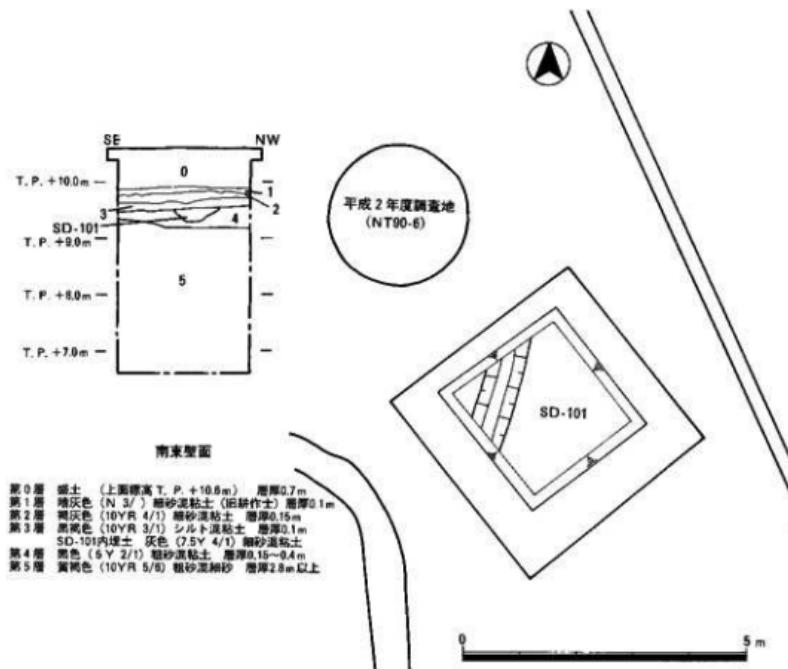
第5層 黄褐色 (10YR 5/6) 粗砂混細砂。層厚2.8m以上。

② 検出遺構・出土遺物

溝 (S D)

SD-101

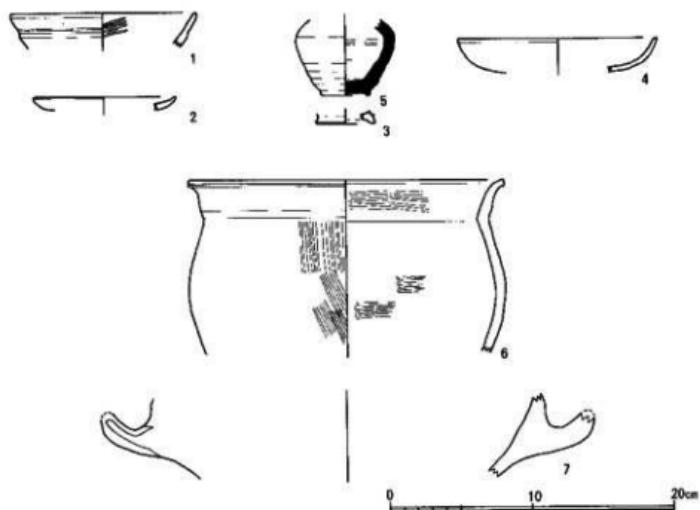
南北方向に伸びるもので、幅0.7m、深さ0.25mを測る。埋土は灰色 (7.5Y 4/1) 細砂混粘土で、溝内からは瓦器の椀 (1)、土師器の皿 (2) が出土した。



第3図 No.1 平断面図

また第3層内からは、瓦器の甃（3）、土師器の皿（4）、須恵器の壺（5）が、第4層内からは、土師器の甃（6）・鍋（7）が出土した。

第5層以下は粗砂混細砂層が現地表下4.0mまで堆積していた。この層内からの遺物の出土はなかった。



第4図 №.1 SD-101 (1・2) 第3層 (3～5) 第4層 (6・7) 出土遺物実測図

No.2

東西2m×南北1.5mの中間立坑掘削工事の調査区である。

① 基本層序

第0層 盛土 (上面標高T.P.+10.7m)。層厚0.7m。

第1層 暗灰色 (N 3 /) 細砂混粘土 (旧耕作上)。層厚0.1m。

第2層 灰黄褐色 (10YR 6 / 2) シルト混粘土。層厚0.2m。

第3層 褐灰色 (10YR 4 / 1) 細砂混粘土。層厚0.3m。

平安時代末期頃から鎌倉時代の遺物包含層。

第4層 黄橙色 (10YR 7 / 8) シルト混粘土。層厚0.3m以上。

上面で小穴1個 (SP-101) と溝1条 (SD-101) を検出した。

② 検出遺構と出土遺物

小穴 (S P)

SP-101

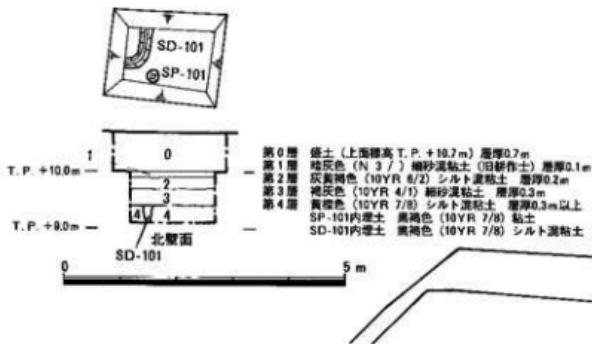
径0.2m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色(10YR 7/8)粘土で、小穴内からは、瓦器の楕(8)が出土した。

溝 (S D)

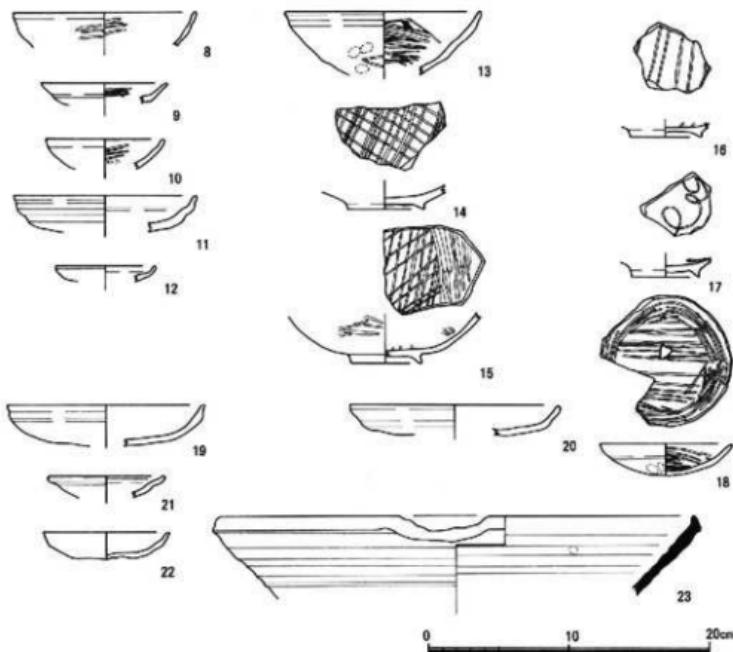
SD-101

南北方向に伸び、溝の南側は西に折れ曲がるもので、幅0.2m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色(10YR 7/8)シルト混粘土で、溝内からは瓦器の小皿(9・10)、土師器の皿(11・12)が出土した。

遺構面直上の第3層内からは、瓦器の楕(13~17)、瓦器の小皿(18)、土師器の皿(19~22)、須恵器の片口鉢(23)が出土した。



第5図 No. 2 平断面図



第6図 №.2 SP-101 (8) SD-101 (9~12) 第3層 (13~23) 出土遺物実測図

No. 3

東西2m×南北2mの中間立坑掘削工事の調査区である。

① 基本層序

現地表下0.8mまでは盛土が堆積し、調査地の南側は既設の水道管が埋設されており、本来の堆積土は壊されていた。本来の堆積状況が確認できたのは調査地の北側半分のみである。第3層上面で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。

第0層 盛土（上面標高T.P.+10.9m）。層厚0.8m。

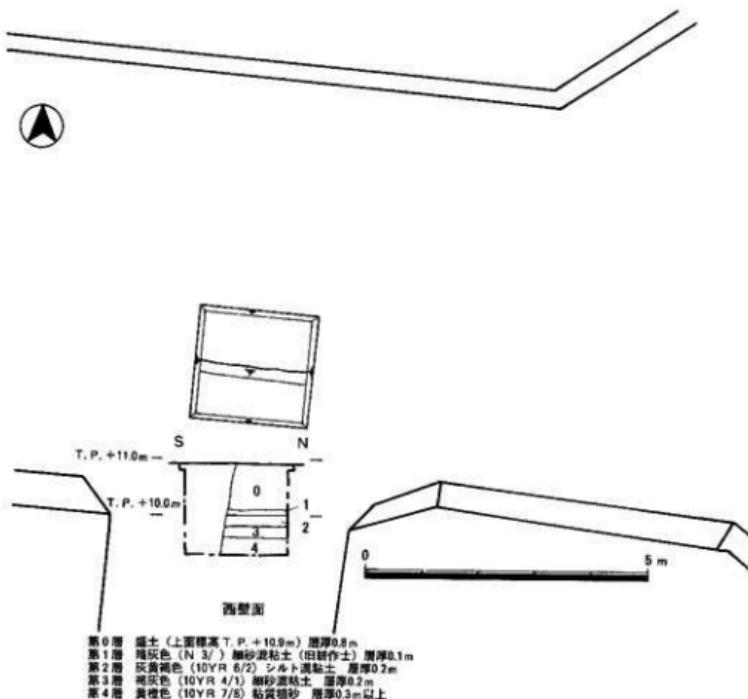
第1層 暗灰色（N 3 /）細砂混粘土（旧耕作土）。層厚0.1m。

第2層 灰黄褐色（10YR 6 / 2）シルト混粘土。層厚0.2m。

第3層 褐灰色（10YR 4 / 1）細砂混粘土。層厚0.2m。

平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺物包含層。

第4層 黄橙色（10YR 7 / 8）粘質粗砂。層厚0.3m以上。



第7図 No.3 平断面図

No.4

東西2m×南北1.5mの中間立坑掘削工事の調査区である。

① 基本層序

現地表下1.2mまでは盛土が堆積しており、本来の堆積土である第1層と第2層は一部壊されていた。また調査地の南側は既設の水道管が埋設されており、本来の堆積土は壊されていた。

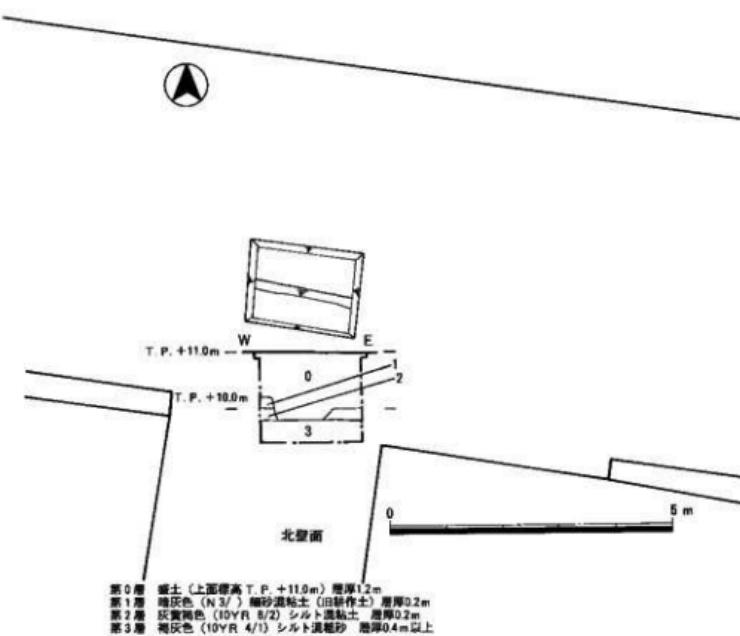
第3層上面で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

第0層 盛土（上面標高T.P.+11.0m）。層厚1.2m。

第1層 墓灰色（N 3 /）細砂混粘土（旧耕作土）。層厚0.2m。

第2層 灰黄褐色（10YR 6 / 2）シルト混粘土。層厚0.2m。

第3層 暗灰色（10YR 4 / 1）シルト混粗砂。層厚0.4m以上。



第8図 №4 平断面図

3まとめ

今回の調査では、№1と№2で平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺構を検出した。また№2では平安時代末期頃から鎌倉時代初頭頃の遺物包含層を確認しており、今回の調査地付近一帯が同時期の集落であったことが判明した。

同時期の遺構は、当調査研究会が平成6年度に行った第24次調査地でも検出しており、少な
くとも南北約100mの範囲内が集落であると推定される。
註1

註1 本書掲載「IV 中田遺跡（第24次調査）」

図 版



No. 1 調査地周辺 (西から)



No. 1 平断面 (北東から)



No. 1 調査状況 (北西から)



No. 1 下層掘削 (北西から)



No. 1 調査地周辺 (南から)



No. 2 平断面 (南から)



No. 3 調査地周辺 (西から)



No. 3 平断面 (東から)



No. 4 調査地周辺（東から）



No. 4 平断面（南から）



6



18



14



23

No. 1 第4層（6） No. 2 第3層（14・18・23）出土遺物

報告書抄録

ふりがな	なかたいせき
書名	中田遺跡
調査名	I 第5次調査 II 第6次調査 III 第8次調査 IV 第24次調査 V 第28次調査
巻次	
シリーズ名	国 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	49
編集者名	I 成海佳子 II 成海佳子 III 幸田真一 IV 原田昌則 V 西村公助
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581 八尾市吉川町4丁目4番18号 TEL 0729-94-4700
発行年月日	西暦1995年11月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査面積
なかたいせき I 中田遺跡 (第5次調査)	おおさかふやおしやおぎきた 大阪府八尾市八尾木丘 1丁目37番2	27212	34度 36分 53秒	135度 36分 53秒	1990.11.26 ~ 1990.12.04	約80	送電鉄塔建て替え
なかたいせき II 中田遺跡 (第6次調査)	おおさかふやおしやおぎきた おさかべ 大阪府八尾市八尾木北3~ 刑部2丁目	27212	34度 36分 41秒 ~42秒	135度 36分 47秒 ~37分 22秒	1991.01.06 ~ 1991.02.15	約180	公共下水道工事
なかたいせき III 中田遺跡 (第8次調査)	おおさかふやおしやおぎきた 大阪府八尾市八尾木北 5丁目98~105	27212	34度 36分 31秒	135度 36分 55秒	1991.11.05 ~ 1991.12.01	約500	温泉旅館新築
なかたいせき IV 中田遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしやおさかべ 大阪府八尾市刑部 4丁目210 1	27212	34度 36分 38秒	135度 37分 22秒	1994.04.13 ~ 1994.04.26	184	共同住宅建設
なかたいせき V 中田遺跡 (第28次調査)	おおさかふやおしおさかべ 大阪府八尾市刑部2丁目地内	27212	34度 36分 41秒	135度 37分 23秒	1994.11.18 ~ 1994.12.05	20.96	公共下水道工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		特記事項	
I 中田遺跡 (第5次調査)	集落遺構	古墳時代前期		土坑	庄内系壇・布留 輪向型などの古式土器	祭祀遺構か 穿孔のある土器	
	生産遺構	平安時代後期以降		土坑・鍛溝			
II 中田遺跡 (第6次調査)	集落遺構	弥生時代後期以前		自然河川	弥生土器		
		古墳時代前期		小穴	古式土師器壺	埋納ビットか 穿孔	
		奈良時代		土坑	土師器鍋	埋納ビットか	
		江戸時代以降		井戸・溝	陶磁碗		
III 中田遺跡 (第8次調査)	集落遺構	平安時代後期		上部器皿集積	土師器皿	地盤祭祀遺構	
		鎌倉時代～ 室町時代		井戸・溝・壺・ 土坑ビット	土師器・瓦器・ 陶磁器・曲物・ 下駄・人形	隙には縄が架 けられている 井戸側面に 墨書き	
IV 中田遺跡 (第24次調査)	集落遺構	平安時代末期		掘建柱建物・ 井戸・土坑・ 小穴	弥生土器・土師 器・須恵器・瓦 器		
		奈良時代		土師器			
V 中田遺跡 (第28次調査)	集落遺構	平安時代末期		小穴・溝	土師器・瓦器		

中田遺跡

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告49

- I 中田遺跡（第5次調査）
- II 中田遺跡（第6次調査）
- III 中田遺跡（第8次調査）
- IV 中田遺跡（第24次調査）
- V 中田遺跡（第28次調査）

発行 1995年11月30日

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市青山町4丁目4番18号
TEL・FAX 0729-94-4700

印刷 明新印刷株式会社
表紙 レザック66 <260kg>
本文 書籍L <70kg>
図版 マットアート <135kg>

